《龍谷大学学友会学術文化局　考古学研究会報告書　第６集》

亀岡盆地における群集墳　Ⅱ

法貴峠古墳群
法貴古墳群
宮条古墳群
宮条南古墳群

２０２２
龍谷大学学友会学術文化局
考古学研究会

1　H19（B1）号墳出土　耳環（京都教育大学所蔵）

2　H18 号墳（右奥）・H19（B1）号墳（中央）・H24 号墳（左奥）

3　左：H19（B1）号墳　石柱
右：亀岡市文化資料館に移築された H19（B1）号墳　組合式石棺

あいさつ

亀岡市に所在する宮条古墳群、宮条南古墳群、法貴峠古墳群、法貴古墳群の古墳の分布と墳丘・横穴式石室の実測の報告書を『亀岡盆地における群集墳Ⅱ』龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会報告書第６集として、ここに刊行いたします。

「考古学研究会」は龍谷大学の学友会学術文化局に所属するサークルです。研究会の設立は 1971（昭和 46）年に遡り、大学内のサークルでも古く歴史をもった存在です。研究会のフィールド調査活動は早い段階から亀岡市域の古墳群の分布調査を中心に定め、進めてきました。その発端となったのは、1980 年前半に現在の京都縦貫道自動車道の前身である国道９号バイパスが計画され、その路線上に古墳群が点在することによる埋蔵文化財保存の活動にありました。

以後、研究会では亀岡市域に分布する古墳群の基礎調査を 1971 年から今日まで毎年継続的に実施してきました。今回の『報告書』は、1998 年から 2009 年にかけての活動報告です。

この『報告書』においては幾つかの新しい知見を得ることが出来ました。それは古墳群の分布数の実情、横穴式石室の構造や玄室の規格などの成果で、北摂地域や北部九州地域との比較検討が可能になり、今後、亀岡市域の後期古墳の研究に寄与できるものと考えます。願わくは、この『報告書』が広く活用され、考古学、古代史研究の一助ならんことを期待します。

最後になりましたが、地元の土地所有者の方々には多くの便宜をはかっていただきました。お礼を申し上げます。また、現地での分布調査や墳丘、横穴式石室の測量調査ならびに調査報告書の刊行にあたって、ご指導・ご協力をいただいた亀岡市教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関と関係各位にお礼を申し上げます。

２０１５年３月３１日

龍谷大学考古学研究会

顧問岡崎晋明

（現：龍谷大学名誉教授）

あいさつ

私ども龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会は、1971年から40年以上にわたって古墳の調査活動を実施してまいりました。

本書は京都府亀岡市にある法貴峠古墳群、法貴古墳群、宮条古墳群、宮条南古墳群の調査記録であります。この4つの古墳群が所在する京都府亀岡市は、京都府の中央部よりやや南に位置しており、東は京都市、南は大阪府高槻市や茨木市、西から北にかけては大阪府豊能郡豊野町や能勢町、京都府南丹市に接しています。亀岡市のほとんどを占める亀岡盆地には、縄文時代以前の遺跡が存在し古くから人々の営みがあります。続く弥生時代・古墳時代、さらに歴史時代においても、その痕跡をたどることができます。本書は、亀岡盆地の古墳時代における生活の営みの終着点であった墓、古墳の調査報告です。

本書に掲載されたこれらの成果が、地域の歴史研究や教育、文化財保護の一助となれば幸いです。

報告書の作成にあたりまして、地元ならびに関係者の皆様をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に対し、末筆ながら感謝の意を表します。

2017年3月31日

龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会

第48期幹事長　和田　淳志

例言

1．本書は龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会が実施した、京都府亀岡市曽我部町中・法貴に所在する法貴峠古墳群、同町森山に所在する法貴古墳群、同町寺に所在する宮条古墳群、同町東桜峠に所在する宮条南古墳群の分布・石室実測・墳丘測量に関する調査報告書である。

2．現地調査は宮条古墳群を 1998 年から 2001 年、宮条南古墳群を 2000 年、法貴峠古墳群を 2002 年から 2006 年、法貴古墳群を 2005 年から 2009 年に、それぞれ本学の春期休暇を利用して序章第 2 節に示したメンバーが行った。整理作業および編集執筆は、2010 年から 2013 年に志田真吾、真鍋貴匡が行った。

3．測量図と実測図の製図、遺物の実測と製図、遺構と遺物の写真撮影は志田・真鍋が担当した。また、以上の作業は、当研究会部長（～ 2011 年）であった岡崎晋明氏（龍谷大学文学部名誉教授）のご指導をいただいた。

4．本書の編集執筆は志田・真鍋が行い、文責は文末に示した。引用参考文献は本文中では次の通りに統一し、参考文献一覧に記した。

凡例…（龍谷 2013）

5．石室実測図・墳丘測量図・遺物の縮尺は下記を基本とした。一部は基本と異なるが、図中のスケールバーとキャプションに縮尺の値を示した。

石室実測図：1/60・1/100

墳丘測量図：1/250・1/300・1/600

遺物実測図：1/2・1/3・1/4

6．遺物番号は、本文・挿図・写真図版・観察表のそれをすべて統一している。

7．遺物は亀岡市教育委員会が、図面・写真等は当研究会が保管する。

8．調査ならびに本書の作成にあたり、下記の方々、機関のご指導・ご助力をいただきました。また、古墳群が所在する土地の所有者の方々には多大なご理解とご協力を賜りました。記して厚く感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

亀岡市教育委員会、亀岡市文化資料館、京都教育大学

今西康宏、岡島俊也、北井利幸、木許守、熊井亮介、熊澤龍一、花熊祐基、濱口芳郎、藤井整、堀真人、吉江崇、吉岡明日美、吉田野乃

本文目次

序　章

第１節　調査の経緯と報告書刊行の目的……1
第２節　調査年次と参加者・作業内容……2
第３節　調査の方法……4
第４節　亀岡盆地の歴史・地理的環境……7

第１章　法貴峠古墳群

第１節　研究史……12
第２節　分布・略測調査の成果……12
第３節　法貴峠２号墳……22
　第１項　位置と墳丘……22
　第２項　横穴式石室……22
第４節　法貴峠９号墳……25
　第１項　位置と墳丘……25
　第２項　横穴式石室……25
第５節　採集遺物……27
第６節　小結……30

第２章　法貴古墳群

第１節　研究史……33
第２節　既往調査の成果……35
　第１項　H19 号墳　出土耳環……35
　第２項　H19 号墳の位置と周辺古墳との関係……35
第３節　分布・略測調査の成果……39
第４節　H12 号墳……50
　第１項　位置と墳丘……50
　第２項　横穴式石室……50
第５節　H18 号墳……53
　第１項　位置と墳丘……53
　第２項　横穴式石室……53

第６節　H21 号墳……56
第１項　位置と墳丘……56
第２項　横穴式石室……56
第７節　H24 号墳……57
第１項　位置と墳丘……57
第２項　横穴式石室……60
第８節　採集遺物……62
第９節　小結……68
第１項　H18 号墳と H24 号墳……68
第２項　法貴古墳群における横穴式石室の変遷……70

第３章　宮条古墳群・宮条南古墳群
第１節　研究史……72
第２節　分布・略測調査の成果……72
第３節　宮条２号墳……77
第１項　位置と墳丘……77
第２項　横穴式石室……79
第４節　宮条 20 号墳……79
第１項　位置と墳丘……79
第２項　横穴式石室……80
第５節　宮条 21 号墳……82
第１項　位置と墳丘……82
第２項　横穴式石室……82
第６節　小結……83
第７節　宮条南５号墳・６号墳……84

第４章　まとめ……85

付参考文献一覧……87

写真

巻頭図版１

1　H19（B1）号墳出土　耳環　（京都教育大学所蔵）

巻頭図版２

2　H18 号墳・H19（B1）号墳・H24 号墳

3　左：H19（B1）号墳石柱

右：亀岡市文化資料館に移築されたH19（B1）号墳組合式石棺

本文中写真

4　京都教育大学所蔵　耳環……34

表目次

第１表　調査年と参加者一覧……2

第２表　調査地と作業の概要……3

第３表　研究会同行物……3

第４表　亀岡市域の古墳……11

第５表　法貴峠古墳群の概要……20

第６表　法貴峠古墳群一覧……21

第７表　法貴峠古墳群採集遺物観察表……29

第８表　法貴古墳群一覧……40

第９表　法貴古墳群の概要……45 ～ 49

第 10 表　法貴古墳群採集遺物観察表……66 ～ 67

第 11 表　宮条古墳群一覧……76

第 12 表　宮条南古墳群一覧……76

挿図目次

第１図　横穴式石室の各部名称……6

第２図　亀岡市の位置と周辺……8

第３図　亀岡市の地理と古墳分布……10

第４図　亀岡盆地における古墳の変遷……11

第５図　法貴峠古墳群の位置……13

第６図　法貴峠古墳群　分布図……14

第７図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（全体）……16

第８図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（個別）①……17

第９図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（個別）②……18

第 10 図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（個別）③……19

第 11 図　法貴峠２号墳　墳丘測量図……23

第 12 図　法貴峠２号墳　石室実測図……24

第 13 図　法貴峠９号墳　石室実測図……26

第 14 図　法貴峠古墳群　採集遺物……28

第 15 図　法貴峠１号墳　石室写真トレース……31

第 16 図　法貴峠古墳群の横穴式石室の先後関係……32

第 17 図　H18 号墳と腰掛ける岩井氏……34

第 18 図　埋葬施設検出状況……34

第 19 図　岩井氏作成法貴古墳群分布地図……34

第 20 図　H19 号墳（B1）　墳丘測量図……34

第 21 図　H19 号墳　出土耳環……35

第 22 図　H19 号墳　周辺測量合成図……36

第 23 図　法貴古墳群の位置……37

第 24 図　法貴古墳群　分布図……38

第 25 図　法貴古墳群　墳丘測量図（全体）……41

第 26 図　法貴古墳群　墳丘測量図（個別）①……42

第 27 図　法貴古墳群　墳丘測量図（個別）②……43

第 28 図　法貴古墳群　墳丘測量図（個別）③……44

第 29 図　H12 号墳　墳丘測量図……51

第 30 図　H12 号墳　石室実測図……52

第 31 図　H18 号墳　墳丘測量図……54

第 32 図　H18 号墳　石室実測図……55

第 33 図　H21 号墳　墳丘測量図……57

第 34 図　H21 号墳　石室実測図……58

第 35 図　H24 号墳　墳丘測量図……59

第 36 図　H24 号墳　墳丘列石……60

第 37 図　H24 号墳　石室実測図……61

第 38 図　法貴古墳群採集遺物①……64

第 39 図　法貴古墳群採集遺物②……65

第 40 図　H18 号墳、H24 号墳　比較図……69

第 41 図　法貴古墳群　石室変遷案……71

第 42 図　宮条古墳群、宮条南古墳群の位置……73

第 43 図　宮条古墳群　分布図……74

第 44 図　宮条南古墳群　分布図……75

第 45 図　宮条２号墳　石室実測図……77

第 46 図　宮条１号墳・２号墳　墳丘測量図……78

第 47 図　宮条 20 号墳・21 号墳　墳丘測量図……80

第 48 図　宮条 20 号墳　石室実測図……81

第 49 図　宮条 21 号墳　石室実測図……83

第 50 図　宮条南５号墳・６号墳墳丘測量図……84

（『新修亀岡市史資料編』第１巻から再トレース）

写真図版目次

図版 1

1　遠景　霊仙ヶ岳（北東から）左：法貴峠古墳群、右：法貴古墳群

2　近景　霊仙ヶ岳（北東から）　法貴峠古墳群

3　近景　霊仙ヶ岳（東から）　法貴古墳群

図版 2

4　法貴峠 1 号墳　墳丘（南から）

5　法貴峠 1 号墳　墳丘（北東から）

6　法貴峠 1 号墳　奥壁裏側露出状況（北東から）

図版 3

7　法貴峠 1 号墳　開口部

8　法貴峠 1 号墳　前壁、袖部

9　法貴峠 1 号墳　袖部

図版 4

10　法貴峠 1 号墳　奥壁

11　法貴峠 2 号墳　墳丘（南から）

12　法貴峠 2 号墳　羨道部天井石架構状況

図版 5

13　法貴峠 2 号墳　前壁、袖部

14　法貴峠 2 号墳　奥壁

図版 6

15　法貴峠 2 号墳　袖部

16　法貴峠 2 号墳右袖（側面から）

17　法貴峠 3 号墳　須恵器散乱状況（ピンポールが須恵器採集地点）

図版 7

18　法貴峠 6 号墳　墳丘（南から）

19　法貴峠 6 号墳　天井石転落状況（西から）

20　法貴峠 9 号墳　墳丘（南東から）

図版 8

21　法貴峠 9 号墳　開口状況

22　法貴峠 9 号墳　羨道部から石室へ

23　法貴峠 9 号墳　袖部

図版 9

24　法貴峠 9 号墳　前壁、袖部

25　法貴峠 9 号墳　奥壁

図版 10

26　法貴峠 10 号墳　墳丘（東から）

27　法貴峠 11 号墳　墳丘（北から）

28　法貴峠 14 号墳　墳丘に散乱するゴミ（東から）

図版 11

29　法貴峠 17 号墳　（南から）

30　法貴峠 17 号墳　石室　玄室左側壁残存状況

31　法貴峠 18 号墳　羨門付近（南から）

図版 12

32　法貴峠古墳群採集遺物

図版 13

33　H 3 号墳　墳丘（南から）

34　H 3 号墳　石室　開口部天井石露出状況

35　H 7 号墳　墳丘（南から）

図版 14

36　H 7 号墳　石室　右側壁残存状況

37　H 8 号墳　石室か？（東から）

38　H11 号墳　墳丘（南から）

図版 15

39　H11 号墳　石室　開口部露出状況

40　H11 号墳　石室　奥壁から羨道方向へ

41　H11 号墳　石室　奥壁

図版 16

42　H12 号墳　墳丘（東から）

43　H12 号墳　石室正面（東から）

44　H12 号墳　墳丘　前壁直上崩落状況

図版 17

45　H12 号墳　石室　奥壁埋没状況

46　H12 号墳　石室　前壁、袖部

47　H12 号墳　袖部

図版 18

48　H18 号墳　墳丘（南東から）

49　H18 号墳　石室　開口状況

50　H18 号墳　石室　袖部

図版 19

51　H18 号墳　石室　前壁・袖部

52　H18 号墳　石室　奥壁

図版 20

53　H19 号墳　石柱（南西から）

54　H19 号墳　石柱（北から）

55　H20 号墳　石室　天井石露出状況（南西から）

図版 21

56　H20 号墳　石室　天井石露出状況（東から）

57　H20 号墳　石室　奥壁

58　H21 号墳　墳丘（南から）

図版２２

59　H21 号墳　石室　奥壁

60　H18 号墳と 24 号墳　位置関係（南東から）

61　H24 号墳　墳丘（東から）

図版２３

62　H24 号墳　石列　石列露出状況（南東から）

63　H24 号墳・H25 号墳　墳丘（南から）

64　H24 号墳　石室開口状況（南東から）

図版２４

65　H24 号墳　石室　奥壁

66　H24 号墳　石室　前壁、袖部

67　H24 号墳　石室　袖部

図版２５

68　H32 号墳　墳丘（南東から）

69　H32 号墳　石室　奥壁下半部残存状況

70　H32 号墳　石室　奥壁と左側壁残存状況

図版２６

71　H33 号墳　墳丘　開口部露出状況（南東から）

72　H33 号墳　石室　奥壁

73　H33 号墳　石室　奥壁から羨道方向へ

図版２７

74　H41 号墳　墳丘（南東から）

75　H41 号墳　石室　石室下半部残存状況

76　H41 号墳　石室　奥壁

図版２８

77　H41 号墳　石室　左側壁残存状況（北東から）

78　H43 号墳　石室　左側壁残存状況（南西から）

79　H43 号墳　石室　両側壁残存状況　（開口方向から）

図版２９

80　H44 号墳　石室　奥壁周辺残存状況（南東から）

81　H45 号墳　墳丘　開口状況（南から）

82　H45 号墳　石室　奥壁

図版 30

83　H45 号墳　石室　奥壁から開口方向へ

84　H46 号墳　墳丘（南から）

85　H46 号墳　石室　奥壁、左側壁残存状況

図版 31

86　H47 号墳　墳丘（南西から）

87　H47 号墳　石室　奥壁、天井石残存状況

88　H47 号墳　石室　左側壁立石　袖部か？

図版 32

89　H47 号墳　石室　天井石崩落状況

90　H49 号墳　墳丘　羨道両側壁残存状況（南から）

91　H49 号墳　石室　羨道右側壁残存状況

図版 33

92　H49 号墳　石室　開口状況

93　H49 号墳　石室　奥壁

94　H49 号墳　奥壁から開口方向へ

図版 34

95　H57 号墳　墳丘（南から）

96　H57 号墳　墳丘　天井石露出状況（北西から）

97　遠景　竜ヶ尾山南山麓（北西から）

図版 35

98　法貴古墳群採集遺物①

図版 36

99　法貴古墳群採集遺物②

図版 37

100　宮条２号墳　石室　前壁、袖部

101　宮条２号墳　石室　奥壁

102　宮条 20 号墳　墳丘　石室開口状況（南西から）

図版 38

103　宮条 20 号墳　石室　袖部

104　宮条 20 号墳　石室　袖部

105　宮条 20 号墳　石室　奥壁

図版 39

106　宮条 21 号墳　墳丘（南から）

107　宮条 21 号墳　石室　奥壁

108　宮条 21 号墳　石室　奥壁から羨道方向へ

図版 40

109　作業風景　宮条 21 号墳　石室実測（2001 年春休み）

110　作業風景　法貴峠２号墳　石室実測（2004 年春休み）

111　作業風景　H21 号墳　石室実測（2007 年春休み）

序章

第１節　調査の経緯と報告書刊行の目的

龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会（以下、研究会）は、京都府の南西部に位置する亀岡市域をフィールドとして、1971（昭和46）年から群集墳の分布調査に取り組んできた。研究会が、亀岡市をフィールドワークの対象としたのは、京都市内から亀岡盆地、そして山陰へとつながる国道９号バイパス建設による遺跡破壊への抗議が目的であった。研究会の分布調査により、既知の古墳の再確認や古墳の新規発見は数多くあり、それらは行政機関による発掘調査が実施された。研究会の遺跡破壊への抗議は、結果的に記録保存を行政機関に働きかけるものとなった。

一部の遺跡は破壊されたが、研究会は亀岡盆地の古墳時代の基礎資料を報告書の刊行という形で提示しつづけた（第３表）。特に、亀岡盆地を南北に流れる大堰川以西の山麓に分布する群集墳の実態について、少なからず明らかにしてきたといえる。

1999年に小金岐古墳群の報告書を刊行した後も、北ノ庄古墳群・宮条古墳群・宮条南古墳群・法貴峠古墳群・法貴古墳群において分布調査等を行ってきた。穴太古墳群・犬飼古墳群の調査以降は、調査の目的が遺跡破壊への抗議ではなく、亀岡盆地における群集墳の実態を掴むための調査に推移してきた。そうした目的の変化から、調査地も調査に入る前に墳丘や石室が残存している古墳群を探索し、良好に残存していることが判明した場所を調査対象地とした。さらに近年では、亀岡盆地の南東に位置する、奈良時代から平安時代にかけての一大窯跡群である篠窯の分布調査や、戦前にウィリアム・ガウランドによって調査されたことで著名な鹿谷古墳群の調査を実施した。

一方、各古墳群の調査終了後はデータのみが蓄積されるのみで、報告書という形で調査成果を公表できずにいたが、調査を行った法貴峠古墳群・法貴古墳群・宮条古墳群・宮条南古墳群では、石室の残存状態の良好なこと、多数の遺物を採集していることから、報告書として調査成果を広く公表する必要性を強く感じ、本書の刊行を企画するに至った。また、亀岡の群集墳についての基礎資料は、長年の発掘調査により増加したとはいえ､その調査範囲は平野部の圃場整備による調査が中心であり、山麓に分布する古墳の情報は未だ十分とは言い難いのが現状である。特に今回調査を行った山麓に展開する法貴古墳群（59基）は、亀岡盆地おける古墳時代後期の群集墳としては、国分古墳群（200基以上）、小金岐古墳群（193基）に次ぐ規模である。また、古墳時代改葬墓の研究史上著名なH19号墳（法貴B1号墳）が含まれているが、古墳群全体の実態は不明瞭であった。

以上の経緯により、長年にわたり測量調査を実施した霊仙ヶ岳南西斜面に分布する法貴峠古墳群・法貴古墳群、そして竜ヶ尾山北山麓に分布する宮条古墳群・宮条南古墳群の、合わせて４つの群集墳についての調査成果を本書により報告し、基礎資料の提示を行うこととしたい。ご叱正頂ければ幸いである。

（真鍋）

第２節　調査年次と参加者・作業内容

１）調査参加者

調査は 1998 年から 2009 年まで、下記一覧表のメンバーが大学の春期休暇（2 月から 3 月）を利用し実施した。期間内に調査が終了できなかった際は、夏季休暇（8 月から 9 月）を利用した。

第 1 表　調査年と参加者一覧

項	調査年	回生	参加者（五十音順・敬称略）
現地調査	1998 年	2 回生	伊藤涼子・上山泰史・影山剛之・兼田裕一郎・古木良一・高田邦生・田中潤・田中直子・矢田部百合子・山崎美智子
		1 回生	相見和幸・井上祥文・小川雅子・奥田浩明・片上義弘・神山真人・北井利幸・木下亮・黒河龍二・小菅麻子・佐伯光祥・所大輔・華園暁・花村智美・藤田賢哉
	1999 年	2 回生	相見和幸・井上祥文・小川雅子・奥田浩明・片上義弘・神山真人・木下亮・黒河龍二・小菅麻子・佐伯光祥・所大輔・華園暁・花村智美・藤田賢哉
		1 回生	岩下明正・榎原秀典・緒方伸行・佐々木由美・鴫原佐和・高橋新太郎・辻野直良・長田真也・中村敏基・藤田誠史・松尾郁子・宮野謙一郎
	2000 年	2 回生	岩下明正・榎原秀典・緒方伸行・佐々木由美・鴫原佐和・高橋新太郎・辻野直良・長田真也・中村敏基・藤田誠史・松尾郁子・宮野謙一郎
	2001 年	2 回生	徳地宏紀・森俊輔
		1 回生	池本尚優・河合健成
	2002 年	2 回生	河合健成
		1 回生	粟村恭岳・遠藤太一・柴山浩之・花房優太・中尾聡・山崎嘉納
	2003 年	2 回生	粟村恭岳・遠藤太一・柴山浩之・花房優太・中尾聡
		1 回生	上田和美
	2004 年	2 回生	上田和美
		1 回生	印田万容・城山幸太・田中麻葉美・津島佑美香・永峰穂高・福武航太・八木達也
	2005 年	2 回生	印田万容・奥町友彰・城山幸太・杉山智紀・津島佑美香・永峰穂高・八木達也
		1 回生	岩崎隼人・柏木和真・川畑小夜・秦奈美子・真鍋貴匡・横幸恵・村田智可子
	2006 年	2 回生	柏木和真・真鍋貴匡
		1 回生	饗庭恵・石川貴章・池内信恵・上道智子・井上陽介・北村広光・桑野さとみ・小林弘実・鈴木美穂・関芽美・田中伸哉・中嶋由希・藤幸子・森島拓巳・安田晋・吉岡達也
	2007 年	2 回生	饗庭恵・石川貴章・池内信恵・上道智子・井上陽介・北村広光・桑野さとみ・関芽美・田中伸哉・中嶋由希・藤幸子・森島拓巳・安田晋・吉岡達也
		1 回生	乾和博・梅田佳孝・川口佳紀・北田泰浩・坂本央・志田真吾・武田千優・寺尾啓子・中田達也・松澤健・村田美麻・山内美穂
	2008 年	2 回生	乾和博・梅田佳孝・北田泰浩・坂本央・志田真吾・武田千優・寺尾啓子・中田達也・松澤健・村田美麻・山内美穂
		1 回生	河合大介・熊澤龍一・小牧謙一・林賢樹・原陽平・村上大起
	2009 年	2 回生	河合大介・小牧謙一・林賢樹・原陽平・村上大起
		1 回生	大野雄介・小野有輝・小畑敬一・川崎智子・木下陽介・木田拓馬・熊井亮介・清水未来・鈴木裕貴・真下響・山本奈津希

編集整理作業
2010 年～ 2013 年　志田真吾・真鍋貴匡

２）調査地と作業概要

各調査地と作業概要、研究会の刊行物については下記の一覧表にまとめた。

第２表　調査地と作業の概要

宮条古墳群

1998 年	調査を開始。分布調査。 遺跡地図台帳に記載のある 13 号墳から 19 号墳までの計 7 基は消滅したと判断する。 12 号墳は未確認。新規に 9 基の古墳状隆起を確認する。 宮条 2 号墳の墳丘測量、20 号墳の石室実測と墳丘測量。
1999 年	21 号墳の石室実測と墳丘測量。
2000 年	2 号墳の石室実測。
2001 年	宮条古墳群の補足調査。調査を終了。

宮条南古墳群

2000 年	調査を開始・終了。 分布調査を行い、1 号墳と 2 号墳の消滅、3 号墳から 6 号墳の存在を再確認。 5 号墳・6 号墳の墳丘測量。

法貴峠古墳群

2002 年	調査を開始。分布調査・2 号墳の石室実測と墳丘測量。
2003 年	分布調査。8 号墳の墳丘測量。
2004 年	4 号墳・6 号墳・9 号墳の墳丘測量。
2005 年	3 号墳・10 号墳・11 号墳の墳丘測量。3 号墳で須恵器採集。
2006 年	7 号墳の墳丘測量と前年度測量の 3 基について補足調査。11 号墳で須恵器採集。調査を終了。

法貴古墳群

2005 年	調査を開始。 H10 号墳・H11 号墳・H12 号墳・H13 号墳・H16 号墳・H17 号墳の墳丘測量。H12 号墳の石室実測。 分布調査の結果、遺跡地図台帳に記載の基数よりも多く、台帳との不整合が判明。 そのために、A から Ay までの仮番号を付加。
2006 年	H14 号墳・H15 号墳・H19 号墳・H20 号墳・H21 号墳の墳丘測量、H18 号墳の石室実測。H18 号墳で須恵器採集。
2007 年	H7 号墳・H8 号墳・H9 号墳・H22 号墳・H23 号墳の墳丘測量、H21 号墳の石室実測。H3 号墳・H9 号墳・H32 号墳で須恵器採集。分布調査の結果、新規に 8 基を発見し、総数 59 基。
2008 年	H24 号墳の墳丘測量と石室実測。H7 号墳・H21 号墳・H24 号墳で須恵器採集。 分布調査の結果、59 基という古墳の総数を確定させたが、遺跡地図との照合が不可能であると判断した。そのため番号の前に H を付け加えた新番号にしている。また、可能な限り旧番号との対応を試みた。旧番号との対応は第 8 表を参照。
2009 年	H24 号墳の補足測量調査。調査を終了。

第３表　研究会刊行物

刊行年	刊行物名	対象遺跡
1976 年	『亀岡盆地における群集墳～川東地区編～』	元明院古墳群、美濃田古墳群、池尻古墳群、平野古墳群、出雲古墳群、稲葉山古墳群、三日市古墳群、金光寺中村古墳群、国分古墳群、室聚使古墳群
1982 年	『亀岡川西地区中間報告」『無』復刊第 16 号	小金岐古墳群、拝田古墳群、薄井古墳群、上川関古墳群、疋谷古墳群、北金岐古墳群
1984 年	『穴太・犬飼古墳群分布及び実測調査報告書』	穴太古墳群、犬飼古墳群
1986 年	『口丹波の遺跡』	穴太古墳群、安行山古墳群、安行山丸山古墳群
1999 年	『小金岐古墳群分布及び測量調査報告書』	小金岐古墳群、北金岐古墳群

（真鍋）

第３節　研究会の調査について

第１項　調査の方法

現地調査は分布調査・略測調査・墳丘測量・石室実測の四つを実施した。特に石室や墳丘の残存度が高いものを中心に測量調査を実施し、その他は分布調査・略測調査によって古墳のデータ収集を実施した。以下に、当研究会の群集墳に対する調査方法についてまとめた。

１．分布調査

分布調査は、亀岡市都市計画図（1/2500）を用いた。各古墳の位置は群集墳に近い建物等の場所を基準として、クリノメーターと巻尺を用いて方角と距離を地図におとしながら移動し、古墳の場所を正確に地図に書き込めるように努めた。

２．略測調査

分布調査の際に古墳と認定した判断基準、墳丘測量と石室実測を行っていない古墳のデータの収集方法についてまとめた。

２－１．古墳の判断基準

石室が開口して明らかに古墳と認識できるものを除き、古墳の判断基準を設けた。

①尾根や斜面に墳丘状の高まりが顕著に認められる。

②墳丘は明瞭ではないが、石材が露出している、もしくは土中に確認できる。または、墳頂部に窪みがあり、埋葬施設内への落ち込みが確認できる。

③墳丘は全く確認できないが、石材が直線的あるいは直角に数石並ぶ。

２－２．墳丘残存状態の表記基準

完存：埋葬施設への土砂流入が少ないないこと、石材が露出しておらず抜き取りの痕跡もない。
約 80％以上残存している。

半壊：埋葬施設内への極端な落ち込みにより窪地がある、もしくは埋葬施設を墳丘から観察できる。
墳丘全体の 20 ～ 60％残存している。

全壊：古墳状の高まりがわずかに確認できる。墳丘全体の約 20％以下しか残存していない。

不明：古墳状の高まりは確認できないが、埋葬施設を構成していたと考えられる石材や外表施設が残存していることから、古墳の存在を推定できる。

2-3. 埋葬施設の残存状態の表記基準

横穴式石室及び竪穴式石室を項目の対象とした。

完存：埋葬施設が原形をとどめている、もしくは埋葬施設への土砂の流入がほとんどみられない。また石室の半分以上の天井石が当時の架構状態を保っ古墳はこれに含めた。

半壊：天井石は抜かれているが側壁石材がほぼ残存している。

全壊:埋葬施設にかかわるとみられる石材が散乱し、現状では石室の寸法を計測することができない。
不明：ボーリングステッキで石材の反応がなく、粘土槨もしくは木棺直葬の可能性が想定できるが、
埋葬施設の状況把握できない。

2－4．墳丘の直径

略測調査のみの古墳は、墳丘裾と判断できる傾斜変換点を探し、2方向から直径を計測した。報告ではその内の計測値が大きいものを報告した。なお、石室主軸が明らかな古墳は、主軸方向とそれに直行する方向で計測し、石室主軸が不明のものについては南北方向と東西方向で計測した。

墳丘測量を行った古墳については、墳丘の背後のコンターラインが湾入する部分、墳丘下方のコンターラインが人工的なラインを示す部分、墳丘裾とみられる傾斜の変換する部分を総合的に判断し直径を計測した。

2－5．埋葬施設の計測

埋葬施設の計測は、石室の全長・玄室と羨道の長さと幅・残存高を計測した。埋没している埋葬施設についてはボーリングステッキで探索し、数値を計測した。計測数値は、埋葬施設が半壊したものも含んでいるが、おおよその石室規模は捉えていると判断した。

2－6．開口方向の計測

埋葬施設が有袖の横穴式石室の場合は、奥壁幅の中点と玄室前壁側に近い部分の幅の中点を結ぶラインを石室主軸とした。無袖の場合は、奥壁幅の中点と開口部幅の中点を石室主軸とした。また、埋没している石室の場合、ボーリングステッキで土中の石材を探索し、石室幅を推定し、主軸方向を判断した。以上の石室主軸に水糸を設定し、クリノメーターで開口方向を計測した。それらの成果は若干のずれを含むものであるが、おおよその開口方向を提示したと判断した。

3．墳丘測量

墳丘測量は、群集墳が分布する山の麓にある基準点からレベル移動を行い、測量杭に標高の移動を実施した。基準点の位置や情報については、亀岡市教育員会から御教示いただいた。

墳丘測量の基準となる杭については、前年度設定した杭2点を用いて閉合トラバースを組み、前年度とのつながりを確認しながら、順次測量範囲を拡大した。測量は平板を用いて行い、コンターラインの間隔を0.25 m、縮尺は1/100とした。測量範囲に散乱している石材も可能な限り測量を行い、遺物も採集地点を測量図に示した。

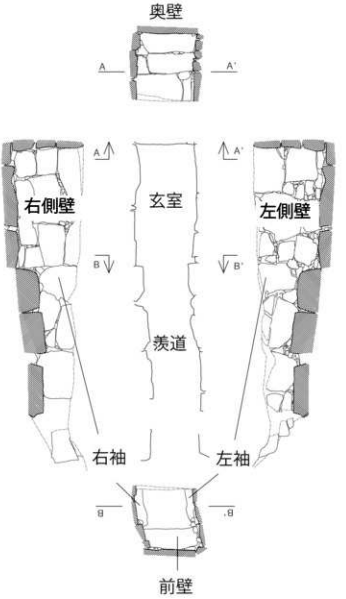
4．石室実測

石室実測は、石室の残存度が高いものを中心に実施した。石室の中軸線は、玄室の奥壁側幅の中央点と前壁側幅の中央点を通るように設定した。また、奥壁側の中央点を基準とし、石室の割り付けを行った。割り付けは50cmのグリッドを壁面にチョークを用いて設定し、調査終了後に洗い流した。実測は縮尺を1/10とし、計測にはコンベックスを用いて実施した。

石室横断面の計測は二通りの方法をとっている。法貴峠古墳群と法貴古墳群では、現状の床面に露出している最下段の石材の輪郭を計測した。宮条古墳群においては、奥壁から開口部までの側壁が計測ができる一定の高さに水糸を設定し、横断面を計測した。したがって石室の横断面の提示方法が異なる。法貴峠古墳群・法貴古墳群では一定の高さのプランではないが、発掘調査を経ずに石室全体の横断面の提示をする一つの方法として実施した。宮条古墳群についても、高さは一定しているものの、天井石に近い高さに水糸を設定し計測しているものもある。そのため、いずれの方法をとっても正確な横断面ではない。

第２項　石室の各部名称

本文中で扱う石室の各部名称は、下記の図に示した。



（真鍋）

第１図　横穴式石室の各部名称

第４節　亀岡盆地の歴史・地理的環境

京都府亀岡市は、周囲を 600 m級の山地に囲まれた盆地地形を呈する。この盆地は京都市が所在する京都盆地に隣接しており、その中央部分を大堰川（桂川）が貫流している。盆地周辺の山地からは、大堰川に向かって小河川が流れ込み、それらによって浸食された段丘地形が形成されている。

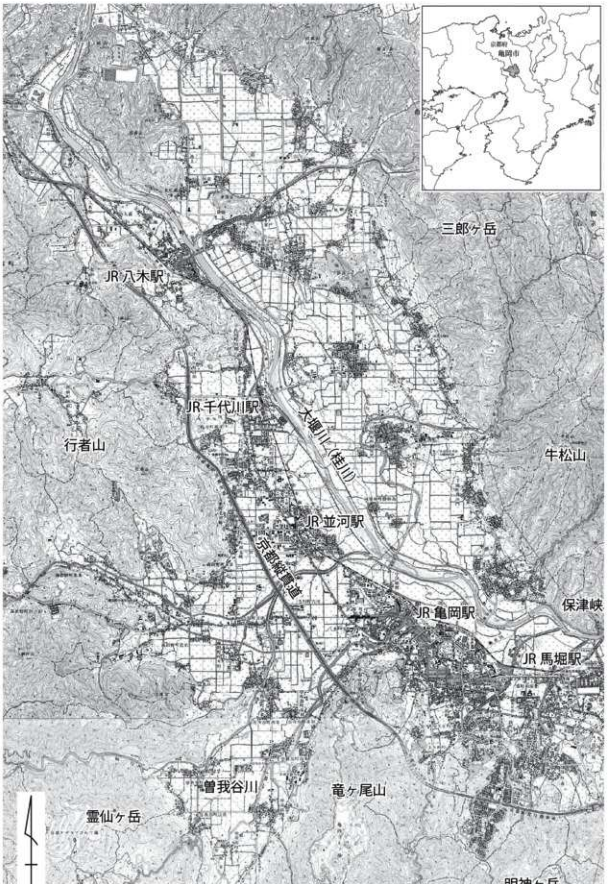
この地域は古代から口丹波と呼ばれており、畿内中枢である大和国や山背国から見た丹波国の入口、すなわち山陰道の入口にあたることを示している。山陰道は出雲国や丹後国といった日本海側の諸国と畿内を結んだ重要な道である。

亀岡盆地における最も古い遺物として、縄文時代草創期のものとされる鹿谷遺跡出土の槍先形尖頭器があり、これとほぼ同時期の遺物として、千代川遺跡出土のサヌカイト製有舌尖頭器が挙げられる。このほか縄文時代の遺跡として、早期の土器が出土した案察使遺跡、後期の土器が出土した車塚遺跡、晩期の土器が出土した北金岐遺跡などがある。ただし、これらの土器も包含層出土のものであって、遺構については千代川遺跡で溝が検出されているものの、他の遺跡では顕著な遺構は検出されていないのが現状である。

弥生時代の遺跡として、前期には竪穴建物を検出した大淵遺跡や土壙墓が検出された池尻遺跡がある。また池尻遺跡は中期前半から後期にかけて造墓された方形周溝墓が多数検出されており、亀岡盆地を代表する古い段階のものである。さらに、中期後半には馬路遺跡や時塚遺跡、車塚遺跡においても方形周溝墓の造墓が開始される。後期には蔵垣内遺跡や馬路遺跡から竪穴建物が検出されている。

亀岡盆地における古墳時代前期の古墳として、直径約 32 mの向山古墳と直径約 19 mの出雲武式古墳が確認されている。向山古墳は円墳もしくは方墳の可能性があり、出雲武式古墳は円墳である。向山古墳は老の坂峠の南東から伸びる細長い丘陵の最高所に位置し、旧山陰道を眼下に望む交通の要衝に位置している（亀岡市 2000）。また豊富な副葬品が知られている。出雲武式古墳は三郎ヶ岳から派生するゆるやかな斜面地に位置し、埋葬施設は既に削平を受けているものの、石釧が周溝から出土している。時期は両古墳とも 4 世紀後葉の年代が与えられているが、向山古墳は園部町に所在する園部垣内古墳に先行する首長墓と目されている（亀岡市 2000）。また、亀岡盆地南西の穴太古墳群の分布する丘陵からは筒形銅器が発見されており、古墳時代前期の古墳が存在していた可能性がある。また、近年発見された保津山東 1 号墳は、遺物は採集されていないが、前方部に比べ後円部が高く、立地も丘陵の最高所に位置し、やや古い特徴を有している。根拠としては弱いが、古墳時代前期に比定できる可能性があり注目される。一方、この時期の集落遺跡としては、大堰川東岸の蔵垣内遺跡、西岸の千代川遺跡などがある。

中期前半には、前半に三ツ塚 2 号墳・浄法寺 1 号墳・桝塚古墳が確認されている。三ツ塚 2 号墳と浄法寺 1 号墳は径約 30 mの円墳、桝塚古墳は一辺約 40 mの方墳であり、いずれも中規模墳である。中期後半になると、丸塚古墳・馬場ヶ崎 1 号墳と 2 号墳・糠塚古墳・天神塚古墳・坊主塚古墳・瀧ノ花塚古墳・野条古墳が築造される。また、一辺約 24 mの造出付方墳で、特異な盾持ち人形埴輪が出土した時塚 1 号墳や前方後円墳である穴太 12 号墳を含む穴太古墳群、池尻古墳群などの古式群



第２図　亀岡市の位置と周辺（S=1/60,000）

集墳の造墓開始もこの時期である。さらに中期末から後期初頭には墳丘長 82 m、二重周濠をもつ大型前方後円墳である千歳車塚古墳が築造される。

続く後期の古墳として、拝田 16 号墳（墳丘長 44 m、前方後円墳）や石堂古墳（墳丘長 36.5 m、前方後円墳）を挙げることができる。石堂古墳からは、埴輪片が採集されており、外面調整が荒いタテハケのみである。拝田 16 号墳からは遺物が採集されておらず、時期を特定できない。ただし、横穴式石室を導入していることから古墳時代後期に位置づけられる。

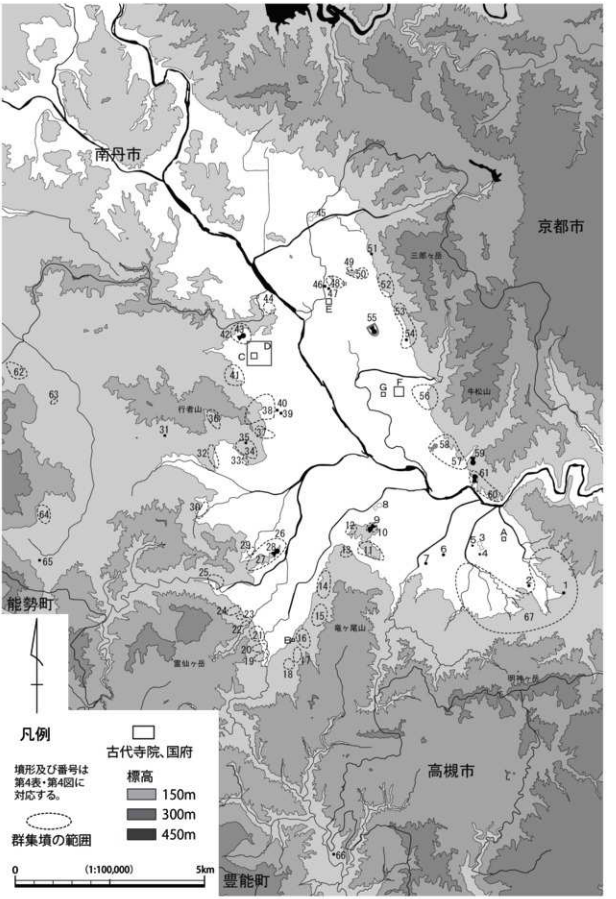
行者山の南西山腹及び山麓には、前述の拝田 16 号墳を中心とした拝田古墳群や鹿谷古墳群・小金岐古墳群などの群集墳が所在しており、これらの一部に石棚や石障を有するものがある。特に鹿谷古墳群は 1872 年にウィリアム・ガウランドによって調査されたことでも知られ、調査された 6 基のうち 3 基が石棚を有し、そのうち 1 基は石障も備えていた（亀岡市 2000）。なお、この他に石棚を有する古墳は、拝田 16 号墳や小金岐 76 号墳・78 号墳・112 号墳が知られている（研究会 1999）。また、同じ行者山北山腹に位置する北ノ庄 4 号墳は玄室縦断面形が凸型を呈している。この様な形態は中高式天井と呼ばれ、同様の天井形態を持つ横穴式石室は山陰地方に多く分布している。さらに、13 号墳・14 号墳は、玄室天井を失っているものの、正方形の平面プランや、羨道がハの字に開き玄門から開口方向に緩やかに高くなるといった点で、九州系の横穴式石室の特徴を有している。終末期には多角形墳である 45 号墳を含む国分古墳群などが現れ、無袖の横穴式石室が主流になる。

以上のように、亀岡盆地の横穴式石室は複数の地域に系譜を辿ることが可能であり、このような様相は横穴式石室導入期に最も顕著である。その後、一部地域には石棚などが残るが、次第に畿内地域の影響が強まるようである。

このように、後・終末期の亀岡盆地は山陰道を通じて日本海側と畿内双方からの影響が混淆する地域と位置付けることができ、また盆地南西部の今回報告する古墳群周辺には、現在の大阪府池田市まで延びる摂丹街道が通じていることから、摂津国との交流が想定できる。

飛鳥時代になると、桑寺廃寺・観音芝廃寺・興能廃寺・池尻廃寺が建立される。飛鳥時代から奈良時代にかけては、池尻遺跡・河原尻遺跡・車塚遺跡・時塚遺跡・馬路遺跡などにおいて、大規模な掘立柱建物跡が検出されており、官衙施設としての性格が想定されている（亀岡市 2000）。蔵垣内遺跡の西側には丹波国分寺や国分尼寺が存在し、その創建瓦が大量に出土した三日市遺跡には瓦窯群の存在した可能性が指摘されている（亀岡市 2000）。さらに亀岡盆地の南東部の山麓では、奈良から平安時代にかけて、須恵器や緑釉陶器・瓦の生産拠点である篠窯跡群が操業される。そして製品は桂川の水運によって平安京へ供給されており、官営工房として隆盛を極めたようである。また、丹波国の一の宮である出雲神社が所在することからしても、丹波国の中での亀岡盆地の重要性が窺える。

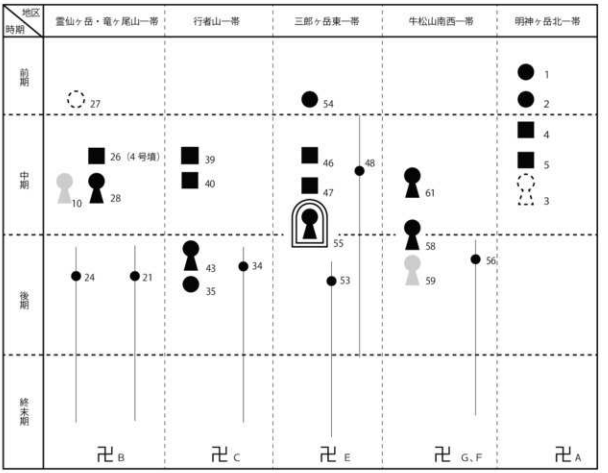
（志田・真鍋）



第３図　亀岡市域の地理と古墳分布（S=1/100,000）

第４表　亀岡市域の古墳

1	向山古墳●	21	法貴峠古墳群	41	北ノ庄古墳群	61	保津山東１号墳♀
2	三ツ塚古墳群	22	法貴南古墳群	42	拝田古墳群	62	赤熊古墳群
3	野条古墳◯	23	慈雲寺裏山古墳群	43	拝田 16 号墳♀	63	宮川古墳群
4	桝塚古墳■	24	法貴古墳群	44	上川関古墳群	64	加舎西山古墳群
5	瀧ノ花塚古墳■	25	犬飼古墳群	45	糠塚古墳♀	65	クボラ古墳
6	浄法寺古墳群	26	穴太古墳群	46	塚坊主古墳■	66	天皇塚古墳
7	つつじヶ丘古墳群	27	筒形銅器出土地点○	47	天神塚古墳■	67	篠窯址群
8	加塚古墳◯	28	穴太 12 号墳♀	48	池尻古墳群	A	観音芝廃寺
9	安行山丸山古墳群	29	口山古墳群	49	広保古墳群	B	興能廃寺
10	安行山丸山２号墳♀	30	佐伯古墳群	50	美濃田古墳群	C	桑寺廃寺
11	医王谷古墳群	31	奥条古墳	51	元明院古墳	D	丹波国府推定地
12	風ノ口古墳群	32	稗田野西山古墳群	52	平野古墳群	E	池尻廃寺
13	龍ヶ尾山古墳群	33	鹿谷池田古墳群	53	出雲古墳群	F	丹波国分寺
14	南条古墳群	34	鹿谷古墳群	54	出雲武式古墳●	G	丹波国分尼寺
15	寺古墳群	35	鹿谷 18 号墳●	55	千歳車塚古墳♀	凡例	♀前方後円墳
16	宮条古墳群	36	鹿谷大市支群	56	国分古墳群		■方墳
17	宮条南古墳群	37	北金岐古墳群	57	案察使古墳群		●円墳
18	桜峠古墳群	38	小金岐古墳群	58	案察使１号墳♀		◯墳形不確定
19	中西山古墳群	39	馬場ヶ崎１号墳■	59	石堂古墳♀	番号は第３図、第４図と対応する。	
20	中岩山古墳群	40	馬場ヶ崎２号墳■	60	保津山東古墳群		



凡例　●：円墳、■：方墳、♀：前方後円墳、◯：墳形不確定、●：時期不詳、卍：古代寺院

第４図　亀岡盆地における古墳の変遷

第１章　法貴峠古墳群

第１節　研究史

法貴峠古墳群は『亀岡市史上巻』（1960 年）で初めて紹介される。市史には「最近バスで攝津池田に向かう時發見したのである。それは法貴谷を犬甘野に向って進むと、すぐ峠にさしかかる。この峠の中途東斜面に石室の一部が露出しており、これが横穴式石室を伴う古墳であることが知られた。南に入口を開く徑約五米の圓墳である。この附近には他に、二、三の古墳が存在している。」と記されている。発見の契機は、梅原末治氏らによって亀岡盆地の遺跡の分布調査が大正年間と戦後の２回実施され、本古墳群は戦後の調査での発見とされている（亀岡市 1960）。

また『京都府遺跡地図』（1972 年・1985 年・2002 年）に、古墳群全体の総数と分布状況などの情報がまとめられている。そして『新修亀岡市史資料編　第一巻』（1990 年）に、法貴峠古墳群中最大の９号墳の墳丘測量図と石室実測図が掲載される。この９号墳の存在から『新修亀岡市史』では本古墳群を「規模の大きな一号墳と九号墳が築かれていることから見て、被葬者はこの地域でいくつかの集落を統括するような有力者」と意義づけている。

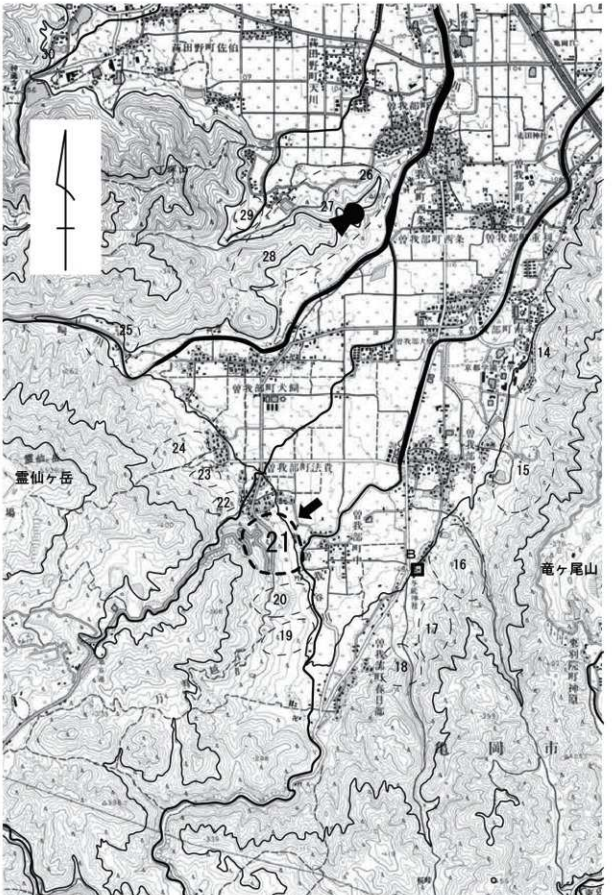
本古墳群が位置する丹波の京都府側には古代に４つの郡が置かれ、亀岡盆地を中心とする範囲は桑田郡にあたる。桑田郡の横穴式石室は、導入期には北部九州系の石室があり、他地域の影響をほとんど窺うことができない地域であるとされる。しかし、TK43 型式並行期の法貴峠９号墳や医王谷１号墳などが石棚・石障敷設といった北部九州系の横穴式石室ではないことから、近畿中枢部からの影響のもとに築造された例としている（富山 2007a）。

近年、新たに法貴峠 20 号墳が京都府教育委員会によって確認され、発掘調査が実施された。その結果、６世紀後半から末まで埋葬が行われたことが確認されている（京都府 2021）。後述するが、１号墳及び２号墳に石室形態は近しいと考えられる。

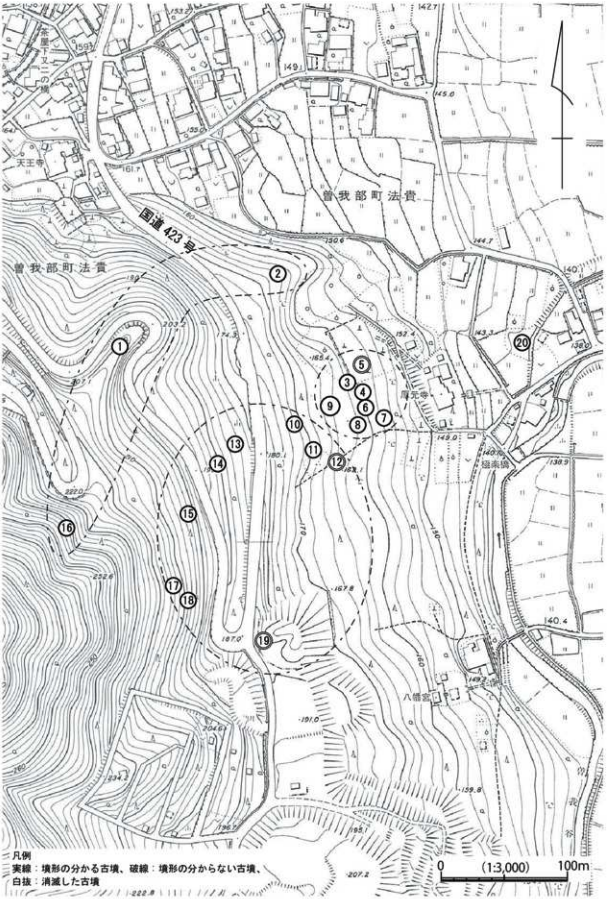
以上の研究史の整理から、既知の９号墳は、亀岡盆地内の横穴式石室の変遷において、畿内型石室の伝播を考える中で重要な意義づけがなされているが、群全体の様相は不明瞭で、その点に課題が残されていた。

第２節　分布・略測調査の成果

法貴峠古墳群は、亀岡盆地の南西にある曽我部町法貴森山の霊仙ヶ岳南西斜面の標高 150 ～ 240m、東西 250m、南北 300m の範囲に分布している。１号墳付近からは北東方面の眺望がよく、亀岡盆地を見渡すことができる。また本古墳群の所在する霊仙ヶ岳南西斜面は国道 423 号、別名摂丹街道沿いにあり、道路で尾根が分断されている。摂丹街道は亀岡の中心部から、高槻市・茨木市方面へと抜ける峠道として現在も頻繁に利用されている。『京都府遺跡地図（第３版）第２分冊』（京都府 2002）によれば、法貴峠古墳群は 19 基の古墳からなり、石室・墳丘ともにほぼ完存しているとされていた。しかし、当研究会による 2002 年から 2006 年の分布・測量調査の結果では、16 基を再確認し、残る３基については確認できず現地の状況から消滅したものと考えた（第３表）。



第５図　法貴峠古墳群の位置（S=1/25,000）



第６図　法貴峠古墳群　分布図（S=1/3,000）

再確認した 16 基の古墳は、『京都府遺跡地図』に記載された残存状況とは大きく異なり、ほとんどの古墳が石材の抜き取りにより半壊もしくは全壊している状態であった。さらに不法投棄によって現状確認が難航した古墳も数基あり、古墳群の残存状況や分布する一帯の環境は良好とはいえない。確認できなかった 3 基については第 2 項で詳述する。

本古墳群の分布については、立地条件に差がみられる。明瞭な尾根上に立地する北群と、緩やかな斜面地に立地する南群、やや急な斜面地に立地する西群で構成されている。

まず、明瞭な尾根上に立地する北群は、1 号墳・2 号墳・16 号墳の 3 基である。16 号墳は本古墳群中でも最高所の標高 240 m の尾根に位置し、標高 210 m に 1 号墳と尾根の先端に近い標高 166 m の 2 号墳は同一尾根上である。以上のように明瞭な尾根上に位置する古墳は、周囲に古墳が築造されておらず、単独墳的様相を呈している。なお、新規で発見された 20 号墳も周囲に古墳は確認されておらず、北群と同様な状況を示す。

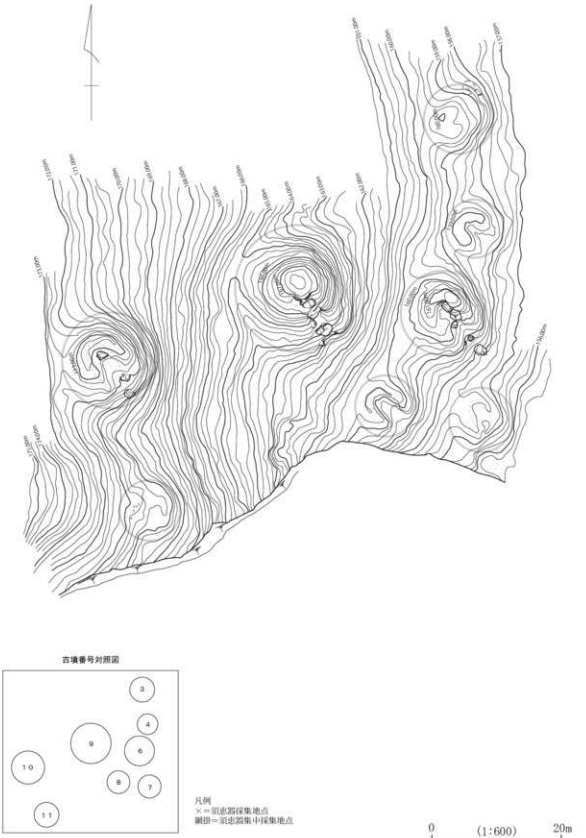
次に緩やかな斜面地に立地する南群は 6 基あり、3 号墳・4 号墳・6 号墳・7 号墳・8 号墳・9 号墳である。立地する緩やかな斜面地は標高 156 m から 164m で、東西 50m、南北 50m のやや狭い範囲に古墳が密集する。9 号墳の東側では、3 号墳・4 号墳・6 号墳・7 号墳・8 号墳が墳丘裾を互いに接しながら築造されており、本古墳群中では最も密集度が高い。また図では示せていないが、9 号墳は古墳が密集する中にあって墳丘背面ののカット面がみられ、9 号墳が占有する範囲を明示している。

最後にやや急な斜面地に立地する古墳は 7 基あり、10 号墳・11 号墳・13 号墳・14 号墳・15 号墳・17 号墳・18 号墳である。現地での観察では、これらの古墳は不明瞭な尾根上に位置している。

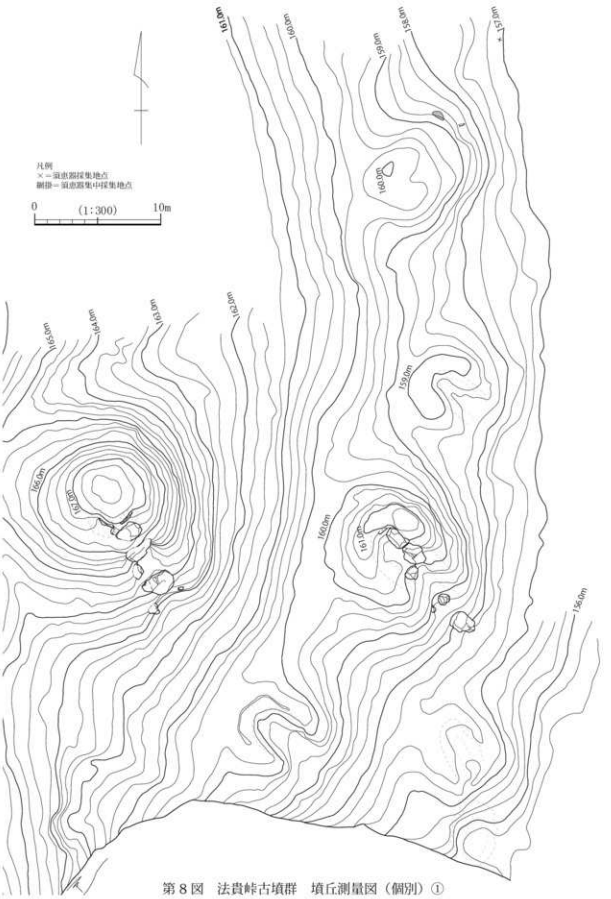
以上のように、立地条件からおおよそ 3 つのグループに分けることができる。また石室の構造やその他の条件が明らかになれば、この立地条件の差もより明確になると考えられる。

観察できる古墳に用いられている石材は山麓に露頭している岩盤と同様に、チャート系の堆積岩である。亀岡盆地はチャート系の岩盤が大部分を占め、花崗岩は大堰川右岸の行者山周辺と霊仙ケ岳山頂付近にしかみられないことが知られている（亀岡市 2000）。このことから、比較的近辺で石室の石材を採取したものと思われる。

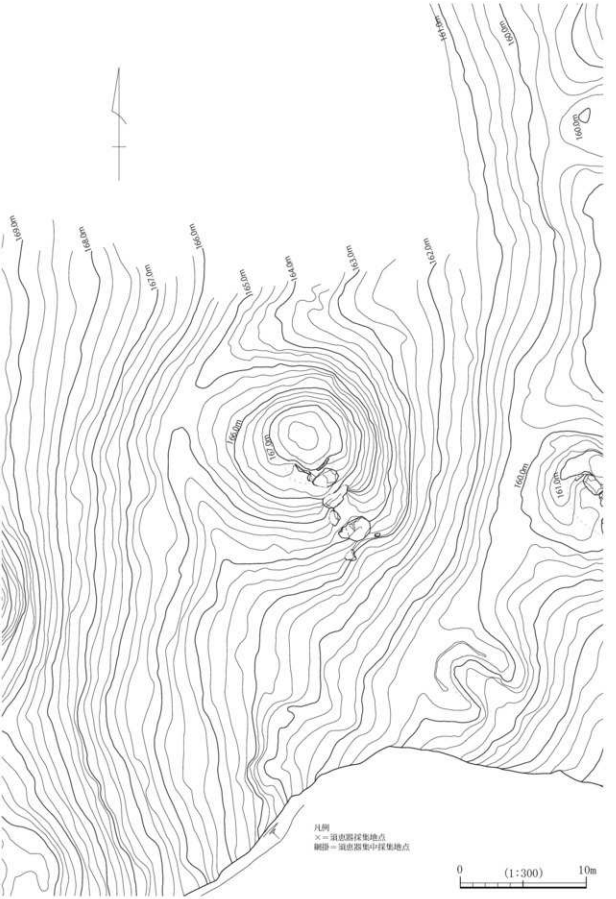
（真鍋）



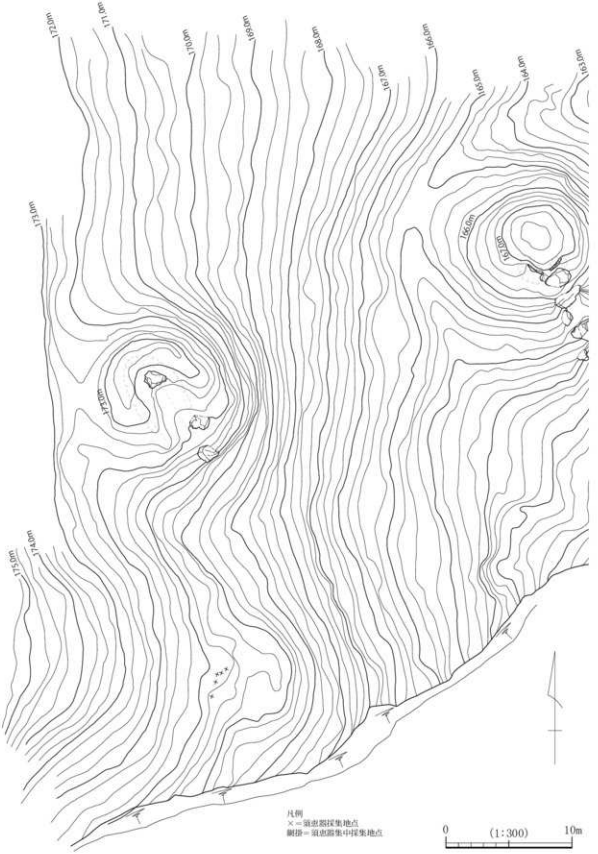
第７図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（全体）(S=1/600)



第８図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（個別）①
３号墳・４号墳・６号墳・７号墳・８号墳・９号墳（S=1/300）



第９図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（個別）②　６号墳・８号墳・９号墳（S=1/300）



第 10 図　法貴峠古墳群　墳丘測量図（個別）③　9 号墳・10 号墳・11 号墳（S=1/300）

第５表　法貴峰古墳群の概要

古墳番号	概要（現状・規模・埋葬施設）	写真図版
1号墳	霊仙ヶ岳山麓付近から北東方向に派生する尾根の最高所、標高 208 m から標高 210m に位置する。略測より、規模は直径約 13.6m ×高さ 4.3m の円墳である。墳丘東側には福荷大神の石祠がある。墳頂部より北東方向の眺望が優れ、盆地が一望できる。玄室天井部は盛土の流出により僅かに開口している。また、奥壁裏側は道路開削により奥壁裏側がほとんど露出し、奥壁石材の隙間から石室内部を見通すことができる。 内部観察と墳丘上に露出している石材の観察により天井石は玄室３石、羨道１石の計４石を用い、前壁を有する両袖の横穴式石室であることが判かる。玄室は、両側壁とも現状で見えている最下段から天井部まで石材の大きさはさほど変わらず、形状も長方形を呈し、４段積みを基本としている。奥壁は側壁の石材に比べて小さい石材を用いて各段２石以上で構成し、前壁は巨石１石を用いて架構されている。袖部は左右とも横使いにした石材を積み上げ、現状では、左袖３段、右袖２段が確認できる。	4 ～ 10
3号墳	西から東に向って緩やかな斜面の標高 157 m から標高 160 m の斜面地に位置する。また、近接して現代の墓地が営まれている。墳丘規模・墳形は、墳丘東側の標高 158 m のコンターラインより下方は直線的になることから、ここを墳丘東縁とし、墳丘西側の標高 159 m が最も湾入する部分を墳丘西縁とすると、直径約 10m、高さ 2m以上の円墳である。墳丘東側には、玄室天井石と羨道側壁と考えられる石材が僅かに露出している。また、略測の成果から、埋葬施設はほぼ真東に開口する横穴式石室であると思われるが、開口しておらず詳細は不明である。墳丘の残存状態は良好である。 本古墳からは須恵器を採集している。採集した際の状況は、甕の頸部から体部まで破片で散乱しており、一部が折り重なった状態であった。また、この際一括して採集した破片を、整理作業の過程で接合すると体部に関しては半分ほどに復元できた。このほか、有蓋高坏の坏部を採集しているが、その地点は墳丘からやや離れた位置である。	17
4号墳	西から東に向って緩やかな斜面の標高 157 m から標高 159 m の斜面地に位置する。墳丘規模は、墳丘東側の標高 158 m のコンターラインより下方は直線的になることから、ここを墳丘東縁とし、墳丘西側の標高 158.75 m の最も湾入する部分を墳丘西縁とすると、直径約 9m、高さ 1m 以上の円墳である。墳形は、コンターラインが円弧に描くことからの円墳と判る。石室の石材はほとんど抜き取られており詳細な情報を得られなかったが、略測より南東方向に開口する横穴式石室であると考えられる。石材が抜き取られているため、墳丘の残存状況も悪い。	
5号墳	分布地図によると３号墳の北東方向に位置するはずであるが、その場所は現在、墓地になっている。分布地図通りならば、５号墳は墓地造営の為に破壊された可能性がある。	
6号墳	西から東に向う緩やかな斜面の標高 157 m から標高 160 m の斜面地に位置する。墳丘規模は、墳丘東側の標高 158.25 m のコンターラインより下方は直線的になることから、標高 158.25m のコンターラインを墳丘東縁とし、墳丘西側の標高 158.75 m のコンターラインが最も湾入する部分を墳丘西縁とすると、直径 14.5m、高さ 3.5m 以上の円墳である。また、石材の抜き取りにより墳丘中央には南東に開く大きな陥没がみられる。陥没内には、玄室天井石２石が左側壁にかろうじて架かっている状態で、転落している。また左側壁・奥壁が原位置を保った状態で一部露出している。玄室天井石は奥壁寄りから長さ 1.3m ×幅 1.3m ×厚 0.8m、長さ 1.9m ×幅 1.7m ×厚 0.9m を測る。この天井石の大きさから推定される天井石付近の石室幅は、1m ほどの極めて狭いものである。また、残存している奥壁と左側、陥没する地形から南東方向に開口するものと判る。	18、19
7号墳	西から東に向う緩やかな斜面の標高 156 m から標高 158 m の斜面地に位置する。墳丘規模は、墳丘東側の標高 156.25 m コンターラインより下方直線的になることから、標高 156.25m のコンターラインを墳丘東縁とし、墳丘西側の標高 157.5 m のコンターラインが最も湾入する部分を墳丘西縁とすると、直径 11m、高さ 1.5m以上の円墳である。方墳の可能性もある。墳頭部は僅かな盛土と墳丘の南東側に倒木によるとみられる大きな陥没がみられるが、墳丘自体に大きな陥没や石材の露出がないことから、石材の抜き取りはほぼないものと判断できる。墳丘と石室の残存状態は良好である。	
8号墳	西から東に向う緩やかな斜面の標高 158 m から標高 161 m の斜面地に位置する。墳丘規模は、墳丘東側の標高 159 m のコンターラインより下方は、コンターラインが直線的になることから、標高 159m のコンターラインを墳丘東縁の基準とし、墳丘西側の標高 161.25 m のコンターラインが最も湾入する部分を墳丘西縁の基準とすると、直径 11m ×高さ 2m 以上である。墳形は、埋葬施設の石材抜き取りにより、墳丘南東側のコンターラインが直線的であるが、南東以外は円弧を描くことから円墳と判る。墳丘には、石室石材の大規模な抜き取りにより大きな陥没がある。しかしながら、陥没の形状から埋葬施設は南東方向に開口するものと判る。	
10号墳	西から東に向う緩やかな斜面の標高 179 m から標高 173 m の急斜面地に位置する。墳丘規模は、墳丘東側の標高 159 m のコンターラインより下方は、コンターラインが直線的になることから、標高 159m のコンターラインを墳丘東縁の基準とし、墳丘西側の標高 161.25 m のコンターラインが最も湾入する部分を墳丘西縁の基準とすると、直径 11m ×高さ 2m以上である。直径 16m、高さ 3.5m 以上の円墳である。急斜面に築造されている為に墳丘裏レベルが大きく異なり、見る位置によって墳丘高が異なる。墳丘東側からみると高さ 3.5m を測り、西側からだと高さ 1mほどである。墳丘は比較的良好に残存しているが、墳頂部は石材の抜き取りよってできたと思われる陥没があり、数点の大型石材が露出している。	26
11号墳	標高 170m の尾根上に位置する。墳丘西側のコンターラインが僅かに湾入している部分を考慮すると、直径 12m、高さ 2.5m の円墳である。他の古墳でみられるようなコンターラインの極端な湾入が本墳では認められず、墳丘背後の斜面のカットは不明瞭である。墳丘は墳頂部が僅かに窪んでいるほかは良好に残存している。墳丘西側に散乱した状態で須恵器を５点採集した（第８図）。	27
12号墳	分布地図によれば、11 号墳の東方に位置しているはずであるが、切り通しを境として古墳がある北側と耕作地になっている南側とでは顕著なレベル差がある。分布地図通りならば、造成により 12 号墳は破壊されたと考えたい。	

古墳番号	概要（現状・大きさ・埋葬施設）	写真図版
13号墳	標高 185m の急な斜面に位置する直径 12m の円墳である。墳丘は石室石材の抜き取りにより 5m × 3.8m の範囲で陥没している。この陥没では側壁材が露出している。原位置を保ち露出している側壁の石材は、長さ 0.80m 以上×厚 0.4m ×高さ 0.80m、長さ 0.6m ×厚 0.5m ×幅 0.65m である。墳丘、石室ともに残存状態は悪い。	
14号墳	府道 423 号により山麓の東側の斜面が分断されているが、霊前ヶ岳東山麓の標高 190m 付近の急な斜面に位置する。略測調査からゴミの大量投棄により明瞭な墳丘および石室は確認できないかった。また、遺跡地図台帳に記載された場所には、石室を構成したと考えられる数点の石材が露出しているのみで、詳細は明らかでない。	28
15号墳	霊仙ヶ岳東山麓の標高 200m 付近の急な斜面に位置する。略測調査から、墳丘は直径 7.1m ×高さ 2m を測り、墳形は円墳である。横穴式石室の天井石が、玄室内に落ち込んでおり、玄室左側壁と奥側が僅かに露出している。	
16号墳	霊仙ヶ岳山頂から続く尾根上の標高 230m 付近に位置する。略測調査から、墳丘は直径 9.3m ×高さ 1.7m を測り、墳形は円墳である。墳丘上には大きくとも 0.54m × 0.34m ほどの石材が数点見えるのみである。また墳丘上は陥没坑は見られず墳丘は良好に残存している。大形の石室石材の露出はみられないので完存していると思われるが、詳細は不明である。	
17号墳	霊仙ヶ岳東山麓の尾根状の地形を呈する標高 218m 付近に位置する。地図上では尾根の地形は表れていないが、この短い尾根の 17 号墳の下方に 18 号墳が位置する。略測調査から、墳丘は直径 16m ×高さ 4m を測り、墳形は円墳である。墳丘は石室石材の抜き取りにより、中央が大きく陥没している。石室は、左側壁と考えられる石材が 2 石落ち込んでおり、その石材の大きさは長さ 1.5m 以上×幅 0.6m ×厚 0.3m、長さ 1.4m ×幅 0.4m ×厚 0.5m である。	29、30
18号墳	霊仙ヶ岳東山麓の尾根状の地形を呈する標高 210m 付近に位置する。略測調査から、墳丘は直径 10.2m、高さ 3.1m を測り、墳形は円墳である。墳丘の残存度は比較的良好だが、天井石が 1 石完全に露出するほど盛土が流出している。完全に露出している天井石の大きさは、長さ 0.8m ×幅 1m であり、ここから想定される天井石付近の石室幅は比較的狭く、1m ほどと考えられる。また奥道の石材は、長軸が 0.5 ～ 0.9m 前後のものが数石露出している。	31
19号墳	分布地図によれば、423 号線が標高 180m の地点で峠最初のカーブに差し掛かる場所周辺に位置しているが、その付近一体は金網でまとめられた石のブロックが積まれており、またその周囲を探索しても墳丘は確認できなかった。このことから、19 号墳は消滅したものと考えられる。	

第 6 表　法貴峠古墳群一覧

古墳番号	墳形	墳丘 規模 直径（辺）	墳丘 規模 高	墳丘 残存度 ※2	石室（横穴式石室） 主軸方向	袖部	全長	玄室 長	玄室 高	玄室 幅	羨道 長	羨道 高	羨道 幅	残存度 ※2	遺跡台帳 ※3	備考
1	円	13.6	4.3	完存		両袖	9.2	5.24	1.8	2	3.96	0.9	0.7	完存	1 号墳	
2	円	15	3	完存	N333W	両袖	6.9	3.3	1.8	1.8	3.6	1	1.14	完存	2 号墳	
3	円	10	2	完存										完存？	3 号墳	須恵器採集 TK209 型式？
4	円	9	1	全壊										全壊	4 号墳	
5														消滅	5 号墳	
6	円	14.5	3.5	半壊										半壊	6 号墳	
7	円	11	1.5	完存										完存？	7 号墳	
8	円	11	2	半壊										全壊	8 号墳	
9	円	19	4.8	完存	N334W	両袖								半壊	9 号墳	
10	円	16	3.5	完存										半壊？	10 号墳	
11	円	12	2.5	完存										完存？	11 号墳	須恵器採集
12														消滅	12 号墳	
13	円	12	—	不明										不明	13 号墳	
14	円	—	—	不明										不明	14 号墳	
15	円	7.1	2				6.2			1.2				半壊	15 号墳	
16	円	9.3	1.7	完存		両袖？	5.8			1.1				完存？	16 号墳	
17	円	16	4	半壊			6.1			0.83				半壊	17 号墳	
18	円	10.2	3.1	完存			6.7	3.4		1.3	3.3			完存？	18 号墳	
19														消滅	19 号墳	

※ 1　単位は m

※ 2　残存度は序章第 3 節を参照

※ 3　京都府遺跡地図は 2002 年度を参考

※ 4　法量は現状値である。

（真鍋）

第３節　法貴峠２号墳　（第 11・12 図、写真番号 11 ～ 16）

第１項　位置と墳丘

１号墳から続く尾根のやや傾斜が緩やかになる、標高 162m から 164 mの高さに位置し、周囲に古墳はなく、単独墳的様相を呈する。墳丘規模は墳丘西側の標高 164 mのコンターラインが南北から湾入している箇所、墳丘北側の標高 163 mのコンターラインから下方が直線を呈する箇所、墳丘東側の標高 163 mのコンターラインから下方の間隔が広くなる箇所を墳丘裾とする。以上の墳丘裾の位置を基準にすると、直径 13m、高さ 3m の円墳であると判断した。

墳丘は盛土の流出により天井石が露出する部分はあるが、墳丘自体に大きな削平を受けた痕跡はなく、良好に残存している。また、現状では墳丘の西側には明瞭な尾根のカットはみられない。

本古墳に伴う遺物は採集していないが、２号墳の立地している場所からやや標高が高く、府道 423 号線に近接した標高 172 mから標高 174 mのやや平坦な地形を呈する場所から、須恵器の小片一点を採集している。

第２項　横穴式石室

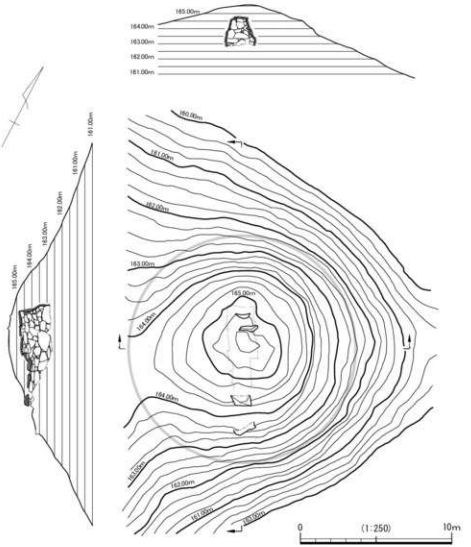
埋葬施設は、主軸を N333W にとり南南東に開口する両袖の横穴式石室である。石室は全長 7m 以上、玄室長 3.4m、同幅 1.8m、同高 2m 以上、羨道長 3.6m 以上、同幅 1.2m、同高 1m 以上を測る。平面プランは玄室の長幅比は約 2：1 の長方形を呈する。羨道部は埋没しており不明瞭だが直線的に伸びると思われる。天井石は玄室４石、羨道３石の計７石が架構され、開口方向に 1.3m × 0.4m 以上を測る石材が露出しており、転落した羨道天井石の可能性がある。また、玄室の右側壁全体が土圧の影響で内側に迫り出してしており、右側壁と前壁との境付近の石材が崩落寸前である。

石室に用いられている石材がチャート系であるために、節理に沿った石材の割れやひびが目立つ。ただそうした状態でも、墳丘と石室が良好に残存しており、本古墳群中では墳丘と石室を観察できる数少ない古墳である。

１）玄室

玄室全体は６段積みを基本としているが、細部にわたっての統一はされていない。奥壁の石材は基底部から標高 163.5m までは長さ 1m ×高さ 0.5m ほどの石材の長軸を横にして用い、標高 163.5m より上段は石材の高さに対する幅が小さくなり、下方と上方とでは石材の使い方に違いがみられる。各段はおおよそ３石で構成されている。奥壁中央と左側壁よりの最下段で石材の抜け落ちており、そこから土砂が石室内に流入している。

側壁は現状の最下段石材が玄室上部の石材に比べ、一回り以上大きく長さ 1m 前後の石材を用いており、石室の基底石の可能性が高い。現状の最下段石材より上部に向かって長さ 0.6m ×高さ 0.4m ほどで方形に近い石材や、やや横長の石材が用いられているが、両側壁とも石材の大きさは整っていない。側壁は現状床面から標高約 163.75m までは、ほぼ垂直に石材が積まれ、その高さから天井石までは急激に内傾する。最狭部では玄室幅の約 1/3 になる箇所もある。右側壁の極端な傾きは、土圧の影響による内傾も考慮しなければならないが、天井石の大きさが天井部幅とほぼ同じ箇所もあり、



第11図　法貴峠２号墳　墳丘測量図(S=1/250)

側壁の上方を内傾させたと考えられる。

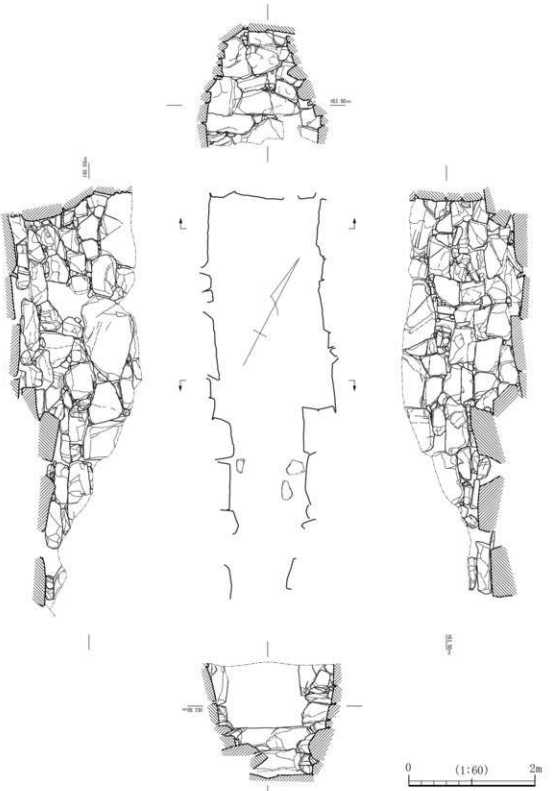
前壁は、長さ 1.4m 以上×高さ約 0.4m とほどの石材を、２段で架構する。上段は下段より玄室内に●cm突出しており、面を揃えていないのが特徴である。

奥壁と側壁が接する隅では両者に共有するように架けられた石材はみられないが、前壁と両側壁のコーナーでは、前壁と側壁の両者に共有して架けられた石材がみられる。

２）羨道

袖部は両袖であるが、突出度や石材の積み方は左右で差がある。左袖の１段目は、石材の長軸を横にして積み、１段目のみ２石で構成される。２段目以降は１段１石で段を構成する。また、天井石は玄門部から開口部に向けてゆるやかに高くなり、玄門部と開口部では約 35cm の比高差がある。このように、天井石に傾斜をもたせる羨道を持つ石室は、床面も天井と同じようにゆるやかに高くなるスロープ状を呈するものが多く、本古墳もその可能性がある（写真番号 12)。

一方右袖は左袖と異なり、立石状に現状の１段目を据え、２段目より上方は石材の長軸を横にして積む。　（真鍋）



第12図　法貴峠２号墳　石室実測図(S=1/60)

第４節　法貴峠９号墳　（第 13 図、写真番号 20 ～ 25）

第１項　位置と墳丘

標高 162m から標高 165 mの比較的ゆるやかな斜面地に位置する。墳丘規模は、北西側の標高 165 mのコンターラインが湾入している箇所、南東側の標高 162.5 mのコンターラインを境として間隔が広まる箇所、墳丘西側の標高 164.25 mから標高 165 mのコンターラインの湾入している箇所を墳丘裾と判断した。以上の墳丘裾の位置を基準にし、直径 19.5m、高さ 4.5m 以上の円墳と判断した。南北方向にやや直線的になっている以外は、コンターラインが円弧を描くことから円墳であると判断した。

墳丘は石室内部に石材が抜け落ちた際の陥没が認められる他は、良好に残存する。

第２項　横穴式石室

埋葬施設は、主軸をN334W をとり、南南東に開口する両袖の横穴式石室である。石室の大きさは、全長 10.5m 以上、玄室長 4.7m、同幅 2.3m、同高 2.7m 以上、羨道長 5.8m 以上、同幅 1.4m、同高 1m 以上を測り、平面プランは確認できる最下段の壁体は直線的で、玄室の長幅比が約２：１の長方形を呈する。羨道は埋没しているが、残存している羨門付近の石材から直線的に伸びるものとみられる。天井石は玄室３石と羨道１石の計４石が確認でき、開口部前面に長さ 2.5m ×幅 1.7m の巨石が露出しており、大きさや位置から転落した羨道部天井石と考えられる（写真番号 20）。玄室は５段積みを基本としている。

土圧の影響で右側壁が内傾し、右側壁中央上部から床面に石材一石が転落している。その影響で、右側壁の奥壁寄りの石材も転落の危険性がある。また、石室に用いられている石材はチャート質であるが丸みがある石材が多い。さらに石室の大きさに比例して、当群集墳内の古墳に用いられている石材より個々の石材が大きい。

本古墳群の中では墳丘と石室が良好に残存しており、１号墳・２号墳と共に石室の状況を観察できる数少ない古墳である。

１）玄室

奥壁は現状の石室最下段に、上部の石材より大きい長さ 1.5m ×高さ 1m 以上の石材を据え、最下段より上部の石材は、長さ 1m ×高さ 0.5m から長さ 1m ×高さ 1m と大きさにばらつきがあり、形状も不整形である。奥壁の壁面はほぼ垂直に積まれている。

側壁について左側壁の奥壁寄りでは、垂直気味に石材が積まれているのに対し、前壁寄りでは２段目まで垂直に積みあげ、３段目より内傾させている。石材の大きさは、長さ 1.3 mから 1.7 m×高さ 0.9 m前後の石材を中心に積み上げ、石材の隙間に人頭大の石材を充填している。右側壁では比較的石材の大きさが整っており、石材の間を充填する石材は左側壁より少ない。

前壁は長さ２m以上×高さ１m以上の石材一石を架構し、前壁の面はほぼ垂直である。

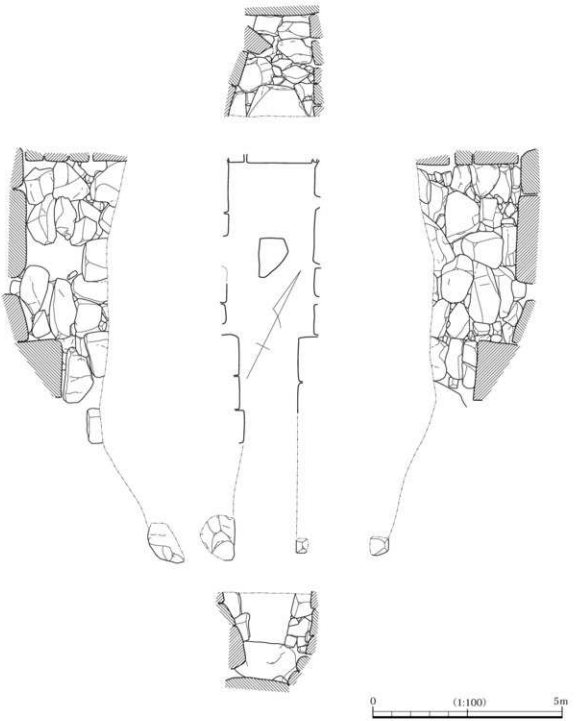
２）羨道

袖部は両袖であるが石材の積み方に差がみられる。左袖は長軸１m前後の石材を石室主軸方向に３

段積みにし、前壁に対応する箇所に位置する。なお、現状の左袖３段目の石材は、前壁の重みによるものか２つに割れている。一方右袖は２段が露出し、前壁の位置に対応する場所に位置しておらず、現状の１段目は玄室側に寄り、２段目は開口部に寄っている。

開口部に見られる左右の石材は、現地での観察から羨道内側に垂直な面を向けていること、この左右の石材の他にも石材が並んでいることから、築造当初の原位置を保っているものと考えられる。

（真鍋）



第13図　法貴峠９号墳　石室実測図（S=1/100）（『新修亀岡市史』第１巻より再トレース）

第５節　採集遺物（第 14 図、第 7 表、写真番号 32）

法貴峠古墳群からは多数の土器片を採集している。その全てが須恵器であり、大半が小片の状態であった。器種を特定できる程度の大きさがあるものは実測し、実測図を掲載することにした。その中には後述する３号墳から採集した甕のように、体部から頸部まで完形に近い状態まで復元できる資料もある。なお、遺物の採集地点については採集した古墳の項で報告していることから、本節では観察した遺物の特徴を採集した地点ごとに報告する。

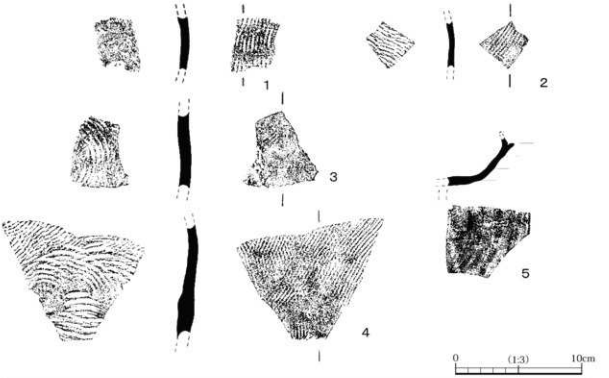
１は甕の体部である。外面はタタキ調整の後、カキメが施される。内面は当て具の圧痕があったものと思われるが、磨滅が著しく明瞭ではない。

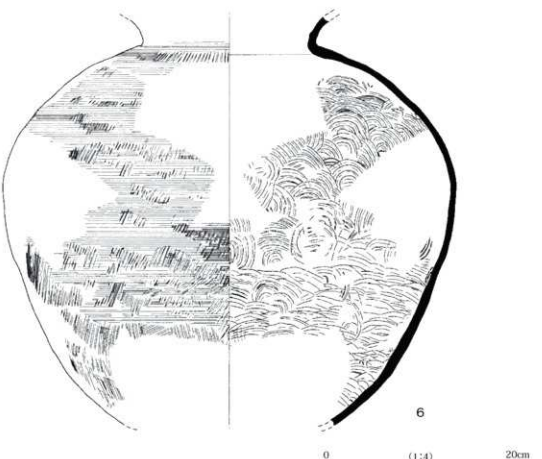
２・３・４は甕の破片である。いずれの破片も外面にタタキ調整が施され、部分的に指頭ナデが認められる。内面には当て具の圧痕が残る。また、３点とも色調が淡灰色を呈し、内面には鉄分によるものか、明黄褐色の沈着が見られる。

５は有蓋高坏である。坏の一部分で、脚部は完全に欠損する。坏底部外面に刀子状工具によるものと見られる２条の切り込みが認められる（写真番号 5）。この切り込みは 5mm の間隔をおいて平行している。さらに、底部中央から放射状に伸びているため、脚部のスカシを穿孔した際のものである可能性が高い。そのため、本資料は高坏の坏部であると判断した。坏部は立ち上がりの端部を欠損しているが､残存部分の状況からしてそれほど伸びないようである。その立ち上がりと受け部の境界は、鋭いＶ字状に入り込んでいる。また、体部は比較的深さがあり、膨らんだ印象を受ける。調整については外面は立ち上がりから体部にかけてロクロナデが、底部に回転ヘラケズリが施される。ヘラケズリの方向は反時計まわりである。内面にはロクロナデが認められる。

６は甕である。さらに口縁端部と底部を欠くものの、完形に近い状態まで復元できた。体部の最大径は 46cm で体部高の中央より上位にあり、やや肩の張った印象を受ける。体部から頸部にかけては急激にすぼまり、口縁部は「く」の字状に外反する。

本資料の製作技法については、まず体部外面はタタキ調整の後、カキメが施される。ただし、タタキが体部全体に施されるのに対して、カキメは下方へ向かうほど粗くなる。したがって、カキメ調整は残存する体部の下端から 1/4 には明瞭に認められない。頸部の調整はロクロナデによる。内面には全体にタタキ調整の当て具痕が残る。ただし、体部高の中央やや下のラインを境に、上下でその様子は大きく異なる。すなわち、上側では当て具の単位（同心円紋）が明瞭に認められるのに対し、下側では単位の判読が困難なほど密に重なり合っている。なお、当て具痕の方向には規則性がある。すなわち、上方から下方へと施されるようである。これは前述のライン下側でも例外でなく、密に重なる同心円紋の上部が押しつぶされずに比較的残っていることにより、上方から下方へ施されていることが分かる。さらに、中央やや下部のライン周辺の観察によれば、上側の当て具痕を下側の当て具痕が押しつぶしているようである。したがって、ライン上側から下側に調整がされたことが分かる。なお、内面の当て具の圧痕は外面のタタキ目と連動したものであることから、本来ならばタタキ目の観





（1：2号墳付近、2～4：11号墳、5・6：3号墳）

第14図　法貴峠古墳群　採集遺物（上段S=1/3、下段=1/4）

察でも、当て具痕と同様の単位や切り合いの特徴が指摘できるはずである。しかし、前述の通り外面には丁寧なカキメが施されており、明瞭な単位は確認できない。また、カキメの粗い底部付近では器体の残存している部分が少ないため、やはり単位の判読は困難である。

以上のような内面当て具痕の特徴は、甕の製作技法と関連したものである可能性が高く、横山浩一氏は本資料のような中型甕について、タタキ目の観察からその製作技法を明らかにしている（横山2003）。すなわち、横山氏によれば甕の製作における第一段階はロクロを回転台として利用しており、底は平底の状態であるという。その際に体部へのタタキとカキメが施される。この後ロクロから本体を取り外し、底面を薄い丸底にタタキ出す。この結果として、体部側面のタタキ目を押しつぶすように底面のタタキ目が施されるという。本資料では外面のタタキ目が明瞭に読み取れないことは前述した。しかし、これと連動する内面の当て具痕が、このような製作技法を反映していると思われる。すなわち、上部の当て具痕を下部の当て具痕が押しつぶしていることの要因は、下部の当て具痕が底部を丸底に成形した際のタタキ目に対応するものだからである。また、下部の当て具痕が単位の判読が困難なほど密に重なり合っていることについては、平底を丸底に成形する際に上部以上に複数回のタタキを施す必要があったからだと考えられるのである。

以上の採集資料のうち時期を想定できるものは、3号墳において採集した5の高坏のみである。口径は口縁部がわずかしか残存していなかったため、数値が一定しないが15cmから20cmといった値が得られた。立ち上がりは残存している部分の観察により、破面からさほど高くなく立ち上がりは1cm前後に収まるものと考えられる。また、坏部はやや深く丸みが残り、坏外面下半約1/3が丁寧な回転ヘラケズリが施されている。

以上のことから、調整と立上がりの特徴よりTK43型式期（田辺1981）より古くみることはでき

第7表　法貴峠古墳群採集遺物観察表

番号	採集古墳	種類	器種	部位	法量	調整 上：外面 下：内面	色調	焼成	胎土	口縁部残存率（%）	備考
1	2号墳？	須恵器	甕	体部	4.2	・タタキのちカキメ ・磨滅しており、不明	N5/5 灰白色 N7/7 灰白色	ふつう	直径2mm以下の砂粒をわずかに含む。	ふつう	—	2号墳より西の道路近くの平坦面
2	11号墳	須恵器	甕	体部	3.7	・タタキ ・同心円の当具痕	N6/6 灰色 N 7/7 灰白色	ふつう	直径2mm以下の砂粒をわずかに含む。	ふつう	—	
3	11号墳	須恵器	甕	体部	6	・タタキのち不定方向ナデ ・当具痕	N6/6 灰色 N 7/7 灰白色	ふつう	直径1mm以下の砂粒をわずかに含む。	ふつう	—	
4	11号墳	須恵器	甕	体部	9.7	・タタキのち一部ロクロナデ ・当具痕、指頭圧痕	N6/6 灰色 N 7/7 灰白色	ふつう	直径3mm以下の砂粒をわずかに含む。	ふつう	—	内面残存部分上1/4と下3/4とで2種類の当て具が用いられている。
5	3号墳	須恵器	高坏	坏部	3.7	・上2/3はヨコナデ、下1/3は回転ヘラ削り ・ヨコナデ	N5/5 灰白色 N6/6 灰色	硬	直径3mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	10	坏底部中央から放射状に、平行する2条の切込があり、脚部のスカシ穿孔痕と考えられる。
6	3号墳	須恵器	甕	頸部から体部	43.3	・タタキのちカキメ ・頸部はヨコナデ、体部は当具痕	N6/6 灰色	硬	直径2mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	—	部分的に焼成不良の箇所がある。

ず、また坏部が縮小する飛鳥Ⅱ段階（西 1986）より新しく位置づけることはできないと考えられる。ただし、残存度は悪いためあくまでも想定できる時期として、TK43 型式期から飛鳥Ⅰ段階までの時期範囲を想定しておきたい。

（志田・真鍋）

第６節　小結

以上、法貴峠古墳群の分布と各古墳の状況について報告した。最後に、本古墳群中に残存する１号墳・２号墳・９号墳と発掘調査が実施された 20 号墳の４基の横穴式石室について先後関係を示し、結びとしたい。１号墳については、写真からのトレースによりできるだけ 1/60 に近い形で提示している。

１号墳・２号墳・９号墳の諸特徴

１）袖部及び前壁

１号墳・２号墳・９号墳はすべて両袖であるが、積み方はそれぞれ異なる。まず、１号墳は１段１石で各段を長方形の石材を横積みにし、３段積みである。また羨道側への突出が高く、羨道幅は玄室幅のほぼ半分である。次に２号墳は、左右で突出度や積み方が異なる。左袖は基本的に１段１石であるが、基底部のみ１段２石である。右袖は最下段が立石状を呈する。９号墳は羨道及び袖部の埋没が著しいため本来の段数が確認できないが、両袖で、左袖は３段積みを基本とするようである。20 号墳は、両袖と考えられるが、右袖部は残存しない。左袖部は石材の長軸を横にして積む。

前壁の構造は、２号墳が２段、１号墳・９号墳が１段で構成され、20 号墳は失われているため不明である。

２）羨道天井石の架構

１号墳は袖部直上の天井石の１石が残存する。またこの天井石下面より高い位置に羨道部石材が原位置を保ち残存している（写真番号 7）。羨道部の２石目天井石が残存していれば、袖部直上より高い位置に架構されたものと想定でき、玄門部から開口方向にむけて緩やかに高くなる構造をしていたものと考えられる。

次に２号墳の羨道部天井石は３石が残存しており、この３石は玄門部から開口方向にむかって緩やかに高くなる構造をしている（第 11 図、写真番号 12）。

最後に９号墳の羨道部天井石は１石が残存し、もう１石は羨門方向に転落している。また残存する羨道部の石材は袖部天井石より低い高さまであり、周囲に石材が多く散乱している状況は認められないことから、現状の高さより極端に高くならず、平天井であった可能性がある。

３）側壁

側壁の積み方は、１号墳は長方形の大型石材を用い、石室内に向ける面は整っている印象を受ける。また、石室内の観察できる範囲内においては石室基底部から天井石までほぼ同程度の大きさの石材を

用いた５段積みを基本とし、小さい隙間を人頭大の石材を用いて充填する。２号墳は、基底部には大型石材を用いるものの、それより上方は基底部石材の半分程度の大きさの石材を用いており、基底部と基底部より上方とでは石材の大きさが異なる。段数は５段を基本とする。また石室内に向ける面は凹凸が著しく、整っていない印象を受ける。９号墳は１号墳と同様に大型の石材を用いて基底部から天井までの間を大型の石材を用いて積み、段数は５段を基本とするようだ。20 号墳は左側壁が残存している。段数は不明だが、玄室内では５段程度になるようだ。また石材が場所によって異なり、玄室内では小形、羨道では大形の石材が用いられている。

４）奥壁

奥壁の積み方は、１号墳は、基底部は観察できる範囲では、幅が１ｍ弱の小さい石材を用いて、１段を複数石用いて構成している。次に２号墳も１号墳と同様な用石となっている。９号墳は、前２者と異なり、基底部に玄室幅の約 2/3 を占める 1.5 ｍ幅の石材を鏡石のように基底部に用いて、その上部に方形に近い石材を積む用石となっている。20 号墳は、複数石で一段を構成している。

以上整理した３点をもとに、１号墳・２号墳・９号墳・20 号墳の先後関係について述べておきたい。さらに、９号墳については富山氏が TK43 型式期と時期比定しており、その年代観を基準とする（富山 2007）。

まず、各古墳の類似する特徴をあげる。類似する特徴として、９号墳と１号墳は袖部の３段積み、前壁を１石で架構する２点があげられ、２号墳とはまったく類似する特徴はない。また、20 号墳は残存している左側壁から、本来は３段程度であり、１号墳・９号墳と類似する。

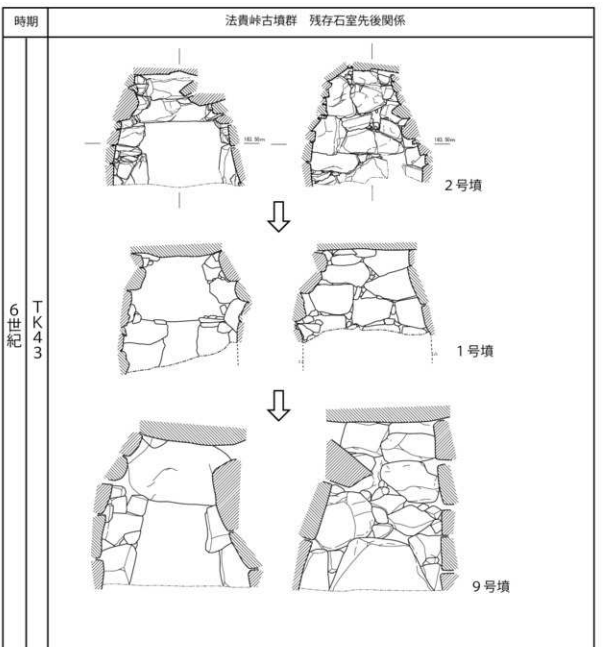
１号墳と２号墳の類似する特徴は、羨道天井石の架構と奥壁の積み方の２点があげられる。①羨道天井石の架構は、玄門から開口方向にむかって緩やかに天井石が高くなる特徴。②奥壁の積み方は、９号墳の奥壁最下段にみられるような大型石材を据えるような構築ではなく、小振りな石材を用いてやや乱雑に天井石まで積み上げているのが類似する特徴である。また、奥壁の特徴は２号墳と 20 号墳ともに非常に類似する。

第 15 図　法貴峠１号墳　石室写真トレース（Ｓ≒ 1/60）

以上のことから、類似する特徴を時期的な近接関係として考え、また石室石材が巨石化するという方向で考えれば、2 号墳→ 20 号墳→ 1 号墳→ 9 号墳という先後関係と考えられる。石室石材の巨石化は、前壁構造が 2 段で天井石到達する 2 号墳に対して、1 号墳・9 号墳は 1 石で天井石到達すること、さらに石室下部が上部に比べ大きくすべての石材が大型化されていない 2 号墳が一番古いといえる。石室石材の大きさに関しては玄室の石材の比較では 2 号墳と 20 号墳は同様な大きさといえる。

以上簡単ではあるが、法貴峠古墳群内の残存している石室の先後関係を述べた。今後、発掘調査などで石室の時期観が明らかとなる遺物が出土すれば、先後関係が変わる可能性は多分に残されている。

（真鍋）



※石材の外形線のみのものは、写真からトレースを行い、縮尺については可能な限り 1/60 に調整した。

第 16 図　法貴峠古墳群の横穴式石室の先後関係（S ≒ 1/60）

第２章　法貴古墳群

第１節　研究史

法貴古墳群は亀岡盆地南西部に所在する古墳時代後期の群集墳である。盆地南西部は、西側の霊仙ヶ岳から東に派生する尾根と、東側の龍ヶ尾山から北に派生する尾根により盆地中心部からやや隔絶された、南北 5km、東西 3kmの狭小な地域である（第２、３図）。それにもかかわらず、この盆地南西部、特に法貴古墳群が所在する霊仙ヶ岳東麓には、慈雲寺裏山古墳群・法貴南古墳群・法貴峠古墳群・中岩山古墳群・中西山古墳群といった数基～ 20 基程度の群集墳が密集している。その中で、法貴古墳群は『京都府遺跡地図（第３版）第２分冊』（京都府 2002）によれば総数 51 基の古墳群であり、他に比べ規模において傑出している。この 51 基という総数は、霊仙ヶ岳東麓のみならず、盆地南西部、引いては亀岡盆地の中でも注目すべき数字である。すなわち、盆地内では総数 200 基近い小金岐古墳群、国分古墳群（約 200 基）・平野古墳群（51 基）に次ぐ数であり、法貴古墳群は亀岡盆地を代表する古墳群の一つに挙げることもできるであろう。

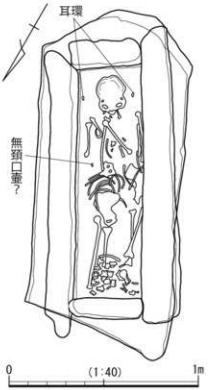
この法貴古墳群の存在が初めて周知されたのは、1912 年の岩井武俊氏の報告による。岩井氏によれば、確認した 50 基の古墳の「多くは發掘破壊されて石槨の比較的完存しておる者、此の多數の内で僅かに五六」（岩井 1912）であったらしい。また、古老への聞き取り調査によれば、岩井氏による調査のかなり以前から、石室石材の抜き取りが行われていたという。なお、現在古墳群中には古墳の一部を破壊して霊仙ヶ岳登山道が通じているが、岩井氏の報告にはこの登山道に関する記載も見られる。以上の内容は、後述する法貴古墳群の現況とほぼ一致する（第 18 図）。したがって、岩井氏により調査された 1912 年の段階で、法貴古墳群は現在の姿となっていたことが分かる。

法貴古墳群の研究史を概観する際には、改葬墓である H19（B1）号墳にも触れる必要があろう。H19（B1）号墳は 1964 年末に偶然発見された古墳である（亀岡市 2001）。安井良三氏により発掘調査が行われ、1 辺 4 m の方墳で墳裾に石列が配されていたことが判明した。埋葬施設は箱式石棺で、発掘調査時には既に蓋石が露出した状態であった。石棺内には 3 ～ 5cmの木炭混じりの灰層があり、人骨はその上から検出された。古墳の築造年代については、頭蓋骨の左右側頭部付近で発見された耳環により、6 世紀後半～ 7 世紀前半に位置付けられている。人骨については、池田次郎氏による形質人類学的な検討により、壮年女性と嬰児の 2 体が存在することが判明している（池田 1998）。さらに、これらの人骨は、詳細に点検すると解剖学的位置関係を保っておらず、また攪乱を受けたとも考えにくいという。以上のことから、池田氏は H19（B1）号墳を改葬墓と位置付けている。なお H19（B1）号墳の出土遺物については長く所在不明となっていたが、当研究会の追跡調査により耳環については、その所在が判明したので、第 2 節にて報告したい。

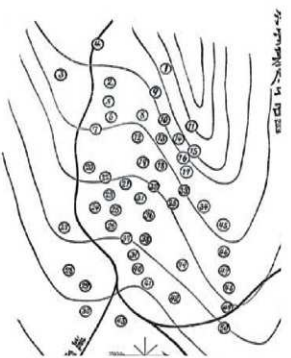
以上のように、古墳時代の改葬墓として重要な位置づけがなされる一方で、ほとんど詳細な調査が成されてこなかった法貴古墳群に対し、当研究会では 2005 年から 2009 年の 5 年間に亘り、分布・測量調査を実施した。以下、分布調査の結果について詳述する。

（志田・真鍋）

第 17 図　H18 号墳と腰掛ける岩井氏（岩井 1912 より）

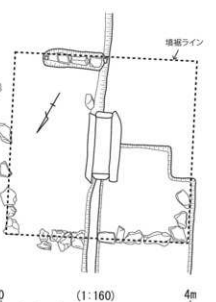


第 18 図　埋葬施設検出状況（S=1/40）
[亀岡市 1965 より再トレース]



第 19 図　岩井氏作成法貴古墳群分布地図
（岩井 1912 より）

写真 4　京都教育大学所蔵　耳環



第 20 図　H19（B1）号墳
墳丘測量図（S=1/160）
[亀岡市 1965 より再トレース]

第２節　既往調査の成果

第１項　H19（B1）号墳　出土耳環（写真１・写真４、第21図）

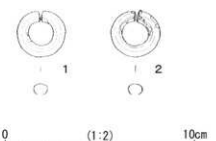
報告する２点の耳環は、長く京都教育大学考古学研究会にて来歴不明の資料として保管されていたもので、耳環を収めたプラスティックケースには、「亀岡市、法貴古墳」と記載されたラベルが添えられていた。法貴古墳群では昭和40年に19（B1）号墳が調査された際に、２点の金環の出土が報告されているが、現在では所在不明となっており、本資料はH19（B1）号墳から出土したものである可能性が極めて高い。

なお、本資料が京都教育大学に所蔵されるに至った経緯については、池田次郎氏の論考に以下のような示唆的な記述がある（池田1994）。論文によると安井良三氏によるH19（B1）号墳の発掘調査の後、改葬人骨は京都教育大学の小江慶雄氏の下に渡ったらしく、その後に、この小江氏を通じて形質人類学の権威である池田氏の下に改葬人骨は引き渡され、詳しい検討が成されることになる。以上のことから推測するに、本資料は安井氏から小江氏に、H19（B1）号墳出土の一括資料として改葬人骨と共に引き渡された。そして、小江氏から池田氏へは改葬人骨のみの検討が依託されたのではないか。この時点で、２点の耳環は改葬人骨以外の一括資料、報告には「無頸口壺形の小遺物」と共に、京都教育大学に残された可能性が高い（安井1965）。しかし、「無頸口壺形の小遺物」の所在は確認できなかった。

以下、観察した２点の耳環について報告する。なお、今回は自然科学的分析を行っていないため、所見はあくまでも肉眼で観察した限りのものである。

耳環１　側面は全体が金色を呈するものの、部分的に緑青が認められる。縦方向の径2.4㎝、横方向の径2.55㎝、断面の径0.74㎝を測る。本資料は緑青が認められることから銅芯であり、さらに、金色の表面層が非常に薄いため、金板貼製である可能性はないと考えらえる。また、片側の接面が破損している部分の観察や資料自体の重さから、中空であると判断した。したがって、本資料は渡辺智恵美氏の分類によれば、中空の銅芯に鍍金した金銅環か、金箔を貼った銅地金箔貼製のいずれかであると思われる（渡辺1997）。また、比較的良好に残存している方の接面の観察によれば、本資料は「接面に合わせた形状に切断した薄い板を接面にのせ、それを被うように側面端部を垂直に折げ」る仕上げ方法である。

耳環２　側面は大部分が金色を呈するものの、接面付近を中心に緑青が認められる。縦方向の径2.45㎝、横方向の径2.6㎝、断面の径0.72㎝を測る。本資料は緑青が認められることから判断して、銅芯であることが分かる。さらに、金色の表面層が非常に薄いため、金板貼製ではないと考えられる。また、側面の一部に認められる亀裂の観察や資料自体の重さから、中空であると判断した。



第21図　H19（B1）号墳　出土耳環
（S=1/2）[京都教育大学所蔵]

したがって、本資料も耳環１と同様に、金銅環か銅地金箔貼製のいずれかであると思われる。なお、接面の仕上げ方法は、大半が緑青に覆われているため判断し難いが、部分的な観察による限り耳環１と同様であると思われる。

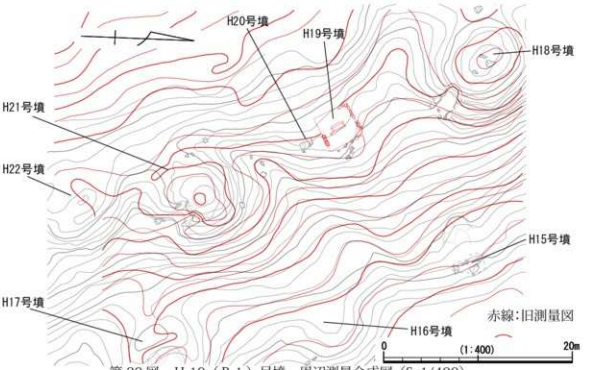
以上の観察によると、これら２点の耳環は法量、製作技法ともに共通しており、一対で使用されたものと判断できる。

（志田・真鍋）

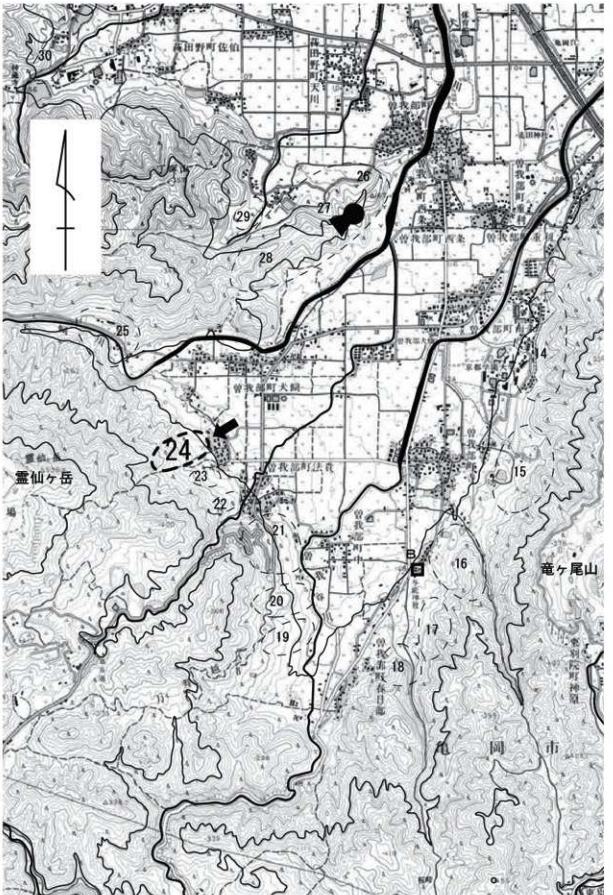
第２項　H19（B1）号墳の位置と周辺古墳との関係（第 22 図）

H19（B1）号墳の墳丘については、既に述べた通り 1964 年に亀岡市教育委員会によって埋葬施設と墳丘の調査が行われ、埋葬施設を箱式石棺とし、外護列石を配する墳丘規模一辺４ｍの方墳であると報告された。今回の調査には H19（B1）号墳の地点する場所が含まれており、本項では H19（B1）号墳と周囲の古墳の位置関係について報告する。本古墳群中の標高 202m 付近に、H19（B1）号墳の位置が石柱によって示されている。周囲の観察から、墳丘規模を示す外護列石は調査後埋め戻されており観察できず、墳丘の位置を示すものは石柱のみである。そこで 1964 年の旧測量図と今回の測量図を重ね合わせ､H19（B1）号墳の位置の復元を試みた。合成にあたっては磁北を第一とした。さらに、当時の測量図には H18 号墳・H21 号墳が含まれていることから、コンターラインの湾曲を参考にし、総合的に判断した（第 22 図）。合成図によれば、H19 号墳と H20 号墳とは、埋葬施設の芯々距離は約４ｍであり、外護列石から H 20 号墳の埋葬施設までの距離も約 2m と、両墳の位置は近接している。築造時期の先後関係は不明であるが、近接する位置関係から、キョウダイといった密接な関係を想起させる。

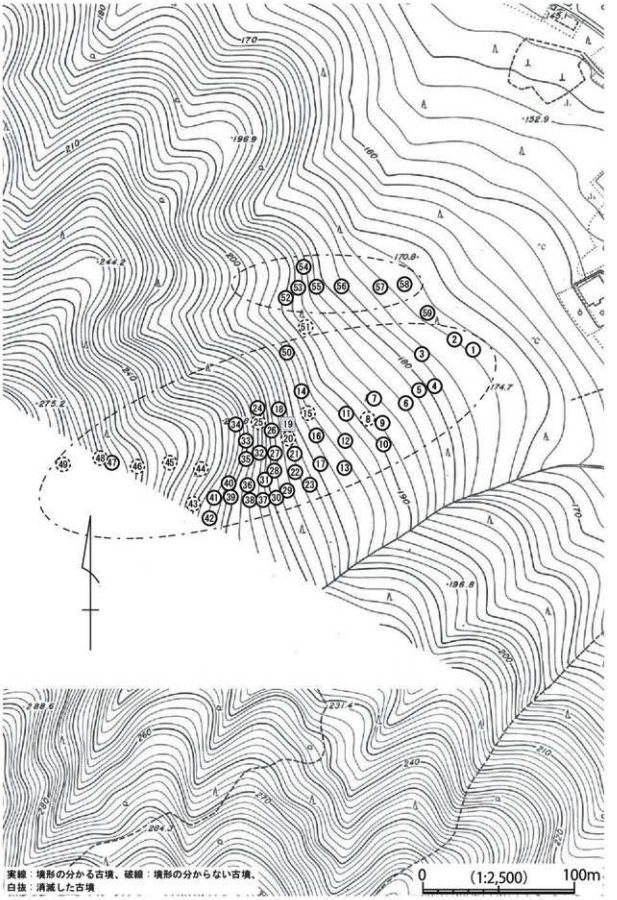
（真鍋）



第 22 図　H 19（B 1）号墳　周辺測量合成図（S=1/400）



第 23 図　法貴古墳群の位置（S=1/25,000）



第24図　法貴古墳群　分布図（S=1/2,500）

第３節　分布・略測調査の成果

法貴古墳群は『京都府遺跡地図（第３版）第２分冊』（京都府 2002）によれば 51 基と報告されている。しかし、研究会による分布調査では、新たに 8 基の古墳を発見しており、これをあわせると総数 59 基となる。なお、今回の分布調査の成果と『京都府遺跡地図』との対応関係については、別表の通りである（第 8 表）。以下、分布について報告する。

法貴古墳群は霊仙ヶ岳から東に派生する尾根の南斜面、標高 170 mから 280 mに分布している。この範囲は比較的なだらかな斜面地を呈しており、古墳が多く築造されている。なかでも標高 200 mから 220 m、南北 70 mの間に古墳が約 25 基集中して築造されている。群集墳が立地する範囲内ではやや緩やかな斜面であり、古墳の築造条件に適していたため周囲よりも数多くの古墳が築造されたものと考えられる。当研究会が墳丘測量・石室実測を行った古墳もこの範囲に含まれる。また、標高 230 mから 270 mでは、古墳群が立地する斜面が急峻な谷地形に変わる。したがって、古墳の築造可能な場所は地形の制約を受け、その分布は尾根よりやや下がった傾斜変換点に点在する。

また、法貴古墳群の大半が立地する尾根とは別に、その北側の尾根にも古墳が築造されている。すなわち、標高 187 m付近の H51 号墳から標高 172 m付近の H58 号墳まで、尾根筋に立地する一群があり、古墳群中心部との間には空間地（現状では沢状を呈する地形）が存在する。よって、法貴古墳群は古墳群中心部と尾根筋の群の２つに大きくグルーピングが可能であり、群内での支群の可能性がある。

略測の結果、以下の内容が明らかになった。法貴古墳群は横穴式石室を埋葬施設とする径 15 m程度の小円墳からなる古墳群であり、典型的な後期群集墳と位置付けることができる。ただし、例外として H3 号墳については埋葬施設に横穴式石室が予想されるものの、径が 21 m以上となり群中でも最大であり注目される。さらに、H19 号墳は 1 辺 4 mの方墳で、埋葬施設が箱式石棺の直葬であり、群内でも特異といえる。

横穴式石室については大半が石材の抜き取りにより破壊されており、墳丘の中央が陥没した馬蹄形の地形や石材の散乱等により、辛うじてその存在を確認できるものがほとんどである。石室が完存していたのは、今回実測した H12 号墳・H18 号墳・H24 号墳のみであり、H21 号墳については羨道部が破壊されていたので完存とは言い難い。このほか、石室が比較的良好に残存している古墳として H11 号墳・H33 号墳・H45 号墳・H49 号墳を挙げ得るが、開口部が埋没しており著しく狭いため、実測は行わなかった。

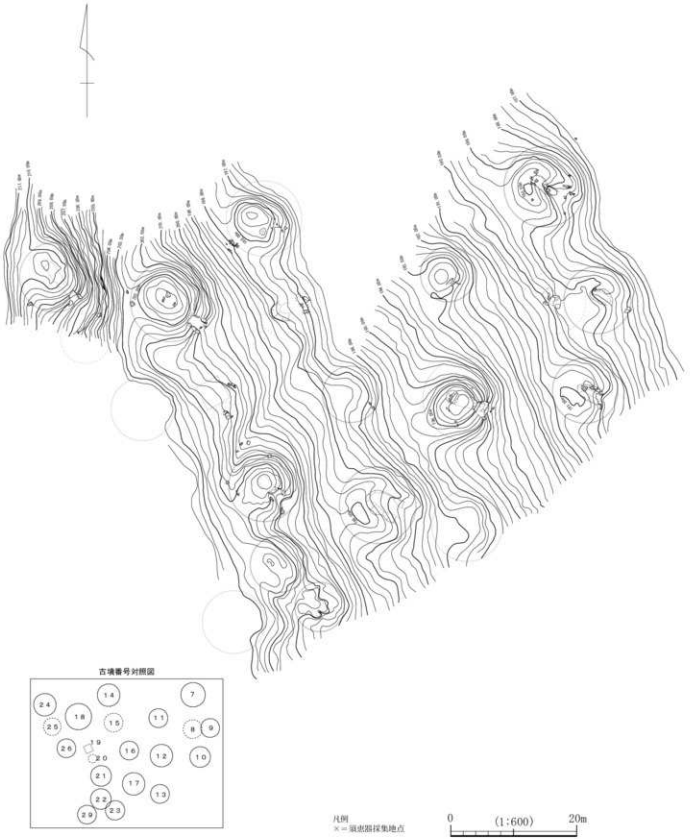
（志田・真鍋）

※法貴古墳群の分布図に使用している亀岡市の都市計画図には図化されていない範囲があったが、そのまま使用しているため空白部分がある。

第８表　法貴古墳群　一覧

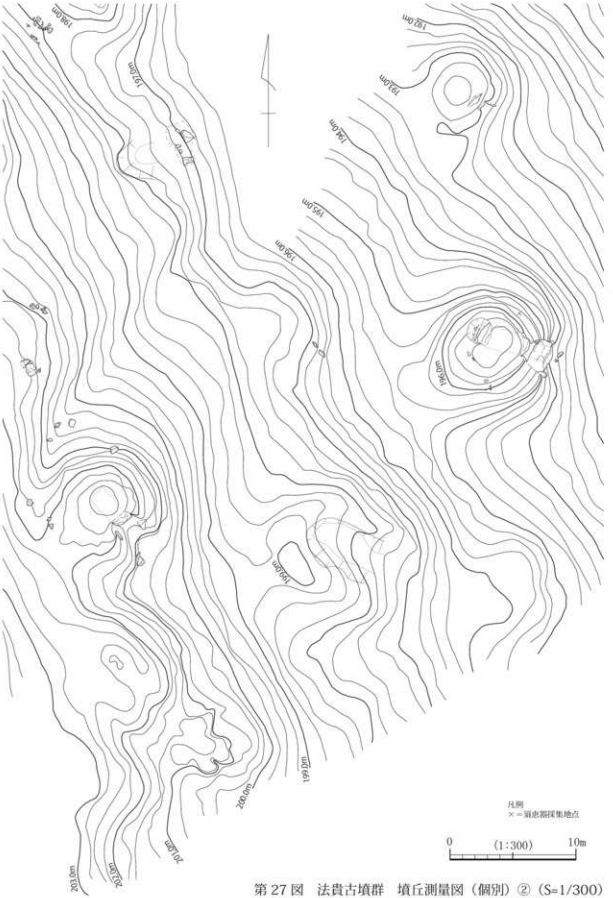
古墳番号	墳丘				石室（横穴式石室）										遺跡台帳※３	備考
	墳形	規模		残存度※２	主軸方向	袖部	全長	玄室			羨道			残存度※２		
		径（辺）	高					長	高	幅	長	高	幅			
1	円	9.5	1.5	完存										不明		
2	円	7.4	1.2	完存	N330W									不明		須恵器採集
3	円	20.7	5.2	完存	N320W		7.65			2.90			2.30	不明		須恵器採集
4	円	10.7	3.3	半壊	N318W		4.72							半壊		
5	円	10	3.3	半壊	N321W									半壊		
6	円	13.9	3.6	半壊	N310W		5.90							半壊		
7	円	13.5	2	半壊	N320W	無袖？								半壊		須恵器採集 TK209 型式
8				不明						1.60			1.50	全壊		
9	円	10.8	1.3	半壊	N296W		6.80			1.28				半壊		須恵器採集
10	円	11	1.8	半壊	N304W	無袖	5.90			1.30			1.50	半壊		
11	円	8.5	1.8	完存	N300W	無袖	4.40		1	0.90				半壊		須恵器採集
12	円	13	3	完存	N299W	両袖	6.76	3.96		1.78	4.98		1.20	完存		
13	円	11	2.6	半壊	N320W									半壊		
14	円	12	3.3	完存	N104E		4.60						1	半壊		
15				半壊	N80E									半壊		
16	円	11.9	2.4	半壊	N330W		3.90							半壊		須恵器採集
17	円	16	3.3	半壊	N288W		6.50			1.46				半壊		
18	円	14	3	完存	N315W	左片袖	9.20	3.25	2.33	1.60	5.80		1.40	半壊	18 号墳	須恵器採集
19	方	4	—	消滅	箱式石棺　内法　長さ 1.23 m×幅 0.72m　人骨２体 底板無、長側板２石、短側板２石、蓋石１石									完存		亀岡市文化資料館に移築
20	—			不明	N322W	小石室　長さ約 1 m以上×幅約 60cm								完存	新規	
21	円	10	3	完存	N317W	無袖？	6.75		1.4	1.3				半壊		須恵器採集
22	円	10.1	2.5	完存	N320W		6.65							半壊		
23	円	10.3	2.7	完存	N305W									半壊		須恵器採集
24	円	12.5	3	完存	N351W		7.8	3.02	1.79	1.55	4.78	1.05	1.10	完存	20 号墳	須恵器採集
25	円			不明										半壊		
26	円	10.1	2.1	完存	N315W									半壊		
27	円	9.4	1.9	半壊	N330W									半壊		
28	円			半壊										半壊		
29	円	10	3.2	半壊	N320W									半壊		
30	円	6.9	1.7	半壊	N308W									半壊		
31	円	6	1.8	半壊										半壊		
32	円	9.8	2.8	半壊	N322W		5.80		1.50	1.15				半壊		
33	円															
34	円			半壊										半壊		
35	円	8.8	2.2	半壊	N330W		4.90							半壊		
36	円			半壊										半壊		
37	円	7.6	2	半壊										半壊		
38	円			半壊										半壊		
39	円	9.6	3.1	半壊										半壊		
40	円			半壊										半壊		
41	円	10	3.8	半壊	N340W		5.50			1.30				半壊		
42	円	8.1	2.9	半壊	N320W		5.80			1.50				半壊		須恵器採集
43	円			不明			3.40		1.70	1.20				半壊		
44	円	6.4	2.7	不明	N301W	無袖	5		1.30	1.60				全壊		上師器採集
45	円		3	不明	N310W	無袖	4.50		1.55	1.15				全壊		
46	円			不明	N29E	無袖	2.10			0.90				全壊		
47	円		3	半壊	N355W	無袖	6.20		1.36	1.60				全壊		
48	円			不明	N29E		5.14			1.50				全壊		
49	円			不明	N321W	無袖	6		1.60	1.23				全壊		
50	円			完存										不明		
51	円			不明										半壊		
52	円	10.8	3.4	半壊	N300W									半壊		
53	円			半壊										半壊		
54	円		2	完存										不明		
55	円			半壊										半壊		
56	円	9.7	2.7	半壊	N309W									半壊		
57	円	10.7	1.8	半壊										半壊		
58	円	11.9	9.5	半壊										半壊		
59	円	9.9	1.6	半壊	N84E									半壊		

※１　単位はｍ　※２　残存度は序章第３節を参照　※３　京都府遺跡地図は 2002 年度を参考　※４　法量は現状値である。



第 25 図　法貴古墳群　墳丘測量図（全体）(S=1/600)

第 26 図　法貴古墳群　墳丘測量図（個別）①（S=1/300）
H7 号墳・H8 号墳・H9 号墳・H10 号墳・H11 号墳・H12 号墳・H13 号墳



第 27 図　法貴古墳群　墳丘測量図（個別）②（S=1/300）

H11 号墳・H12 号墳・H13 号墳・H15 号墳・H16 号墳・H21 号墳・H22 号墳・H23 号墳

第 28 図　法貴古墳群　墳丘測量図（個別）③（S=1/300）
H14 号墳・H18 号墳・H21 号墳・H22 号墳・H24 号墳

第９表　法貴古墳群の概要

古墳番号	概要（現状・規模・埋葬施設）	写真図版
H１号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 172 m から 176 m付近の比較的緩やかな斜面に位置する。墳丘は、略測調査から直径 9.5m ×高さ 1.5m を測る円墳である。封土は墳丘が判る程度に残存しているが、全体の残存状況は悪い。墳丘の南側に最大で長さ 0.8 m×幅 0.5 mのほか数石が露出しており、石室石材の可能性がある。	
H２号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 172 m から標高 176 m の比較的緩やかな斜面に位置する。略測調査から、墳丘は直径 7.4m ×高さ 1.2m を測る円墳である。封土の残存状態は悪いが、墳丘の南東側が比較的残存している。また、長さ 0.6 m×幅 0.44 mの石材の他に、数石が散乱しているのが認められる。墳丘上から須恵器片を採集している。	
H３号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 174 m から標高 180 m付近、４号墳から６号墳が位置する急な斜面が緩やかに変化する場所に位置する。略測調査から、墳丘は直径 20.7m ×高さ 5.2m を測る円墳である。本古墳群中最大の墳丘を有している。墳丘の残存状態は、墳頂部に数ヶ所の陥没が認められるが比較的良好である。天井石と石室石材が露出しており、埋葬施設は横穴式石室であると判断できる。	33、34
H４号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 176 m から標高 180 m付近の急な斜面に位置する。略測調査から、墳丘は直径 10.7m ×高さ 3.3m を測る円墳である。墳丘は封土の流出が著しく、浅くくぼんだ馬蹄形に残存している。右側壁の渓門付近・左側壁の玄室奥側と奥壁の石材が部分的に露出しており、石室の下半部は残存していることが判る。また、墳丘の南東方向に長さ 1 m×幅 0.7 m、長さ 1 m×幅 0.5 mの石材が露出しており、４号墳石室を構成していた石材と考えられる。	
H５号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 180 mから標高 184 m付近の急な斜面に位置する。略測調査から、墳丘は直径 10m ×高さ 3.3m を測る円墳である。墳丘は石室石材の抜き取りなどにより中央が陥没しているため、浅い馬蹄形を呈する。墳丘上には長さ 0.2 mから 0.4 mの小礫が散乱している。また、墳丘裾には長さ 1.2 m×幅 0.8 m×厚 0.3 mの石材が露出しており、大型の石材を使用していることから、埋葬施設は横穴式石室であったと判断できる。	
H６号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 182 mから標高 186 m付近の急な斜面に位置する。略測調査から、墳丘は直径 13.9m ×高さ 3.6m を測る円墳である。墳丘は石室下半部とみられる石材が露出するなど、石材の抜き取りが著しいため、中央が浅くくぼんだ馬蹄形に残存している。残存している石材は、渓門付近の左右側壁で計５石が確認でき、左側壁の露出している石材は最大長 1.65 mを測る。また、石室内には長さ 1 m大の石材が１石落ち込んでおり、２段目以上の側壁石材と思われる。	
H７号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 187 mから標高 190 m付近のやや緩やかな斜面に位置する。墳丘規模は、墳丘東側の標高 187.5 m のコンターラインより下方は間隔が広くなることから墳丘裾とし、墳丘西側は標高 189.25m のが最も内湾する場所を墳丘西側の裾とする。したがって、直径 13.5m ×高さ 2m を測る円墳である。石室は天井石を欠くものの、２～３段目まで残存している。また、側壁石材であろう長さ 0.4 m×幅 0.4 mから長さ 1.1 m×幅 0.45 mの複数の石材が、玄室内に落ち込んでいる。さらに、渓門には入頭大の石材が散乱しており、閉塞石の可能性がある。石室石材の抜き取りはあるものの、比較的残存度が高い。	35、36
H８号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 189 mから 190 mの斜面に位置し、９号墳の西側に近接する。墳丘規模は、墳丘の大きさを示すコンターラインの変化がなく直線的であり、現地での観察でも墳丘を示す隆起はみられなかった。しかし、長さ 2.3 mほどの石材が露出しており、その石材を中心に浅く陥没した地形を呈している。さらに、陥没内には長さ 10cm から長さ 1 m大の石材が散乱している。以上のことから、古墳であると判断した。	37
H９号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 187 mから 190 mの斜面に位置し、墳丘西側には８号墳が近接する。墳丘規模は、東側の標高 187 m付近より上位のコンターラインが墳丘の形状を示していることから墳丘東側の裾とする。墳丘西側は、標高 189.25m の最も内湾する部分を墳丘西側の裾とする。したがって直径 10.8m ×高さ 1.3m を測る円墳である。墳丘にはある程度残存するが、石室の残りは悪い。ただし、馬蹄形の地形から開口方向を復元することは可能である。開口方向には 1.35 m× 0.4 m× 0.8 mの石材が露出している。また、墳丘裾には 0.7 × 0.5 mの石材が露出する。	
H１０号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 189 mから 191 mの斜面に位置する。墳丘規模は、東側は標高 189.25m より上位のコンターラインが墳丘の形状を示していることから墳丘東側の裾とする。そして、墳丘西側は標高 190 mのコンターラインが最も内湾する部分を墳丘西側の裾とする。したがって直径 11m ×高さ 1.8m を測る円墳である。石室の残存状態は悪い。ただし、石室の側壁材が石室内に平坦面をむけ、露出していることから、原位置を保つ石材だと思われる。その場合、奥壁の位置に、長さ 0.9 ×幅 0.6 mの石材が露出しているが、平坦面を基準にすれば、平坦面を石室内にむけていないので原位置を保つかは不明である。	
H１１号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 191 mから 193.25 mの比較的緩やかな斜面に位置する。墳丘規模は、東側の標高 191.75m より上位のコンターラインが墳丘の形状を示すことから墳丘東側の裾とする、墳丘西側は 193m が最も内湾する部分を墳丘西側の裾とする。したがって、直径 8.5m ×高さ 1.8m 以上を測る円墳である。墳丘は良好に残存しており、天井石が僅かに露出している。横穴式石室は開口しているものの、羨道部分は埋没している。埋葬施設は、長さ 4.4 m以上×幅 0.9 m×高 1 m以上の小型の横穴式石室である。	38～41

古墳番号	概要（現状・規模・埋葬施設）	写真図版
H13号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 195 mから 196.25 mの斜面に位置する。墳丘規模は、東側の標高 196 mより上位のコンターラインが墳丘の形状を示すことから墳丘東側の裾とする。墳丘西側は標高 196 mのコンターラインが最も内湾する部分を墳丘西側の裾とする。したがって、直径 11m ×高さ 2.6m を測る円墳である。墳丘は墳頂部が浅く窪み馬蹄形を呈するが、残存度は高い。また、開口部と考えられる付近には、長さ 0.4 m×幅 0.2 mの石材が露出している。	
H14号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 196 mから 198 mの斜面に位置する。墳丘規模は西側の 197.75m のコンターラインが最も内湾する場所を裾とする。したがって、直径 12m ×高さ 3.3m を測る円墳である。墳丘は陥没が認められるが、良好に残存している。また、長さ 1.7 m×幅 0.8 m以上の天井石が露出し、墳丘南側に長さ 0.3 mから 0.5 m程の人頭大の石材が散乱している。道側壁石材の可能性がある。	
H15号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 196.75 mから 198 mの斜面に位置する。墳丘規模及び墳形は、それを示すコンターラインの変化、及び現地での観察でも墳丘を示す隆起は確認できなかった。しかし、南東方向に開く長さ 5 m×幅 2 m×深さ 0.75m の陥没が認められる。陥没した地形には、長さ 1.10m ×幅 0.8m、長さ 1 m ×幅 0.6 mの石材の他に人頭大の石材が集積しており、石室石材の可能性がある。以上のことから古墳であると判断した。	
H16号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 196 mから 198 mの斜面に位置する。墳丘規模は、墳丘東側の標高 196.25m より下方のコンターラインからコンターの間隔が広がることから墳丘東側の裾とする。墳丘西側は墳丘の形状が不明瞭であるが、墳丘南北から西側に向けてコンターラインが円弧を描きながら湾入する。したがって、直径 11.9m ×高さ 2.4m の円墳である。墳丘上には拳大から人頭大の石材が散乱し、大きいもので 0.55m × 0.25m、0.75m × 0.4m の石材が認められる。	
H17号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 196 mから 199 mの斜面に位置する。13 号墳のすぐ東側にあり、墳裾が近接している。墳丘規模は、墳丘東側の標高 197 mのコンターラインより下方は直線的になり間隔も広がることから、ここを墳丘東側の裾とする。墳丘西側は、標高 198.75m のコンターラインが最も内湾する部分を墳丘西側の裾とする。したがって、直径 16m ×高さ 3.3m を測る円墳である。墳丘は石室石材の抜き取りにより中央が陥没しており、馬蹄形を呈する。また、墳丘上には拳大の礫が散乱するほか、奥壁の可能性がある長さ 0.5 m程の石材が露出している。	
H20号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 200 mから 202 mのなだらかな斜面に位置する。19 号墳と近接して築造されている。墳丘は盛土がほぼ流出しているため、墳丘の形や規模は、現地での観察から古墳上の起伏は観察できず、またコンターラインの変化もみられないため、詳細は不明である。19 号墳と近接していることから直径（辺）は 4 mを超えないものと想定される。盛土の流出により石室の天井石が完全に露出している。また、天井石の隙間からの観察より、埋葬施設の大きさは長さ 1.7 m以上×幅 0.6 mを測り、南南東に開口する小型の横穴式石室であることが判る。天井石の大きさは南から、長さ 1 m×幅 0.8 m、長さ 45cm ×幅 75cm である。	55～57
H22号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 202 mから 206 mの緩やかな斜面に位置する。墳丘は、略測調査から直径 10.1m ×高さ 2.5m を測る円墳である。墳丘は馬蹄形に残存しており、北東方向の墳丘中位には列石状に並ぶような石材群が認められる。	
H23号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 200 mから 204 mの緩やかな斜面に位置する。墳丘は、略測調査から直径 10.3m ×高さ 2.7m を測る円墳である。墳丘は南東方向に流出しており、石室は奥壁と右側壁のコーナー部分が露出している。石室の奥壁は 0.4m × 0.35m 以上の石材、右側壁は 0.3m × 1.6 m以上の比較的小ぶりな石材を使用している。	
H25号墳	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 212 mから 216 mの急な斜面に位置する。墳丘が位置する場所は急斜面であり、そのためか封土は流出しているものとみられる。また、18 号墳から 25 号墳の間の傾斜変換点には大小の石材が散乱しており、転落した 25 号墳の石材の可能性がある。24 号墳の開口方向には、奥壁と考えられる幅 1.30 m×高さ 0.35 mの石材が露出しており、その下にも石材が確認されることから、横穴式石室である可能性がある。	
26号墳H	霊仙ヶ岳東側山腹の標高 206 mから 212 mの緩やかな斜面に位置する。墳丘は、略測調査から直径 10.1m ×高さ 2.1 mを測る円墳である。石室は奥壁付近で幅 1.22m、両側壁が残存するもっとも開口部側で幅 1.25m を測り、玄室を中心に 3 段目まで残存する。ただし天井石は全て失われている。残存する石材は全て石室内にむけて面が整えられている。墳丘は残存度は悪くマウンドが確認できる程度に残存している。	
H27号墳	標高 206 mの比較的緩やかな斜面に位置する直径 9.4m、高さ 1.9m の円墳である。石室は玄室を中心に石材がある程度残存しているものの、正確な大きさは不明である。	
H28号墳	標高 207 mの斜面に位置する古墳である。封土及び石室はほとんど失われていることから、墳丘規模などは不明である。墳丘上に 50㎝大の石材が露出しているほか、墳丘裾にも 30㎝大のものが数石認められる。	

古墳番号	概要（現状・規模・埋葬施設）	写真図版
H29号墳	標高 206 mの斜面に位置する直径 10m、高さ 3.2m の円墳である。封土及び石材はほとんど失われている。小礫が墳丘上に散在する。	
H30号墳	標高 208 mの斜面に位置する直径 6.9m、高さ 1.7m の円墳である。封土及び石材はほとんど失われている。しかし、土中に石材の反応があり、基底石が残存している可能性がある。	
31号墳	標高 209 mの斜面に位置する直径6m,高さ 1.8mの円墳である。墳丘は完存しないものの、比較的残りが良い。墳丘上に 40cm大の石材が数個露出している。また、墳丘裾にも最大 1.2 m大の比較的大型の石材が露出している。石室は残存していないが、石室を構成していた石材の可能性がある。	
H32号墳	標高 212 mの急斜面に位置する直径 9.8m、高さ 2.8m の円墳である。奥壁の石室幅 1.22 m、開口部付近の石室幅 1.25 mである。最も残存している玄室付近で 3 段目まで石組が確認できる。石室は羨門部付近は一段目が確認できるのみである。右側壁では最大 1.05m × 0.56m、奥壁では 1.12m × 0.52m の石材が用いられている。	68～70
H33号墳	標高 218 mの比較的緩やかな斜面に位置する古墳である。墳丘はよく残存しているが略測データがなく、詳細は不明である。天井石は 1.3 m以上× 0.38 m以上露出している。開口部付近では 0.57 m× 0.62 mの石材が露出している。石室は開口部が崩落、隘没しているが部分的に開口しており内部に入ることができる。	71～73
H34号墳	標高 222 mの急峻な斜面に立地する古墳である。略測データがなく詳細は不明である。墳丘は南に開く馬蹄形の隘没が認められるが、石室石材は隘没内には認められない。角礫が散在し 50cm大、70cm大の石材が露出している。	
H35号墳	標高 218 mの斜面に位置する古墳である。略測調査から､墳丘は直径 8.8m ×高さ 2.2m を測る円墳である。。石室は奥壁と思われる石材が一石残存しているのみである。封土も大半が失われている。ただし、土中に石材の反応があり、多くが埋没している可能性がある。また、墳丘上には小礫が散在する。北側の墳丘裾には 80cm大の石材が露出しており、崩落した石室石材の可能性がある。	
36号墳	標高 215 mの斜面に位置する古墳である。略測データがなく詳細は不明である。墳丘は馬蹄形に隘没している。長さ 1.13 m×幅 0.35 m、長さ 0.6 m×幅 0.8 mの大形の石材が露出しているが、原位置を保っていないものと考えられる。開口部付近には石室石材と考えられる石材が露出しており、封土の大半が失われている。	
H37号墳	標高 211m の斜面に位置する古墳である。略測調査から、墳丘は直径 7.6m ×高さ 2m を測る円墳である。。封土及び石材はほとんど失われている。ただし、墳丘上に 30 ～ 50cm大の石材が露出しており、石室石材の可能性がある。また、墳丘周囲には小礫が散在する。	
H38号墳	標高 215 mの斜面に位置する古墳である。封土及び石材はほとんど失われている。略測データがなく詳細は不明である。墳丘上には、最大 80cm大の石材が数石露出している。また、墳丘裾に人頭大以下の大きさの石材が散在し、閉塞石の可能性がある。	
39号墳	標高 219 mの斜面に位置する古墳である。略測調査から､墳丘は直径 9.6m ×高さ 3.1m を測る円墳である。。封土の流出が認められ残存状態は悪い。石室を構成していたと考えられる約 50cm大の石材が 3 石が墳丘中央に、北東の墳丘裾と考えられる地点に約 60cm大の石材が 1 石露出している。	
H40号墳	標高 220 mの斜面に位置する古墳である。略測データがなく詳細は不明である。墳丘状の隆起はほとんど認められないが、南北 2.5 m、東西 3.2 mの大きな隘没が認められ、石室があった可能性があり積極的に古墳と判断した。隘没の中やその周囲には 30cm以下の小礫が散在している	
H41号墳	標高 224 mの斜面に位置する古墳である。略測調査から、墳丘は直径 10m ×高さ 3.8m を測る円墳である。墳丘及び石室は南側を山道によって破壊されているが、全体的によく残存している。玄室を中心に 2 ～ 3 段が露出しており、横穴式石室であると判断できる。	74～77
H42号墳	標高 224 mの斜面に位置する古墳である。略測調査から、墳丘は直径 8.1m ×高さ 2.9m を測る円墳である。墳丘封土は石室石材の抜き取りにより流出しているものの、南東側は比較的良好に残存している。石室は天井石を全て欠くものの、側壁が一定の高さまで比較的良好に残存している。石材は横積みを基本とする。最大でも 1 mを超えるものは無く、総じて小ぶりである。石室内には、長さ 65cm ～ 8cm 大、幅 30cm大の石材が 2 石落ち込んでおり、側壁石材と思われる。開口方向に人頭大の礫が散在し、閉塞石の可能性がある。	

古墳番号	概要（現状・規模・埋葬施設）	写真図版
43号墳	標高 229 m の斜面に位置する。山道の造作によって墳丘と石室は大きく削平されており、墳丘はほとんど原形を留めていない。そのため墳形・規模ともに不明である。対して石室は上部を失っているが、奥壁と左側壁が一定の高さまで残存している。また、右側壁も基底部の一部が残存している可能性がある。側壁は横積みを基本とし３段まで確認でき、80cm以下の小ぶりの石材が用いられる。奥壁は木の根によって原位置を保っていないが、露出している石材は幅約 90cm を測る。	78、79
H44号墳	霊仙ヶ岳山頂より東に派生する尾根筋の西側斜面の標高 232 m から 236 m に位置する。また 44 号墳から 48 号墳までは、すべて同じような地形に立地する。盛土が流出していたため、墳丘の高まりが認められず、さらに墳丘裾及び墳丘背後のカットも不明瞭である。略即調査では墳丘高さが 2.7 m ほどの高さが記録されているが、直径については不明である。石室は奥壁と奥壁直上の天井石、奥壁寄りの側壁が一部残存している。残存している部分は、右側壁の開口方向寄りでは３段目まで残存し、左側壁の段数は確認できない。石室石材は、横積みを基本とする。また、現状で観察できる奥壁最下段の石材は、長さ 1.6 m を測り、最下段より上方は 1 m以下の小ぶりな石材が用いられる。また、袖部の有無や羨道などは、現状では埋没しているため確認できない。	80
H45号墳	霊仙ヶ岳山頂より東に派生する尾根筋の西側斜面、44 号墳よりはやや尾根筋に寄った標高 242 m から 246 m の地点に位置する。墳丘は一定程度の高まりが認められるが、墳丘裾及び墳丘背後のカットは不明瞭であるため、墳形・規模については明らかでない。石室は内部の観察から長さ３m以上×幅 1.14 m×高さ 1.52 m を測る。奥壁から開口している部分までは、３石の天井石が残存し、側壁も良好に残存している。開口している部分より外側は、埋没している部分も多いが１～２段の石積みが確認できる。用いられている石材は最大でも長さ１m程である。	81～83
H46号墳	霊仙ヶ岳山頂より東に派生する尾根筋の西側斜面、45 号墳と同様にやや尾根筋に寄った標高 250 m から 254 m の地点に位置する。石室石材の抜き取りにより、墳丘の残存状況は悪く、盛土が南の谷側に流出している。現地での観察では、明瞭な墳丘の高まりは確認できない、そのため墳形・規模は明らかでない。石室は奥壁と左側壁が１～２段露出しており、右側壁は一部露出している。	84、85
H47号墳	霊仙ヶ岳山頂より東に派生する尾根筋の西側斜面、標高 256 m から 260 m のやや急な斜面に位置する古墳である。略測データがなく詳細は不明である。石室は全長 6.2 m以上である。玄室規模は奥壁と袖部の立石によって判断することができ、玄室幅 1.60 m、長さ 2.06 m、高さ 1.19 m以上である。玄室中央の天井石が玄室内に落ち込んでいる。	86～89
H48号墳	霊仙ヶ岳山頂より東に派生する尾根筋の西側斜面、47 号墳が位置する地点の西側に隣接する。墳丘の封土は石室石材の抜き取りによりほとんど失われている。石室は開口部寄りの左側壁が１段、奥壁の２段が残存する。また、位置関係より 47 号墳が築造された後に 48 号墳が築造されたとは考えにくく、47 号墳に先行して 48 号墳が築造されたものと考えられる。	
H49号墳	霊仙ヶ岳山頂より東に派生する尾根筋の西側斜面、標高 270 m から 274 m の地点に位置する。本古墳群中では最高所に築造されている。本古墳は急斜面に築造されており、開口方向南側には渓道の石材がかろうじて原位置をとどめているものの、崩落寸前である。マウンドがわかるような高まりは明瞭ではなく、墳丘規模は判らない。最も南側の天井石が一段下がり、２石目との間に隙間が生じている。ここが開口部となり、石室内を観察することができる。この最も南側の石材は前壁の可能性も考えられるが、現状では判断できない。内部は長さ 6 m以上×幅 1.23 m×高さ 1.6 m以上の横穴式石室である。袖の有無は埋没しており不明である。	90～94
H50号墳	霊仙ヶ岳東山腹の標高 194 m から 198 m のやや緩やかな斜面に位置する。本古墳群南側の一群とは浅く幅の広い谷状の地形を隔てた、高さの低い尾根に 50 号墳から 59 号墳が位置する古墳である。天井石が石室内に落ち込んで埋没しており墳丘全体の残存度は高いが、略測データがなく詳細は不明である。また、奥壁と側壁上部が僅かに露出しており、その部分の計測値では奥壁付近で幅 1.2 m の石室長約 5.5 m程の南に開口する横穴式石室であると考えられる。袖部については詳細は不明である。	
51号墳	霊仙ヶ岳東山腹の標高 186 m から 188 m の谷部に位置する。60cm ～ 80cm 大の石材が露出し点在することから石室石材の可能性が考えられる。しかし、墳丘となるような高まりは認められず、谷部に落ち込んだ石材の集積である可能性も残されている。	
H52号墳	霊仙ヶ岳東山腹の標高 188 m から 190 m の斜面に位置する古墳である。墳丘は、略測調査から直径 10.8m×高さ 3.4m を測る円墳である。目立った陥没や石材の露出は全くなく、墳丘の残存度は比較的高い。	
H53号墳	霊仙ヶ岳東山腹の標高 184 m か 188 m の斜面に位置する古墳である。略測データがなく詳細は不明である。墳丘の残存度は高く顕著なマウンドが認められる。墳丘南東裾に陥没があり人頭大の礫が集積していることから、石室開口部の可能性がある。墳丘南側に南東から北西に向かって、拳大～人頭大の石材が散乱するほか、長さ 65cm×高 20cm以上、長さ 40cm×高 30cm以上の２石が並び、石室の側壁石材の可能性がある。	
H54号墳	霊仙ヶ岳東山腹の標高 184 m から 188 m の斜面に位置する古墳である。略測データがなく詳細は不明である。かろうじて墳丘と判断できる高まりが認められる。わずかに南に開く馬蹄形の落ち込みがあり、人頭大～40cm大の石材の集積が認められる。	

古墳番号	概要（現状・規模・埋葬施設）	写真図版
H55号墳	霊仙ヶ岳東山腹の標高184mから188mの斜面に位置する古墳である。略測データがなく詳細は不明である。墳丘と考えられる高まりがあり、墳丘上に長さ0.9×幅0.55mの石材が、長辺を東西方向に向けて露出しており、石室天井石の可能性がある。	
H56号墳	標高178mの斜面に位置する直径9.7m、高さ2.7mの円墳である。墳丘は墳頂部に陥没があり、南に開く馬蹄形を呈するが、残存状況は良く顕著なマウンドが認められる。玄室左側壁と考えられる長さ60cm×幅30cm以上の石材が露出している。他にも羨道右側壁と思われる長さ60cm×幅25cm以上の石材と羨道左側壁の石材2石が露出している。開口部付近に40cm大の石材が散在している。	
H57号墳	標高174mの斜面に位置する直径10.7m、高さ1.8mの円墳である。墳丘の残存状況は良く顕著なマウンドが認められる。最大1.5m×0.6mの大きさを測る大型の石材が5つ長軸そろえて南北方向に密に並んでおり、天井石の可能性が高い。石材の並びの南端には人頭大～70cm大の石材が散在しており、石室石材か閉塞石の可能性がある。	95～96
H58号墳	標高173mの斜面に位置する直径11.9m、高さ9.5mの円墳である。墳丘の残存状況は高く、顕著なマウンドが認められる。墳頂部には陥没があり、30cm～60cm大の石材が墳丘上に散在し、1.2m×0.5mの石材が墳丘の南裾に露出している。石室石材の可能性がある。	
H59号墳	標高172mの比較的緩やかな斜面に位置する直径9.9m、高さ1.6mの円墳である。墳丘の残りはよい。20cm大と1m大の石材が複数露出し、石室石材の可能性がある。	

（志田・真鍋）

第４節　Ｈ 12 号墳（第 29 ～ 30 図・写真番号 42 ～ 47）

第１項　位置と墳丘

H12 号墳は、密集地域の中央やや南側に位置する。周囲の古墳は石材を抜き取られたものが多く、墳丘の残存状態も悪いが、H12 号墳は石室、墳丘ともに比較的よく残存しているため、離れた地点からでもマウンドをはっきりと視認できる。

H12 号墳の墳丘は、破壊された古墳の多い法貴古墳群中では残存状態の良いい。残存している天井石の最も開口部側の天井石が完全に露出し、さらに、墳頂部の北側には径約 2 mを測る円形の落ち込みが存在する。

以上のことを踏まえた上で、墳丘の形や規模について考えてみたい。墳丘東西のコンターラインの流れを観察すると、東側ではコンターラインが標高 194 mから標高 195.25 mまで顕著に湾入し、墳丘背後に至る。同様に、西側でも 193.75 m付近からの湾入が認められ、やはり 195.25 mで墳丘背後に至る。以上のことから、H12 号墳の墳丘は径約 13 m、高さ約 3 mの円墳であると判断できる。

なお、H12 号墳の石室開口部付近から、須恵器の小片を採集している。

第２項　横穴式石室

埋葬施設は、主軸を N299W にとり南東方向に開口する両袖の横穴式石室である。石室の全長は、現状で 6.75 m、玄室は長さ 3.95 m、幅 1.75 m、高さ 1.1 m、羨道は現状で長さ 2.8 m、高さ 0.85 mを測る。12 号墳の石室は石材の欠落や、石材が原位置から移動していると思われる箇所が多く、残存状況は良好とは言い難い。しかも、奥壁と左側壁の間や、玄室と羨道の間で天井石に空間が生じており、そこから流入した土砂によって、本来の床面がかなり埋没している。

１）玄室

奥壁は、向かって右半及び下半分が流入土によって埋没しており、観察できる範囲は限られている。露出部分の観察によれば、1 石で 1 段をなすと思われる幅 1.1 m以上、高さ 0.85 m程度の石材の上に、幅 0.65 m以上、高さ 0.25 mのやや小ぶりの石材を積み上げていることが分かる。右半分の上部においても、本来これと同様な石材があったものと思われるが、この石材が欠落したことで、石室内に土砂が流入したのであろう。また、完全に埋没している奥壁下半についても、直上に 1 石で 1 段をなす大型の石材を載せていることからして、これと前後する大きさの石材が使用されている可能性が高い。

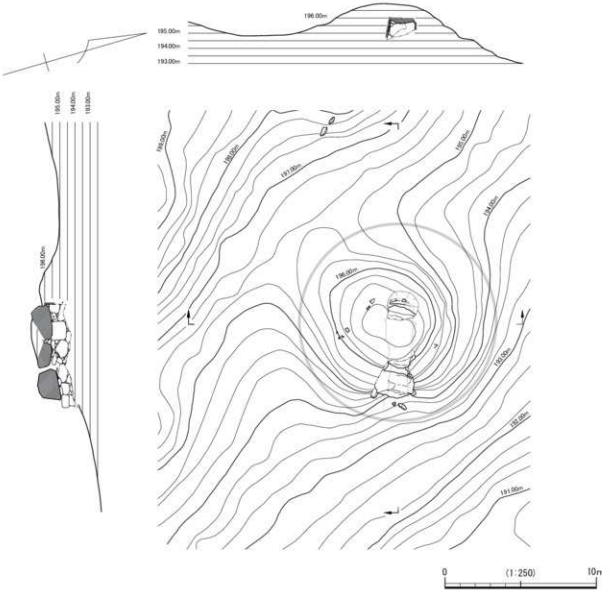
側壁は、左右とも 5、6 石の大型の石材を使用し、その隙間を小ぶりの石材で充填しているようである。したがって、目地が通るような箇所は認められず、乱雑に積み上げた印象を受ける。大型の石材は高さ 0.8 m、幅 1.2 m程度、小ぶりの石材は 0.2 ～ 0.5 m程度のものを使用している。天井石は 2 石を架構している。ただし、2 石の間隔はやや離れており、石室天井の中間に隙間が生じている。また、天井は平坦ではなく、奥壁側と前壁側の天井石下面レベルが比較的高く、中央が最も低い。したがって、原位置より移動していると思われる。具体的には、2 石の天井石が、玄室中央に向け、そ

れぞれ落ち込んでいる可能性が高い。前壁は1石で構成されているが、原位置を保っておらず、玄室天井石と前壁の間に空間が生じていること、前壁をなす羨道天井石のレベルが開口方向に向けて低くなることから、開口方向に移動しているものと思われる。

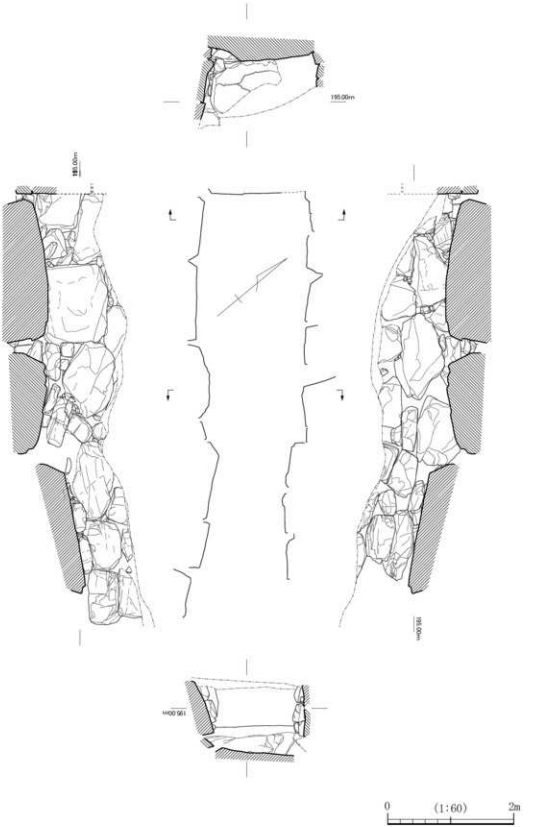
『京都府遺跡地図』で無袖と報告されているようにH12号墳の袖は明瞭ではなく、実際、奥壁方向からの観察でも、側壁から突出している部分は僅かである。しかし、この側壁の突出は多少の移動はあるものの原位置に近い前壁直下に位置していることから、左右側壁の突出と前壁は本来一体のものであったと考えられ、H12号墳の石室は両袖と判断した。

2）羨道

羨道部の天井石は、前壁をなす天井石の1石のみである。この天井石が原位置を留めていないことは前述したとおりである。したがって、これを支える羨道の側壁も移動している可能性がある。羨



第29図　H12号墳　墳丘測量図（S=1/250）



第30図　H12号墳　石室実測図（S=1/60）

道側壁は、長さ 0.8 m、幅 0.4 m程度の石材を横積みしている。石材は玄室で使用されているものより小ぶりである。そのためか、石材間にさらに小ぶりな石材を充填している様子は窺えず、玄室とは様相を異にしている。なお、右側壁で 3 段以上が露出していることから、羨道側壁は少なくともそれ以上で構成されていたものと思われる。

なお、本石室は後述する H18 号墳・H24 号墳の石室と玄室規模が近く両石室に比べ羨道長が著しく短いため、両側壁ともさらに長かった可能性がる。

（志田・真鍋）

第５節　Ｈ 18 号墳（第 31 ～ 32 図・写真番号 48 ～ 52）

第１項　位置と墳丘

H18 号墳は、密集地域の北側に立地している。周囲には H14 号墳･H15 号墳･H24 号墳･H25 号墳･H27 号墳が、直線距離にして 6 m前後の位置に立地している。ただし、H 18 号墳の墳丘背後は急斜面となっており、後述する 24 号墳との間には著しい比高差がある（写真番号 60）。したがって、H 18 号墳と H24 号墳は、実際には直線距離以上に離れている。また、H18 号墳の石室開口方向には、H19（B1）号墳箱式石棺出土地点を伝える石碑が建てられている（写真番号 56）。

H18 号墳は、墳頂部に天井石と思われる石材がわずかに露出している以外は、良好に残存している。また、その墳形や規模については、墳丘東西のコンターラインの流れから判断した。東側ではコンターラインが標高 201 m付近から 202.75 mまで顕著に湾入し、墳丘背後に至る。同様に、西側でも 201 m付近からの湾入が認められ、やはり 202.75 mで墳丘背後に至る。以上のことから、H18 号墳の墳丘は径約 14 m、高さ約 3 mの円墳であると判断した。

なお、H18 号墳の周囲からは石室前庭部を中心に、数点の須恵器片を採集している。

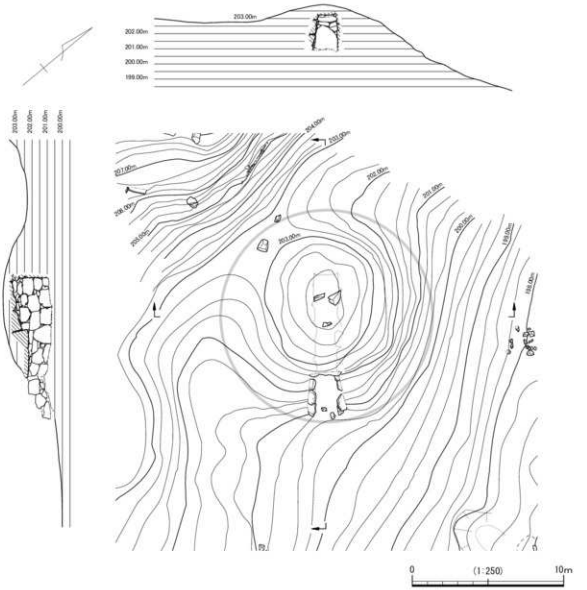
第２項　横穴式石室

埋葬施設は、主軸を N315W にとりおおよそ南東方向に開口する左片袖の横穴式石室である。石室の全長は 9.2m、玄室は長さ 3.25m、幅 1.6m、高さ 1.91m（玄門側）、2.33 m（奥壁側）、羨道は長さ 5.95 m、高さ 1.5 mを測る。H18 号墳の石室は、H24 号墳と並び古墳群中で最も残存状態が良いものである。た H18 号墳の現状の床面は側壁の基底石がほぼ露出していることから、本来の床面に近い状態にあると判断できる。

１）玄室

奥壁は、向かって 1 段目の石材が全体の大部分の面積を占めている。この石材は幅 1.5 m、高さ 1.73 mを測り、1 石で 1 段となる。なお、この 1 段目の石材の上辺は水平ではないため、左側壁側に 0.5 m大の石材を落とし込むことで、上辺を水平に揃えている。この上に、長さ 0.6 ～ 0.75 m、幅 0.35 m程の石材を 2 石横積みし、2 段目を構成する。3 段目は、長さ 1.2 m、幅 0.3 m程の石材 1 石からなり、奥壁は以上の 3 段で構成される。

玄室側壁は 3 段を基本とし、各段は基本的に 3 石からなる。長さ 1 ～ 1.25 m、幅 0.5 ～ 1 m程度

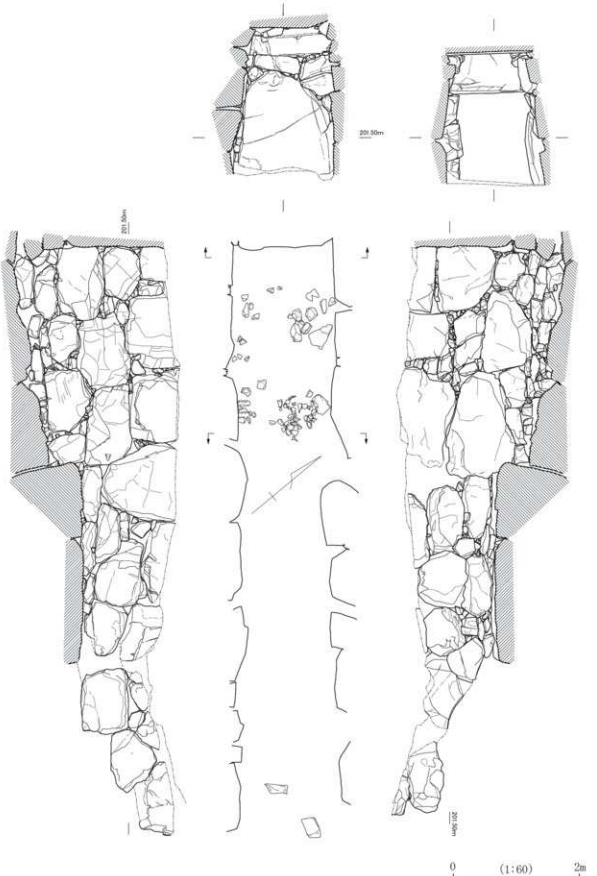


第 31 図　H18 号墳　墳丘測量図（S=1/250）

の大型の石材を横積みにする。また、側壁と天井石との間には、長さ 0.5 ～ 0.65 m、幅 0.2 ～ 0.3 m程度の小型の石材が充填され、奥壁に近づくほど石材の大きさと段数を増しており、前壁側と奥壁側の天井高を比較すると、奥壁側の方が 0.4 m程高くなっている。全体的に、右側壁の方が整然と積まれており、縦横方向の目地が通るのに対し、左側壁は大型の石材を乱雑に積み上げ、隙間を小石で充填しているようである。したがって、右側壁と比較すると側壁の目地が明瞭ではない。なお、奥壁では天井石との隙間に、左右側壁で見られるような小型の石材の積み上げは認められない。

前壁は 1 石から成り天井石の前壁をなす面は、やや斜めである。また、前壁に接する玄室天井石の高さが低くなっており、前壁の高さは 0.35 m程である。

袖部は、左片袖である。左袖には長さ 1 ～ 1.2 m、幅 0.5 m程度の石材を 3 段積みにする。また、



第32図　H18号墳　石室実測図（S=1/60）

右側壁の玄門部には、羨道側に突出する袖こそないが、左袖と対応する位置に、立石により玄室と羨道を明確に区分している。この石材は、長さ、幅ともに約 1.2 mを測り、形状は方形に近い。立石の上に長さ 0.95 m、幅 0.3 m程の石材を横積みし、天井石を受けている。このように、本石室は左袖のみ羨道側に突出するが、左袖に対応する右側壁には、立石によって玄室と羨道を区分している点が特徴的である。

2）羨道

羨道石材は、袖部で見られたほど明確な構造の違いは認められない。両側壁ともに 1 m未満の大きさの塊石を積む。使用される石材が玄室と比べて小ぶりなためか、やや乱雑な印象を受ける。天井石は玄門部の石材も含め、2 石で架構される。

（志田・真鍋）

第６節　Ｈ 21 号墳（第 33 ～ 34 図・写真番号 58 ～ 59）

第１項　位置と墳丘

H21 号墳は密集地域の西側に位置し、周囲には H17 号墳・H 22 号墳が直線距離にして 15 m前後の位置に立地する。また、墳丘背後には今回の調査で新たに発見された、小石室を有するH 20 号墳や改葬墓の H19（B1）号墳が立地する。

墳丘は羨道が一部崩壊していることから、前庭部付近のコンターラインが乱れている以外は、良好に残存しているものと判断できる。

その墳形や規模は、前庭部付近以外のコンターラインから判断した。すなわち、東側では標高 201.75 mを境にしてコンターラインが広がることから、墳丘東側の墳丘裾ととらえ、同様に北側では標高 201 mを墳丘裾の基準とみなすことができる。コンターラインは概ね円弧を描いている。

以上のことから直径約 10 m、高さ 2 mの円墳と判断した。

第２項　横穴式石室

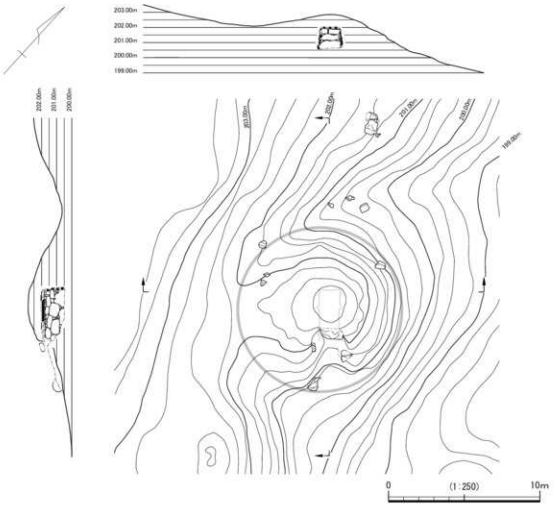
H21 号墳の埋葬施設は、主軸を N317W にむけおおよそ南東方向に開口する無袖の横穴式石室である。用石から玄室と羨道の区別は読みとれない。石室の全長は現状で 6.75 m、幅 1.4 m、高さは奥壁付近で 1.4 mを測る。本石室は奥壁から 3.5 mの地点で土砂が流入しており、床面がかなり埋没している。また、奥壁側では天井石が残存するが、羨道側では天井及び側壁の大部分が転落している。

奥壁は現状から判断する限り、3 段積みを志向する。1 段目から 2 段目は 1 石の横積みの石材を、3 段目は 2 石からなりやや小ぶりの石材をやはり横積みにしている。特に 1 段目は大型の石材が用いられる。左右側壁は奥壁と同様に判断すれば 3 段積みを指向している。左側壁の最下段は、長さ 1 ～ 1.5 m以上の石材が横積みにしている。露出部分から判断すると、かなり大型の石材であると思われる。2 段目は、長さ 1 m、幅 0.5 m程の石材から構成される。3 段目では 2 段目とほぼ同大の石材も使用されるが、さらに小ぶりの石材が目立つようになる。そして、天井石との隙間には小礫が充填される。各段には比較的大きさの揃った石材が使用されており、横方向の目地が明瞭に認められる。

右側壁では、1段目・2段目に長さ1m、幅0.7m程の大型の石材が用い、側壁の大部分の面積を占める。3段目には、やや小ぶりの石材が比較的水平に使用し、天井石との隙間には小礫が充填される。

土砂の流入により羨道側の構造はほとんど窺えないが、奥壁から6m付近に位置する石材は平坦面を右側壁に揃えており、原位置を保っている可能性がある。

（真鍋・志田）



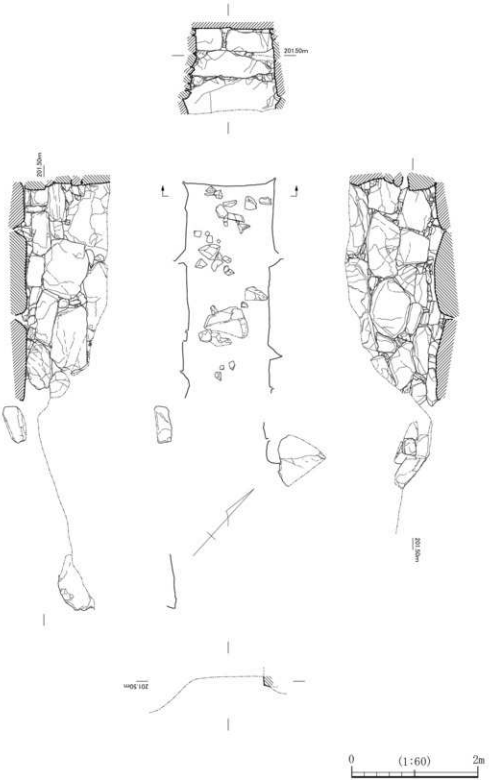
第33図　H21号墳　墳丘測量図（S=1/250）

第7節　H24号墳（第35図～37図、写真番号61～67）

第1項　位置と墳丘

H24号墳は、密集地域の北端に位置し、周囲にはH18号墳・H25号墳・H26号墳が、直線距離にして6m前後の位置に立地する。しかし、H24号墳は周囲の古墳に比べ著しく標高の高い位置に立地しており、実際には直線距離以上に離れている。

H24号墳の立地する地点は東側が急斜面となっているため、墳丘も東側がやや抉られ、コンター

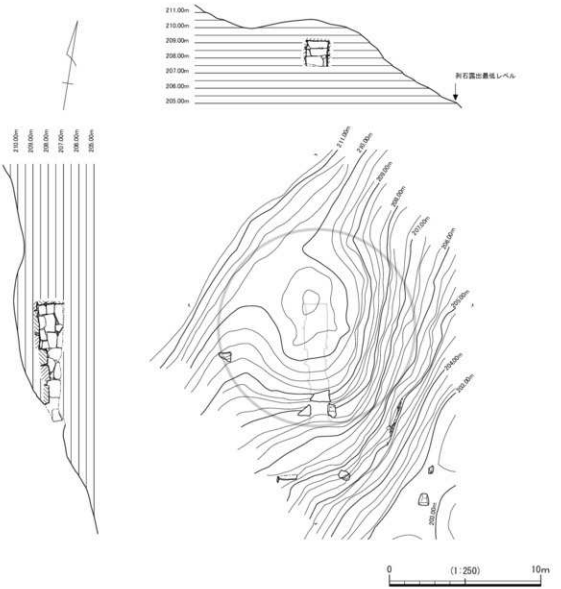


第34図　H21号墳　石室実測図（S=1/60）

ラインが直線を呈するが、東側以外の箇所ではコンターラインの流れが顕著に観察できることから、墳形や規模を判断した。北側では標高 209 m付近から 210 m付近まで、コンターラインが顕著に湾入する。また、西側でも同様にコンターラインが湾入する。このことから、径約 12.5 m、高さ約 3 mの円墳であると判断した。

H 24 号墳と H18 号墳の間の急斜面の標高 205 m付近に、長さ約 3 mにわたり石列が露出する。この石列は約 0.15 ～ 0.35 mの大きさの石材を、2 ～ 3 段にほぼ垂直に積まれているため、人為的な石列と判断できる（第 35 図）。この列石の長軸方向は斜面に対して平行しているが、H24 号墳の石室主軸の方向とは揃わない。さらに、復元される H24 号墳の墳丘下端からさらに下方に位置しており、石列の性格は詳細不明である。

なお、H24 号墳の墳丘からは 1 点の須恵器片を採集している。



第 35 図　H24 号墳　墳丘測量図（S=1/250）

第２項　横穴式石室

埋葬施設は、主軸をN315Wにとりおおよそ南南東方向に開口する両袖の横穴式石室である。石室の全長は7.8m、玄室は長さ3.02m、幅1.55m、高さは現状で最大1.79m、羨道は長さ4.78 m、高さは現状で最大1.05 mを測る。24号墳の石室は、土砂の流入により本来の床面が埋没している以外は、石室は完存している。

１）玄室

奥壁は３段で構成され、各段は長さ1.2～1.4 m、幅0.5～0.7 m程度の石材を横積みにし、その大型の１石が各段の大半の面積を占める。また、各段は大型石材と、やや小型の石材により段を構成している。

玄室側壁は３段を基本とし、各段は３～４石からなる。長さ約1.2 m、幅0.7～0.95 mの大型石材と、長さ0.5～0.9 m、幅約0.45 mの小型石材を使用している。また、大型石材は１、２段目に、小型の石材は３段目を中心に使用されている。右側壁は、各段に比較的大きさの揃った石材を使用し目地が通る。それに対して左側壁は石材を乱雑に積み上げ、その隙間を小石で充填しているため、目地が不明瞭である。

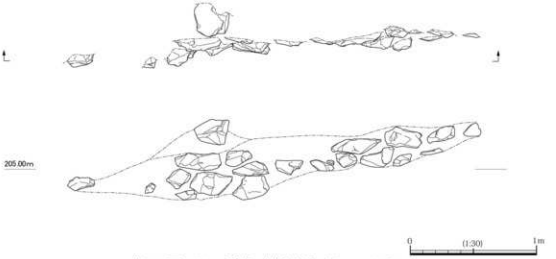
前壁は１石から成り、やや玄室側に傾いている。高さは約0.5 mである。

袖部は両袖であり、袖部は長さ0.9 m以上、幅約0.85 mの石材を立石として使用し、立石が天井石を直接受ける構造である。

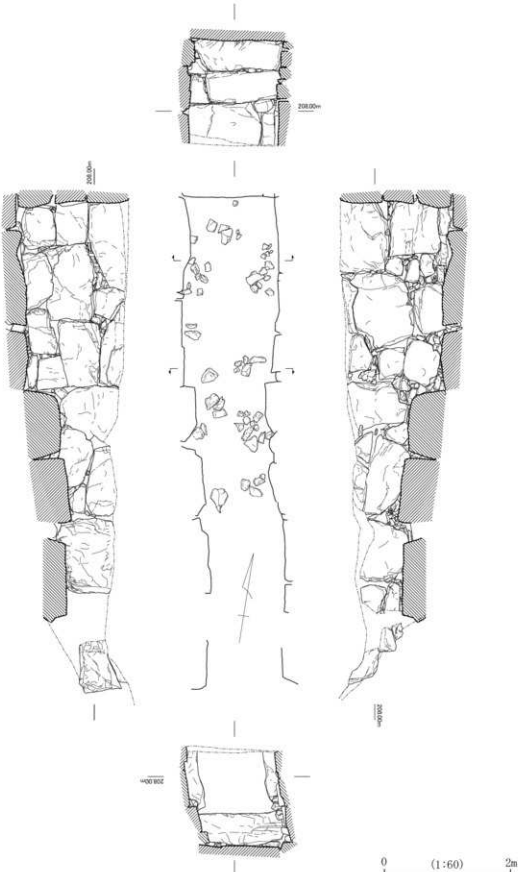
２）羨道

袖部より羨門側の側壁は、基本的に２段であり、長さ約1.1 m、幅0.6～0.9 mの石材を横積みにし、隙間を小石で充填する。最も羨門側の石材から１m付近で側壁石材が欠落している、以外は原形を保っている。また、最も羨門側の側壁石材は、上端のレベルが羨道天井のそれに達しない。さらに１段を足して、天井石を架構したことも考えられなくはないが、H24号墳の墳丘やH18号墳の事例から判断する限り、羨道天井石は現状の３石のみであったとするのが妥当であろう。

（志田）



第36図　H24号墳　墳丘列石（S＝1/30）



第37図　H24号墳　石室実測図（S=1/60）

第８節　採集遺物（第 38 ～ 39 図、写真番号 98・99）

法貴古墳群からも、法貴峠古墳群と同様に多数の土器片を採集している。大半が須恵器であり、土師質のものは 24 の小皿のみである。ただし、この土師質小皿は奈良時代以降のもので、古墳群に伴うものではない。採集した土器片は大半が小片であったが、ある程度の大きさがあり器種を特定できるものについては、実測し図面を掲載することにした。以下、観察した特徴を個別に詳述する。また、須恵器は田辺編年、西編年に従っている。

24 ～ 27 を除くほかは、すべて甕の破片である。採集地点が比較的近い破片中でも、焼成の度合いや色調にかなりの幅があり、複数個体を含んでいるものと思われる。8 ～ 15 は 3 号墳近辺から採集している。12 と 13 は、どちらも胎土に黒色酸化粒を含んでおり、内外面の調整も比較的似ている。また、12 の外面には一面に黒褐色の自然釉が付着し光沢があるのに対し、13 の外面でも部分的にそれが認められ、同一個体である可能性が高い。さらに、破片 9、11 についても、同様のことが指摘できる。どちらの資料も淡灰色を呈し、調整も内面の当て具痕が浅く、単位が不明瞭である点で共通している。

7 ～ 16、18 ～ 23、28 ～ 30 の甕の小片は、その調整がいずれも外面にタタキ及びカキメ、内面に当て具の圧痕を基本とすることから、体部の破片だと判断できる。ただし、破片 10 や 12、30 のように、カキメの円弧や微妙な屈曲、自然釉の付着状態から、体部中でも頸部付近等、具体的な部位を特定できる資料があることを付言しておきたい。

17 は、甕の体部から頸部までの破片である。焼成不良であったのか、全体の色調が白色を呈する。

24 は、土師質の小皿である。内外面ともに指頭ナデにより成形されている。ただし、口縁部付近はやや強めに摘み上げられているため、体部との境界には弱い稜が認められる。法貴古墳群から採集した土器片の中で、須恵器以外のものは本資料が唯一である。また、本資料は奈良時代以降に見られる土師質の小皿である可能性が高いことから、古墳に伴うものではないと思われる。

25 は、ハソウの口縁部である。内外面ともにロクロナデで仕上げられており、器厚が薄く、端部を丸く収めている。また、端部はわずかに外反する。

26 は、短頸壺の口縁部である。内外面ともにロクロナデが施されるが、頸部外面は特に強くナデられており、明瞭な稜線が認められる。器厚は比較的厚く、端部も丸く収めている。なお、端部には幅 0.6cmの焼成前の圧痕が残る。

27 は、蓋坏の坏身である。底部を欠くものの、体部から立ち上がりまでが残存している。残存する部分の外面は全てロクロナデにより仕上げられるが、欠損する底部には本来回転ヘラケズリが施されていたであろう。内面にはロクロナデが施される。立ち上がりについては、外面の受け部との境界は滑らかであるが、内面では体部との境界が鋭く入り込むため、外面からナデ付けられたようである。なお、立ち上がり端部には粘土の付着が認められ、焼成時に重ね焼きをした際のものと思われる。

28 は、甕の体部から口縁部である。口縁部は体部から直立し、わずかに外反しながら立ち上がる。

端部を摘み上げることで、外面に明瞭な稜線が生じるとともに、端部自体も尖り気味な形態となっている。体部の調整は、外面にタタキを施した後、カキメによって仕上げられている。内面には当て具の圧痕が残る。頸部から口縁部にかけては、内外面ともにロクロナデ調整である。ただし、内面の体部と頸部の境界付近では、当て具痕の上からロクロナデが施されており、後者が前者をナデ消しているようである。

29は、壷の口縁部である。内外面ともにロクロナデが施されている。さらに、外面は横方向の強い指頭ナデによる区画がなされており、その上側にヘラ状工具による縦方向の施紋がなされる。このヘラ描き紋は、非常に密な間隔で施されている。また、その切り合い等から、施紋の方向は右より左へ向けてなされていることが分かる。さらに、ヘラ描き紋の個々の単位は、左上方から右下方へ向けて、やや斜め気味に施される。本資料は小片のため、器種や部位を特定することは難しい。だが、その形状がやや外反することや、内外面のロクロナデ調整、外面のヘラ描き紋からして、壷の頸部とするのが妥当である。

また、外面は特に強い2段のロクロナデによる凹線により、3段に区画されている。なお、下段の凹線は2本で1単位となり、上段のそれは1本で1単位となる。そして、下段と上段の凹線間の区画と、上段上側の区画に、それぞれヘラ描きの斜紋を施している。斜紋は右上方から左下方に向けて、ほぼ等間隔に施紋される。なお、外面には部分的に暗褐色の自然釉がかかっており、光沢がある。加えて、内外面ともに黒褐色の自然釉が斑点状に付着している。

30は、甕の頸部である。くの字に外反し、頸部にはやや強いヨコナデが施される。外面には、縦方向のヘラ描きが施されている。

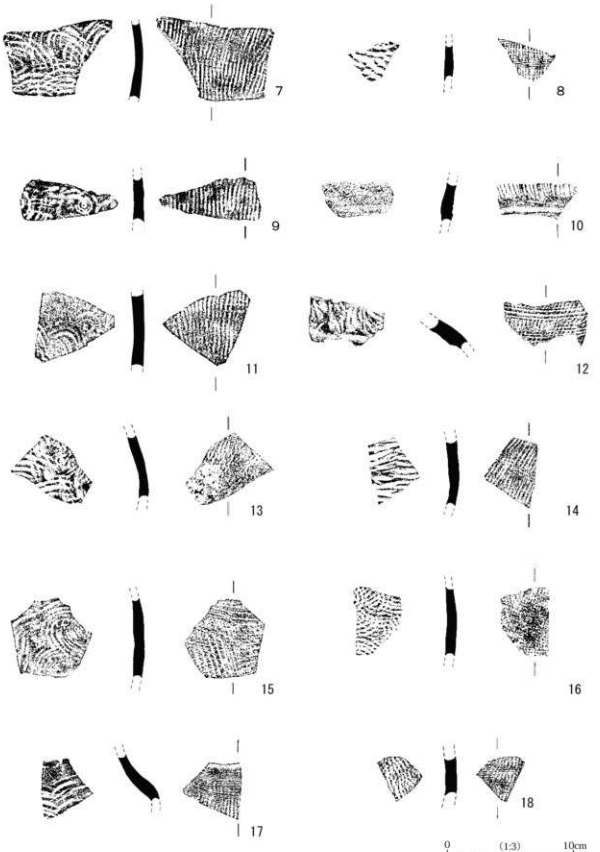
※採集古墳及び位置は、第23図及び第8表の古墳と対応する。

※観察表、図、写真掲載していない極小片の採集があり、以下の通りである。

H7号墳：坏蓋？（口縁部）、H12号墳：甕（体部）、H16号墳：甕（体部）

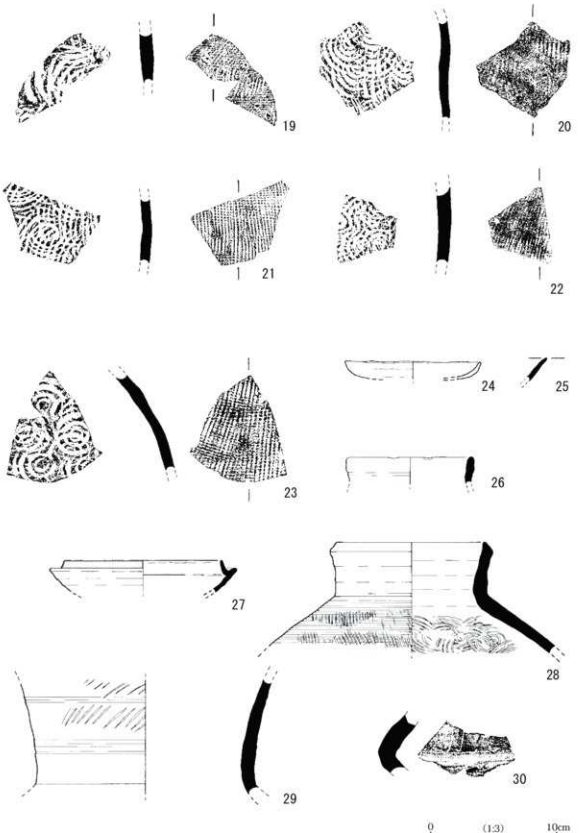
H18号墳：甕（体部）、坏蓋？

（志田）



（7:2 号墳、8 ～ 15：3 号墳、16・17：11 号墳、18：16 号墳）

第 38 図　法貴古墳群　採集遺物①（S=1/3）



(19・20：18号墳、21:23号墳、22:24号墳、23:42号墳、24:43号墳、
25:9号墳、26-27:7号墳、28：21号墳、29: 登山道、30：4号墳or5号墳)

第39図　法貴古墳群　採集遺物②（S=1/3）

第 10 表　法貴古墳群　採集遺物観察表

番号	採集古墳	種類	器種	部位	法量	調整 上：外面 下：内面	色調 上：外面 下：内面	焼成	胎土		口縁部残存率（%）	備考
7	H 2号墳	須恵器	甕	体部	6	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕のち弱いヨコナデ		ふつう	直径3mm以下の砂粒をわずかに含む。	ふつう	—	
8	H 3号墳	須恵器	甕	体部	2.8	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕	N6/6 灰 N6/6 灰	硬	直径3mm以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
9	H 3号墳	須恵器	甕	体部	3.5	・タタキ ・同心円の当具痕一部にハケメ	5YR5/1 灰 5YR6/1 灰	ふつう	直径2mm以下の砂粒を含む。	ふつう	—	外面は釉がかかり光沢がある。
10	H 3号墳	須恵器	甕	頸部	3.1	・ヨコナデのち縦方向のヘラ描文 ・ヨコナデ	N6/6 灰 N6/6 灰	硬	直径2mm以下の砂粒を多く含む。	やや粗	—	
11	H 3号墳	須恵器	甕	体部	5.7	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕のち一部不定方向ナデ		硬	直径2 mm以下の砂粒を含む。	ふつう	—	外面は釉がかかり光沢がある。番号9と同一個体か。
12	H 3号墳	須恵器	甕	体部	2.3	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕のち一部横方向ナデ	5YR2/1 黒 5YR6/1 灰	硬	直径1mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	—	外面全体に黒色釉が付着し光沢がある。内面に斑点状の黒色自然釉付着。
13	H 3号墳	須恵器	甕	体部	5.1	・タタキ ・同心円の当具痕	2.5YR5/1 黄灰 2.5YR6/1 黄灰	硬	直径0.5mm以下の砂粒を含む。	ふつう	—	外面の一部に黒色自然釉・灰の被付着。内面に斑状の黒色自然釉付着。番号12と同一個体か。
14	H 3号墳	須恵器	甕	体部	6.2	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕	7.5YR6/1 灰 N6/6 灰	硬	直径0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	—	
15	H 3号墳	須恵器	甕	体部	5.2	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕	N6/6 灰 N6/6 灰	硬	直径2mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	—	番号13と同一個体か。
16	H11号墳	須恵器	甕	体部	5.7	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕	2.5YR6/1 黄灰 2.5YR6/1 黄灰	硬	直径1mm以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
17	H11号墳	須恵器	甕	頸部	3.6	・タタキのちカキメ（頸部にヨコナデ） ・同心円の当具痕のちヨコナデ	5YR7/1 灰白 5YR7/1 灰白	硬	直径1mm以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
18	H16号墳	須恵器	甕	体部	3	・タタキのちヨコナデ ・同心円の当具痕		硬	直径1mm以下の砂粒を多く含む。	ふつう	—	
19	H18号墳	須恵器	甕	体部	7.5	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕	2.5YR4/1 黄灰 2.5YR5/1 黄灰	硬	直径2mm以下の砂粒を多く含む。	やや粗	—	
20	H18号墳	須恵器	甕	底部	7.7	・タタキのちヨコナデ ・同心円の当具痕	5YR5/1 灰色 5YR5/1 灰色	硬	直径3mm以下の砂粒を多く含む。	やや粗	—	外面の一部に暗灰色の自然釉が付着し光沢がある。番号19と同一個体か。
21	H23号墳	須恵器	甕	体部	5.2	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕のちヨコナデ	5YR5/5 灰 5YR5/5 灰	硬	直径1mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	—	
22	H24号墳	須恵器	甕	体部	6	・タタキのちヨコナデ ・同心円の当具痕のち一部ヨコナデ	N4/4 灰 N5/5 灰	硬	直径4mm以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
23	H42号墳	須恵器	甕	体部	7.5	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕のちヨコナデ	N6/6 灰 N6/6 灰	硬	直径1mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	—	
24	H43号墳	土師器	皿	口縁部	1.4 10.8	・ヨコナデ ・ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	硬	直径2mm以下の砂粒をわずかに含む。	精良	20	

第 10 表　法貴古墳群　採集遺物観察表

番号	採集古墳	種類	器種	部位	法量	調整 上：外面 下：内面	色調	焼成	胎土	口縁部残存率（%）	備考
25	H 9 号墳	須恵器		口縁部	1.8	・ヨコナデ ・ヨコナデ	N5/5 灰 N5/5 灰	硬	直径 1.2mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—
26	H 7 号墳	須恵器	壺	口縁部	1.9	・ヨコナデ ・ヨコナデ	7.5YR5/1 灰 7.5YR5/1 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒をわずかに含む。	粗良	20	口縁端部に断面U字形の圧痕あり。
27	H 7 号墳	須恵器	坏身	受部	2.4	・ヨコナデ ・ヨコナデ	N6/6 灰 N6/6 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	25	口縁部内面に重ね焼き時の粘土付着。
28	H21 号墳	須恵器	壺	口縁部	8.8 11.4	・タタキのちカキメ ・同心円の当具痕	N5/5 灰 N5/5 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ゆや粗	40	内面の同心円の当具痕には放射状に一条の突線が走り、当て具に亀裂があったことがわかる。
29	法貴 登山道	須恵器	壺	頸部	9.1	・ヨコナデ ・ヨコナデ	7.5YR6/1 灰 7.5YR6/1 灰	硬	直径 3mm 以下の砂粒をわずかに含む。	粗良	—	外面の一部に暗灰色自然釉と黒色の斑状自然釉が付着し光沢がある。内面にも黒色の斑状自然釉が付着する。
30	不明	須恵器	甕	頸部	5	・ヨコナデの ち縦方向の沈線 ・ヨコナデ	N5/5 灰 N5/5 灰	硬	直径 2mm 以下の砂粒を含み、5mm 大の砂粒をわずかに含む。	ふつう	—
31	—	須恵器	甕	体部	4.5	・タタキ ・当て具痕の後、ヨコナデ	7.5Y3/1 オリーブ黒 2.5Y6/2 灰黄	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	8 号墳と 9 号墳の中間地点
32	—	須恵器	甕	体部	2.5 4.5	・タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	5YR2/1 黒 N5/5 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ゆや粗	—	6 号墳と 7 号墳の中間地点
33	—	須恵器	甕	体部	3.5	・タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	7.5YR5/1 灰 7.5YR5/1 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	4 号墳と 5 号墳の中間地点
34	H 7 号墳	須恵器	坏？	坏身	1.8 3	・ヨコナデ ・ヨコナデ	N6/6 灰 N6/6 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
35	H 3 号墳	須恵器	甕	体部		・タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	2.5Y5/1 黄灰 2.5Y5/1 黄灰色	硬	直径 1.5mm 以下の砂粒を含み、直径 3mm の砂粒を微かに含む。	ふつう	—	
36	H18 号墳	須恵器	坏？	坏部	1.1	・ヨコナデ ・ヨコナデ	5Y5/1 灰 5Y5/1 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
37	H18 号墳	須恵器	甕	体部	2.3	・タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	2.5Y5/1 黄灰 2.5Y5/1 黄灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
38	—	須恵器	甕	体部	2 4	・タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	5Y5/1 灰 5Y5/1 灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	8 号墳と 9 号墳の中間地点
39	H3 号墳	須恵器	甕	体部	4	・偽格子目タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	2.5Y6/1 黄灰 2.5Y6/1 黄灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	
40	H12 号墳	須恵器	甕	体部	3.2	・タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	5YR2/1 黒 5Y5/1 灰	硬	直径 0.5mm 以下の砂粒を含む。	ゆや粗	—	
41	H18 号墳	須恵器	甕	体部	2.5	・タタキのちカキメ ・同心円の当て具痕	2.5Y6/2 灰黄 2.5Y6/1 黄灰	硬	直径 1mm 以下の砂粒を含む。	ふつう	—	

第９節　小結

前節までは石室実測を行った H12 号墳・H18 号墳・H21 号墳・H24 号墳 号墳を中心に、法貴古墳群の測量調査の成果を報告した。本節ではそれらを踏まえて、各古墳の時期や法貴古墳群全体での石室の変遷などについて、若干の考察を試みる。

第１項　H18 号墳と H24 号墳（第 40 図）

まず、法貴古墳群の中で最も残存状態が良い H18 号墳・H24 号墳について、築造時期を考えたい。H18 号墳・H24 号墳の両横穴式石室は大型の石材を使用し、玄室の平面プランが長方形となるなど、いわゆる畿内型横穴式石室に近い特徴を有している。ただし、両石室は細部において構造の差異も指摘できる。

以下、この両石室を比較し、H18 号墳と H24 号墳の築造の前後関係を明らかにしたい。

１）奥壁

H18 号墳の側壁は、玄室では３段積みを基本とし、天井石との間には小型の石材を横積みにして高さを調節する。羨道は２～３段積みを基本とする。一方で H24 号墳は、玄室では H18 号墳と同じく３段積みを基本とするが、天井石との間に小型の石材の横積みは見られない。また、羨道は２段を基本とする。

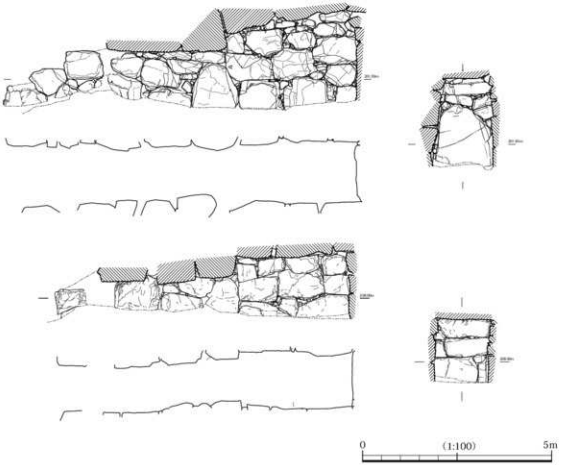
２）側壁

H18 号墳の側壁は、玄室では３段積みを基本とし、天井石との間には小型の石材を横積みにして高さを調節する。羨道は、２～３段積みを基本とする。全体的に石材の加工が粗いため、側壁からは凸凹した印象を受ける。一方で H24 号墳は、玄室では H18 号墳と同じく３段積みを基本とするが、天井石との間に小型の石材の横積みは見られない。また、羨道は２段を基本とする。24 号墳の側壁からは、H18 号墳のそれに比べて平滑な印象を受ける。

３）袖部

H18 号墳は左片袖で、ほぼ同大の石材を長軸を石室主軸と平行にして３段横積みにしている。ただし、右側壁でも突出こそしないが、立石によって玄室と羨道が区分されており、左袖に対応する構造であると判断できる。また、この立石の上には小型の石材が横積みにされており、この石材が天井石を受ける。これに対して H24 号墳は両袖で、左右の袖部に立石を有する。そして、この立石が天井石を直接受ける構造である。

以上、その構造の特徴から畿内型石室に影響を受けたと考えられ、畿内系と評価できる H18 号墳と H24 号墳の石室を比較することで、細部の構造に見られる差異を抽出した。なお、H18 号墳と H24 号墳の築造の前後関係を明らかにするのにあたっては、袖部の構造が特に重要である。まず、H18 号墳の右側壁に見られるような、立石の上に横積みにした小型の石材が天井石を受ける構造は、太田宏明氏による畿内型石室の分類では５ないし６群に該当する（太田 1999）。これに対して、24 号墳の袖部に見られる立石が直接天井石を受ける構造は太田分類の７群以降に見られる特徴である。



第 40 図　H18 号墳、H24 号墳　比較図（S ＝ 1/100）

したがって、石室構造からは H24 号墳が H18 号墳より後出するものと判断した。側壁と天井石との間に横積みされた小型の石材の有無や、羨道側壁の段数などの差異もこれを裏付ける。さらに、太田分類の８群になると、袖部の立石が直接天井石を受ける構造が羨道側壁にまで達成される。そのため、羨道側壁が２段を基本とする H24 号墳は８群まで下ることはない。よって、H24 号墳の横穴式石室は太田分類の７群、TK209 型式期～飛鳥Ⅰ期に築造されたものと思われる。また、H18 号墳の横穴式石室は左袖が３段積みで、太田分類の４群の特徴を残している点や、６群の特徴である玄室・羨道の基底石の大型化が認められない点から、５群、すなわちＭＴ 85 ～ TK43 型式期に位置付けるのが妥当であろう。ただし、法貴古墳群が所在する亀岡盆地は旧丹波国であり、畿内の外縁地域であるから、石室の情報が畿内より遅れて伝播している可能性がある。したがって、太田分類に当てはめた H18 号墳・H24 号墳の石室も、その実年代は太田分類で想定されたものよりやや下るのかもしれない。

また、ここで H18 号墳・H24 号墳の間の急斜面に露出する列石についても触れておきたい。H24 号墳の下方、H18 号墳の背後に当たる標高 205 m付近に、約 0.15 ～ 0.35 m の大きさの石材が、２～３段ほぼ垂直に積まれており、長さ約３ｍに渡り露出していることは前述した。列石の長軸方向は斜面に対して平行しているものの、H24 号墳の石室主軸の方向とは揃わず、しかも復元される H24

号墳の墳丘下端のさらに下方に位置しているため、H18 号墳と H24 号両墳の関係の中でこの列石を理解する必要があろう。そこで、H18 号墳の後に H24 号墳が築造されたと考えた場合、H24 号墳は H18 号墳を築造した際に背後の地形をカットした急斜面の直上に築かれたことになる。したがって、H24 号墳を築造した際、この不安定な急斜面を補強する目的でこのような列石を構築したのではないだろうか。

第２項　法貴古墳群における横穴式石室の変遷

前項では H18 号墳と 24 号墳の築造の前後関係を明らかにしたが、本項では法貴古墳群全体での横穴式石室の変遷について考察したい。法貴古墳群には石室実測を行った残存状態が良好な H12 号墳・H18 号墳・H21 号墳・H24 号墳号墳以外にも、土砂の流入により開口部が狭いため実測を断念した石室や、奥壁付近のみが残存している石室が複数存在する。これらを含めた法貴古墳群で確認できる横穴式石室を、主に奥壁と袖部の構造から以下の３種に分類した（第 41 図）。

Ⅰ類…奥壁が１段一石、若しくはそれを指向するもの。両袖ないし片袖のもの。(ex.H12 号墳、H18 号墳、H24 号墳)

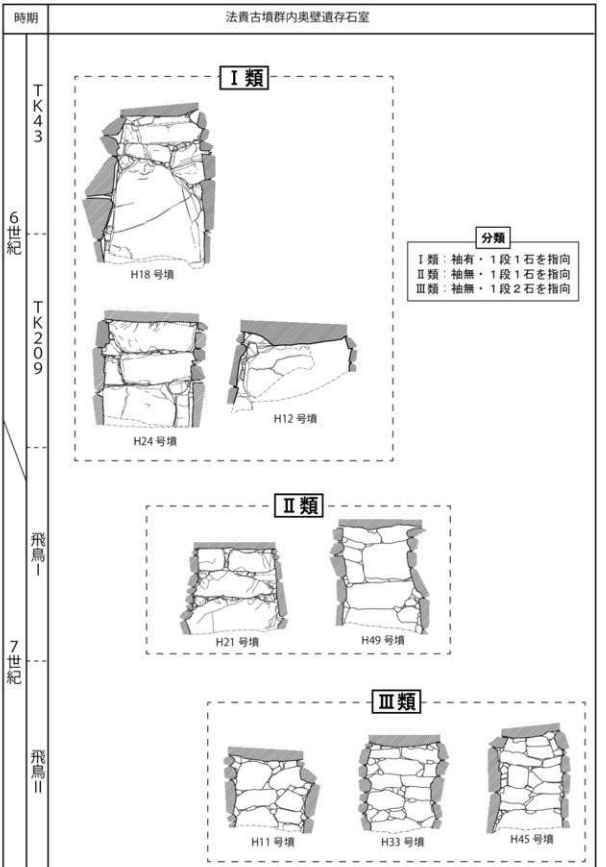
Ⅱ類…奥壁が１段一石、若しくはそれを指向するもの。無袖のもの。(ex.H21 号墳、H49 号墳)

Ⅲ類…奥壁が１段２石のもの。無袖のもの。(ex.H11 号墳、H33 号墳、H45 号墳)

これらの分類は一古墳群内での石室の系統差を示している可能性もあるが、ここでは仮に時期的変遷を示すものとして論を進めたい。このうち、実年代が想定可能なものは前述した H18 号墳、H24 号墳で、どちらもⅠ類の石室である。また、H21 号墳などのⅠ類と共通する奥壁を持つⅡ類の石室は、無袖であることからして有袖であるⅠ類に続く時期のものであろう。したがって、TK209 型式期頃に位置付けられる 24 号墳に続く時期、すなわち飛鳥Ⅰ期とするのが妥当である。なお、Ⅱ類の H49 号墳は開口部が埋没していて袖の有無が直接確認できないが、奥壁幅が無袖の H11 号墳と同様、１m以下となることから無袖の石室であると判断した。さらに、H11 号墳などのⅢ類とした石室は、無袖であることからⅡ類の前後に位置付けられるものである。しかし、奥壁が１段２石を基本とすることから、１段１石を指向するⅠ・Ⅱ類の間に位置付けることは難しい。したがって、Ⅱ類の後、飛鳥Ⅱ期とすべきであろう。なお、H33 号墳と H45 号墳も開口部が埋没していて袖の有無が直接確認できないが、H49 号墳と同様の理由から無袖の石室であると判断した。

以上のように、比較的残存状態の良い石室の構造を、実年代を想定できる H18 号墳と H24 号墳のそれと比較することでその年代を推定した。これによれば、現存する資料による限り、法貴古墳群の造営期間は６世紀後半から７世紀前半と判断することができる。

（志田）



※石材の外形線のみのものは、写真からトレースを行い、縮尺については可能な限り 1/60 に調整した。

第 41 図　法貴古墳群　石室変遷案（S ≒ 1/60）

第３章　宮条古墳群・宮条南古墳群

第１節　研究史

宮条古墳群・宮条南古墳群の存在が周知されたのは、他の亀岡盆地内の群集墳より遅く、1985 年発行の『京都府遺跡地図（第３版）第２分冊』（京都府 2002）において宮条古墳群 22 基、宮条南古墳群 6 基と報告されたのが初出である。これ以降では、新修『亀岡市史』に同じ内容が記載されているのみである（亀岡市 2000）。現在までに測量・発掘調査はなされておらず、その実態は不明であった。

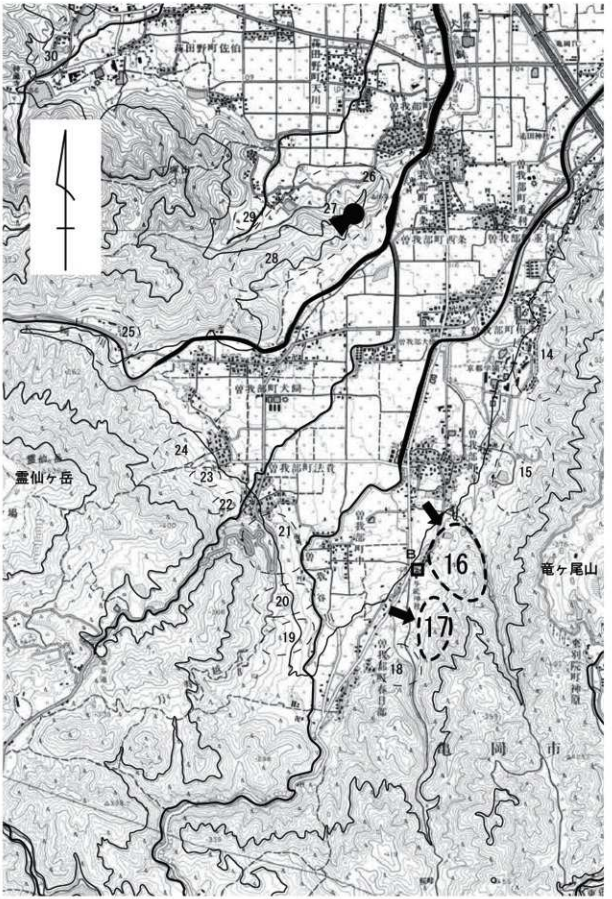
このような宮条古墳群・宮条南古墳群に対して、当研究会では 1998 年から 2001 年に測量調査を行い、その成果を機関誌『無』35 号から 37 号に掲載した。『無』37 号所収の石室実測図は、『近畿の横穴式石室』（横穴式石室研究会 2007）の付録ＤＶＤに収納された「近畿の横穴式石室資料集成」にも再録されている。しかし、『無』37 号では宮条 20 号墳の石室実測図のスケールが誤っており、「近畿の横穴式石室資料集成」でも修正されていない。また、宮条古墳群・宮条南古墳群の調査成果自体も、機関誌でその概要に触れたにすぎない。そこで、今回『無』35 号から 37 号所収の宮条古墳群・宮条南古墳群の測量調査成果を、原図を再トレースし新たな所見を加えながら再報告する。なお、本報告をもって当研究会が 1998 年から 2001 年に宮条・宮条南古墳群で行った測量調査の正報告としたい。

第２節　分布調査・略測の成果（第 42 図～ 44 図、第 11 表～ 12 表）

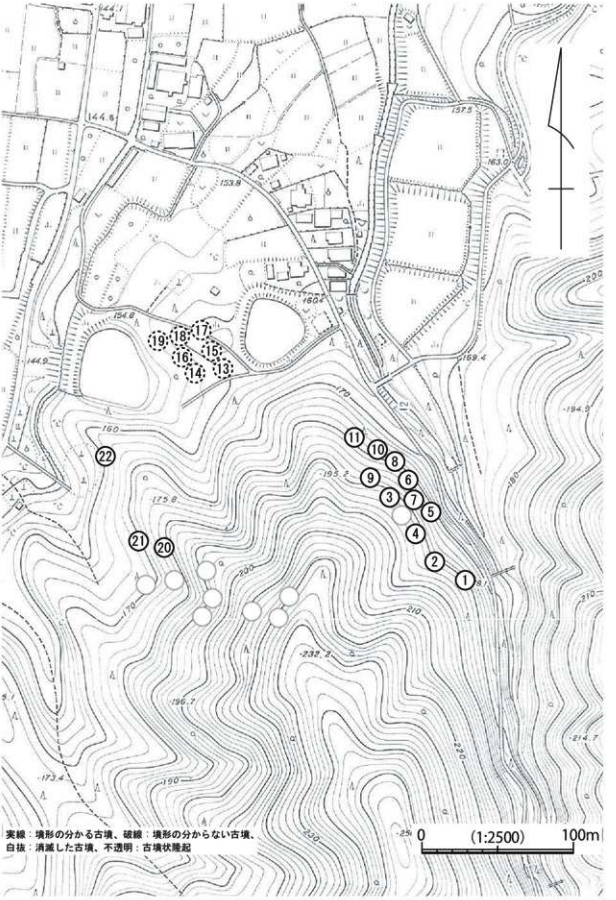
第１項　立地と分布

宮条古墳群は、亀岡市曽我部町域の龍ヶ尾山山麓の北西山麓に位置し、『京都府遺跡地図』（京都府 2001）では総数 22 基の群集墳と報告されている。確認された古墳はすべて円墳である。また、墳丘の陥没等から、埋葬施設は南方向に開口する横穴式石室が大半であるものと思われる。現在、2 号墳・20 号墳・21 号墳の石室が開口している。当研究会が行った分布調査の成果では 14 基が現存し、7 基（13 号墳・14 号墳・15 号墳・16 号墳・17 号墳・18 号墳・19 号墳）の消滅を確認した。さらに 12 号墳の 1 基のみ現地での確認ができていない。消滅かまた機関紙『無』37 号等では 9 基の古墳を新たに確認したと報告しているが、いずれも古墳状隆起であり、現地での再観察から古墳でない可能性が高い。以上のことから、本報告では詳述してないが、分布地図には 1998 年度の調査で確認した古墳状隆起の位置のみ記している。

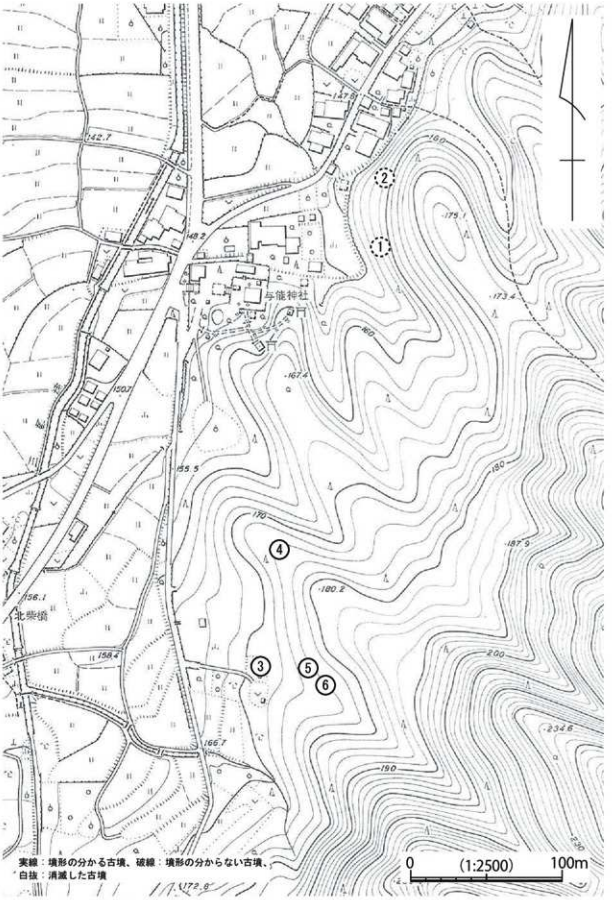
当群集墳は、大きくは龍ヶ尾山麓の北西に延びる地明谷西側の山腹に立地している。さらに細かく位置をみると、宮条古墳群が所在する尾根は平野部に下るにつれて支尾根に分岐しており、立地から 3 群に古墳のグルーピングが可能である。まず、標高 170 m から標高 190m 付近、分布範囲東側の支尾根東斜面の 1 号墳から 11 号墳をＡ群とする。次に、Ａ群とやや切り立つ谷筋を挟んで西に接する支尾根の標高 160 m から標高 220m 付近、尾根筋西斜面の 20 号墳から 22 号墳をＢ群とする。そして、全て消滅しているが、標高 150 から標高 160m 付近、尾根北端の緩やかな斜面地の 13 号墳



第 42 図　宮条古墳群、宮条南古墳群の位置（S=1/25,000）



第43図　宮条古墳群　分布図（1/2,500）



第 44 図　宮条南古墳群　分布図（1/2,500）

から 19 号墳をC群とする。C群とした範囲は、現在、削平され旧地形を留めていない。

宮条南古墳群は、宮条古墳群の南西の２つの尾根筋に位置する総数６基の群集墳である。全て円墳で構成される。埋葬施設は、墳丘の陥没等から、南西方向に開口する横穴式石室が大半であるものと思われる。宮条南古墳群の分布域は広いが、密集度が低く散漫な分布を示す。分布調査の結果４基が現存、２基の消滅を確認した。４号墳は、北西に延びる尾根の標高 174 m付近に立地する。３号墳、５号墳、６号墳は４号墳からやや離れて、４号墳が立地する尾根の南西斜面、標高 170 から標高 176 m付近に立地する。１号墳、２号墳は、４号墳から尾根を２つ挟んだ東側の尾根筋西斜面に位置し、『京都府遺跡地図』（京都府 2001）では標高 158 mから 166 m付近に立地していたとされるが、近年の用水路設置工事により消滅したと判断した。

（真鍋・志田）

第 11 表　宮条古墳群　一覧

古墳番号	墳丘				石室（横穴式石室）										遺跡台帳※3	備考
	墳形	規模		残存度※2	主軸方向	袖部	全長	玄室			羨道			残存度※2		
		径（辺）	高					長	高	幅	長	高	幅			
1	円	7.34	1.74											全壊	1 号墳	
2	円	12.5	2.1	完存	N315W	右片	3.3△	3.1	1.45△	1.35	0.2△	0.6△	0.95	完存	2 号墳	
3	円	6.3	1.7											全壊	3 号墳	
4	円	6.9	1.7											半壊	4 号墳	
5	円	6.4	1.41											半壊	5 号墳	
6	円	4.7	1.9											不明	6 号墳	
7	円	2.8	2.1											全壊	7 号墳	
8	円	2.04	1.82											半壊	8 号墳	
9	円	1.86	2.22											半壊	9 号墳	
10	円	4.13	1.55											不明	10 号墳	
11	円	6.89	1.98											半壊	11 号墳	
12														消滅？	12 号墳	
13														消滅	13 号墳	
14														消滅	14 号墳	
15														消滅	15 号墳	
16														消滅	16 号墳	
17														消滅	17 号墳	
18														消滅	18 号墳	
19														消滅	19 号墳	
20	円	11.5	3	完存	N5E	両袖	5.7△	2.8	1.45	1.5				完存	20 号墳	
21	円	8.3	2.25	完存	N30E									完存	21 号墳	
22	円	9.7	1.9											全壊	22 号墳	

※１　単位は m　※２　残存度は序章第３節を参照　※３　京都府遺跡地図は 2001 年度を参考　※４　規模の値は現状値である。

第 12 表　宮条南古墳群　一覧

古墳番号	墳丘				石室（横穴式石室）										遺跡台帳※3	備考
	墳形	規模		残存度※2	主軸方向	袖部	全長	玄室			羨道			残存度※2		
		径（辺）	高					長	高	幅	長	高	幅			
1															1 号墳	
2															2 号墳	
3	円	11.25	1.53											完存	3 号墳	
4	円	20.4												完存	4 号墳	
5	円	9.45	2.25			左片	5.38△			1.14				半壊	5 号墳	
6	円	13.25	1.45				7.5△			1.6				半壊	6 号墳	

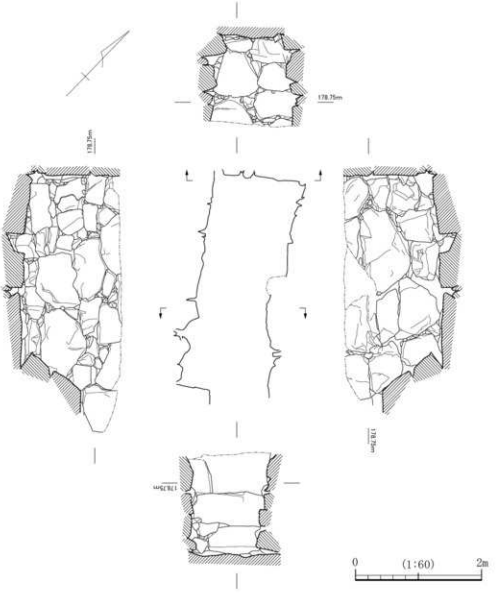
※１　単位は m　※２　残存度は序章第３節を参照　※３　京都府遺跡地図は 2001 年度を参考　※４　規模の値は現状値である。

第３節　宮条２号墳（第 45 図～ 46 図、写真番号 100 ～ 101）

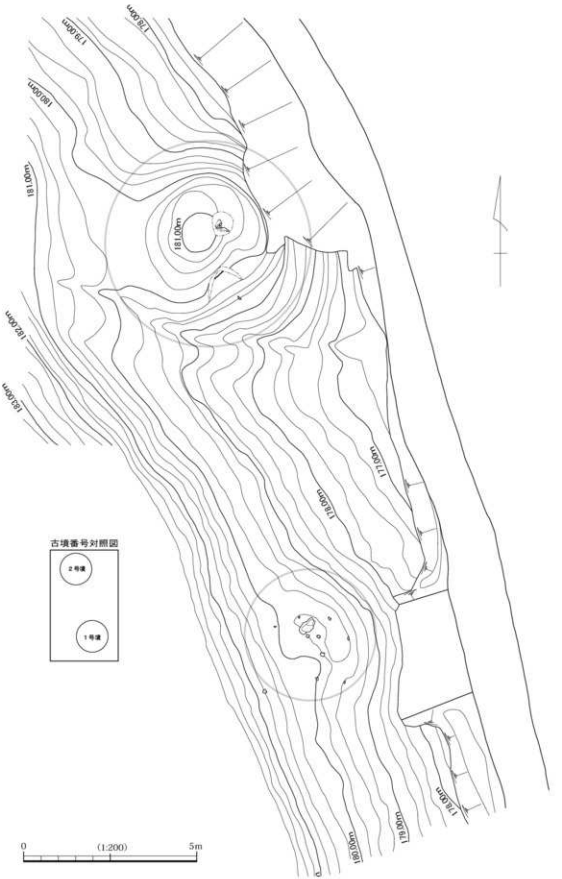
第１項　位置と墳丘

地明谷西側斜面の標高 178 mから 181 m付近に位置し、A群でも谷の奥まった所に立地している。墳丘は墳丘南側の標高 178.25 mを境に、コンターラインの間隔が広くなることから、墳丘西側の裾とし、同様に墳丘北側の標高 179 mを墳丘北裾の基準とする。さらに、墳丘北側の標高 180 mのコンターラインが湾入する部分も墳丘北裾の基準とすると、直径 11.5m の高さ 3m を測る円墳である判断できる。

墳丘は、東側を林道の造成のため大きく削平されおり、残存状態は悪い。墳丘の南東側には長さ 2.3 m×幅 1.3 mの陥没があり、横穴式石室の開口部が埋没したものと判断できる。また、墳頂ではやや東寄りに直径 1.4 mほどの陥没が見られる。この陥没は石室内部に達しており、ここから石室内に入ることができる



第 45 図　宮条２号墳　石室実測図（S=1/60）



第46図　宮条1号墳・2号墳　墳丘測量図（S=1/300）

第２項　横穴式石室

埋葬施設は南東方向に開口する右片袖の横穴式石室である。羨道が埋没しているものの、玄室左側壁の中央、最上段が一部崩れて外部に通じている。この開口部分と羨道方向から石室内に土砂が流入しており、本来の床面は埋没している。石室の全長は 3.3 m以上である。玄室は長さ 3.1 m、幅 1.35 m、高さ 1.4 m以上、羨道は長さ 0.2 m以上、幅 0.95 m、高さ 0.65 m以上を測る。

１）玄室

奥壁は長さ 0.6m ×高さ 0.4 ～ 0.65m 程の石材を中心として 1 段 2 石を基本とするが、各段で明確に目地が通るようにはなっていない。石材の隙間には小ぶりの石材を充填する。側壁は概ね 3 段から 4 段積みで、小ぶりの石材から長さ 1.2 m×高さ 0.7 m程の比較的大型の石材まで幅広い大きさの石材が使用されている。その傾向は右側壁で特に顕著で、大型石材の隙間を小ぶりの石材で充填した部分の割合が高く、左側壁と比べると石積みが乱雑な印象を受ける。

前壁は 2 段積みで、下段は幅 1.05 m以上×高さ 0.45 m、上段に幅 0.7m 以上×高さ 0.4 mの石材を用いている。上段の石材は長さが玄室幅に足りていないため、右側壁側を小ぶりの石材で補っている。また、前壁は下段よりも上段を玄室内に突出させているため、約 50°で玄室に内傾している面となっている。共に同じ傾斜であることから、前壁のみ意図的に傾斜させるような角度をもった石材を用いて架構したものと思われる。

２）羨道

羨道は埋没しているため、詳細は不明である。右袖部は、現状では 1 石が露出している。長さ 0.7 m×高さ 0.5 m以上の石材を使用している。左側壁の右袖に対応する部分は、羨道方向からの土砂の流入で埋没しており観察できない。2 号墳の石室の全体的な特徴として、前壁下端と前壁 1 段目上端のレベルで側壁、奥壁共に概ね目地が揃うことが指摘できる。下段の目地は 179m 付近、上段は 179.5m 付近で、石室を構築する際の作業単位であったと思われる。

（志田）

第４節　宮条 20 号墳（第 47 図～ 48 図、写真番号 102 ～ 105）

第１項　位置と墳丘

地明谷西側の北西に延びる支尾根の西斜面、標高 175m から標高 179 mの付近に位置し、B 支群の中では最高所の古墳である。墳丘は、南側の標高 175.75 mのコンターラインを境に、コンターラインの間隔が広がることから、この部分を南裾とし、東側の標高 178 mのコンターラインが湾曲する部分を東裾とする。以上から、直径 11.5m ×高さ 3.5m を測る円墳である。しかし、墳丘南側と西側のコンターラインが直線的になることがやや不安材料として残る。西側は急斜面になっていることから封土の流出によるもの、さらに墳丘南側の開口部から南西方向の斜面下方には、羨道部分の石材とみられる大型石材が 2 石確認でき、盗掘が著しかったことが伺える。以上のことから、墳丘南

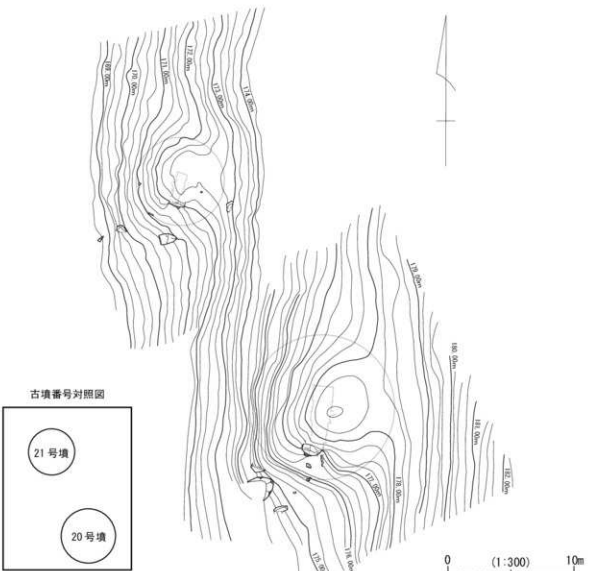
側と西側が改変を受けていることを考えられ、墳丘北側のコンターが円弧を描くようにめぐることから、円墳の可能性を指摘しておきたい。

第２項　横穴式石室

埋葬施設はほぼ真南に開口する両袖の横穴式石室である。開口部からの土砂の流入により、本来の床面は埋没している。石室の全長は、5.7m 以上である。玄室長 2.8m、玄室幅 1.5m、玄室高 1.45m 以上、羨道長 2.9m 以上、羨道幅 1.2m である。

１）玄室

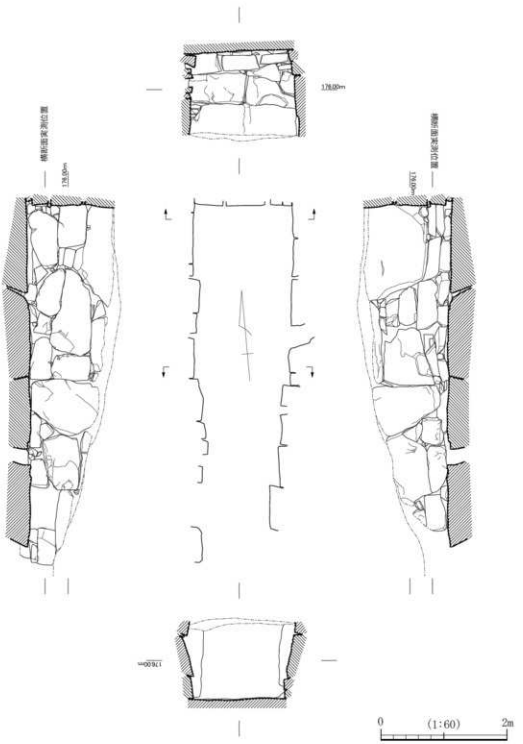
奥壁は、最下段（奥壁にむかって右側２段目と最下段は同一個体）に長さ 1.7m ×高さ 1.1m 以上の大型の石材を据える。なお、奥壁に向かって左側の２段目の石材も、本来は最下段の大型石材と同一個体の石材であり、石室構築時に何らかの理由により割れたものと思われる。これほどの大きさの石材の下に、さらに石材を据えているとは考えにくく、また袖部の立石状の石材の下に石材を据え



第 47 図　宮条 20 号墳・21 号墳　墳丘測量図（S=1/300）

ることも考えにくいため、玄室はほぼ基底石の上面が露出しているものと判断できる。

側壁は、右側壁の奥壁寄りに、奥壁最下段とほぼ同じ大きさの石材を据えている。またこの石材、奥壁最下段の石材、袖部の立石はほぼ同じ高さに揃えられている。また、奥壁基底石の上端である約176.2 mで、基底石の足りない部分を小ぶりの石材で補い、高さを揃えている。この特徴は側壁でも見られ、幅 0.6 ～ 1.6 m、高さ 0.4 ～ 1 m以上の大型の石材を横積みし、レベルを揃えている。そして、



第 48 図　宮条 20 号墳　石室実測図（S=1/60）

このレベルから天井石まで中型～小ぶりの石材を横積みしている。なお、本石室に前壁は無く、天井石のレベルは奥壁際から開口部にかけて一定である。

2）羨道

袖部については、前述したように本石室は両袖である。袖部には長さ 0.8 ～ 0.9 m×高さ 1.1 m以上の石材を立石として使用している。この立石が、右袖では直接天井石を受け、左袖は高さを合わせるためか 1 石天井石との間に入る。袖部は玄室側壁から約 0.2 ～ 0.3 m突出し、玄門の幅は 1.2 mとなる。羨道は、概ねこの幅で開口部に至る。羨道側壁は、大半が土砂により埋没しているため判然としないが、一部露出している部分の観察によれば、玄室の基底石上端と同じ高さまで長さ 0.9 ～ 1.2 m以上、幅 0.6 以上の大型の石材を横積みしている。そして、この高さから天井石まで中型～小ぶりの石材を横積みにする。したがって羨道側壁は玄室のそれと良く似た石積みをしていることが分かる。

以上のことから、20 号墳の石室は、玄室と羨道を一体のものとして構築したと考えられる。玄室、羨道共に大型石材の横積みによって一定の高さまで側壁を構築した後、中型～小ぶりの石材によって高さを調整し、奥壁際から開口部まで一定の高さで天井石を架構したのであろう。

（志田）

第５節　宮条 21 号墳（第 47・49 図、写真番号 106 ～ 108）

第１項　位置と墳丘

地明谷西側の北西に延びる支尾根の西斜面、標高 170m から標高 173 m付近に位置する古墳である。B 群が所在する尾根の西斜面で、20 号墳から 6 mほど斜面を北西に下った地点に位置している。墳丘は、西側の標高 171 mのコンターラインより下方のコンターラインが直線的なラインをとることから傾斜変換点とみることができ、この部分を西裾とする。また北側の標高 171 mから 172.5 mのコンターラインが湾入する部分を北裾とすると、径 7m、高さ 2m の円墳に復元できる。開口部の前方には、斜面下方に大型の石材が 2 点あり、石室を構成していたものである可能性がある。

20 号墳と 21 号墳が位置する場所は、やや緩やかな斜面であるが、これより下方は、急激に落ち込み、限られた場所に古墳が築造されている。

第２項　横穴式石室

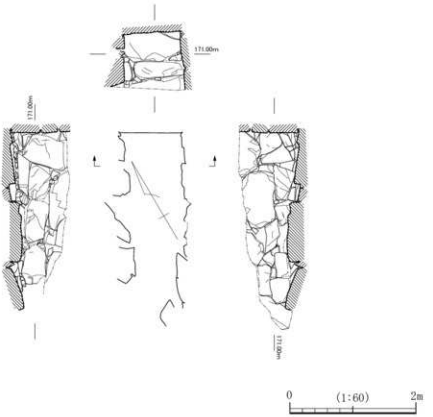
本古墳群で確認できる最小の石室で、全長 2.8m 以上、奥壁幅 0.95m、高さ 0.95 m以上の無袖の横穴式石室である。

開口部から土砂が流入し、本来の床面は埋没している。奥壁は幅 0.8 m～ 0.9 m以上、高さ 0.3 ～ 0.45 mの石材を横積みした 3 段からなり、1 段 1 石を指向する。2 段目は奥壁幅にわずかに足りず、右側壁寄りに小ぶりの石材を充填している。両側壁は幅 0.6 m～ 0.9 m、高さ 0.2 m～ 0.6 m以上の石材を横積みし 2 段積みを指向し、隙間を小ぶりな石材で充填する。

現状の側壁では立石など玄室と羨道を区分する構造は認められない。もっとも開口部よりの左側壁の石材も立石状の袖部にみえるが、転落した天井石である。また、石室開口部前面に散乱している

石材もわずかであり、石室長もさほど伸びないと考えらえる。以上のことから、袖部を持たない石室と考えらえる。

（志田）



第 49 図　宮条 21 号墳　石室実測図（S=1/60）

第６節　小結

宮条古墳群は、機関紙『無』35 号・36 号・37 号や『近畿の横穴式石室』の集成において、石室の情報が提示されていた。しかし機関紙『無』37 号において提示されていた石室実測図に縮尺の誤りがあったため、横穴式石室の集成においても誤りがそのままとなってしまっていた。今回その修正と古墳群全体の情報提示を行うことができた点は大きいといえる。

石室実測を行った３基の古墳はそれぞれに特徴がある。しかし、その特徴がほぼ同時期に展開していたのか、時間経過による石室構築の違いが表出しているのかは、時期を決定できる遺物の採集もなく、判断できない。今後の検討課題であろう。

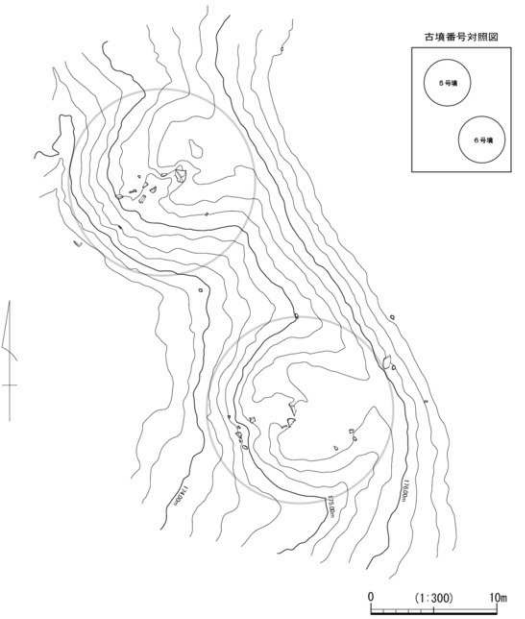
第２節でも述べたが、先輩諸氏の分布調査によって墳丘状隆起が認められたことが報告されていた。しかしながら、今回の報告に伴い実地での検討を行ったが、墳丘状隆起を再確認することはできなかった。経年による盛土の流出があったかは定かではないが、墳丘状隆起の詳細なデータが研究会に残されていなかったため、今回の報告では、確認されていた墳丘状隆起の位置のみを報告するにとどまっている。

（志田）

第７節　宮条南５号墳・６号墳（第 50 図）

宮条南５号墳と６号墳は、３号墳と４号墳と同様、龍ヶ尾山麓から北西に延びる尾根上に立地する。ただし、尾根先端の４号墳や、南西斜面下方に立地する３号墳とはやや距離を隔てており、散漫な分布を示す宮条南古墳群の中にあって、５号墳と６号墳は近接して立地している。５号墳と６号墳は尾根の南西斜面、標高 174 m～ 176 m付近に位置している。両墳に比高差はほとんどなく、コンターラインに沿って北に５号墳、南に６号墳といった立地である。湾入したコンターラインから、５号墳は径 15 m、高さ２mの円墳、６号墳は径 15 m、高さ 1.75 mの円墳であると判断できる。また、墳丘の隘没や石材の散乱状況から、５号墳・６号墳共に埋葬施設は南西に開口する横穴式石室であるものと思われる。

（志田）



第 50 図　宮条南５号墳・６号墳　墳丘測量図（S=1/300）

第４章　まとめ

今回、測量調査を実施した法貴峠古墳群、法貴古墳群、宮条古墳群、宮条南古墳群について、その成果を簡単にまとめておく。

法貴峠古墳群

既知の19基のうち、16基を確認した。確認できなかった古墳(5号墳･12号墳･19号墳)は、全て削平されたものと考えられ、石室材などの古墳の痕跡も確認することができなかった。石室石材の抜き取りなどにより破壊されているものもある一方で、1号墳･2号墳･9号墳は、ほぼ完全に石室と墳丘が残されている。特に9号墳の石室(全長10.5m以上･玄室幅4.7m､)は、法貴峠古墳群内でも群を抜いて大きく、さらに、6世紀後半の亀岡市域でも最大級である。3基の玄室規模は、1号墳:玄室長4.7 m×玄室幅2.3 m、2号墳:玄室長3.4 m×玄室幅1.8 m、9号墳：玄室長4.7 m×玄室幅2.3 mとなり、玄室比は概ね2：1となる。

法貴古墳群

既知の古墳総数（51基）及び分布状況と、今回の調査で得られたそれらとは照合できない部分も多分にあり、『京都府遺跡地図（第3版）第2分冊』(京都府2002）に記された古墳の号数（旧番号）及び分布状況と整合をつけることができなかった。したがって、この報告書独自の新番号を付加し、旧番号を照合できるものは一覧表（第8表）で対応関係を示している。今回の調査では59基を確認した。

当古墳群は、H19（B1）号墳という、箱式石棺に納められた改葬人骨が検出されたことで著名な古墳群であった。しかし、石棺自体は亀岡市文化資料館に露出展示されているものの、人骨や共伴遺物（須恵器小片・耳環）については永く所在不明であった。今回の報告書を刊行するにあたり、追跡調査を行った結果、耳環は京都教育大学に保管されていることが分かった（第2章第2節参照)。

石室実測は、石室が良好に残存し、かつ実測可能な程度に開口している4基の古墳を（H12号墳・H18号墳・H21号墳・H24号墳）対象とした。また、H18号墳とH24号墳は石室がほぼ完存しており、亀岡盆地における良好な資料といえる。このほか、石室が比較的良好に残存しているが実測を断念した古墳としてH11号墳・H33号墳・H45号墳・H49号墳がある

宮条古墳群

既知の22基のうち、12号墳及び消滅した7基（13号墳・14号墳・15号墳・16号墳・17号墳・18号墳・19号墳）を除く14基を確認した。3号墳については墳丘状隆起の可能性はあるが、詳細は不明である。石室の保存状態が良好であった2号墳・20号墳・21号墳の3基に対して石室実測を行った。特に20号墳は玄室から羨道までほぼ水平な天井をもち、袖石が一石で天井まで達するという亀岡市域でも類例のない特徴を有している。

宮条南古墳群

既知の６基すべて確認できた。石室はすべて破壊されており、内部を観察できるものはない。そのため、比較的良好に残存している５号墳と６号墳に対して墳丘測量を実施した。５号墳は直径 15 m×高さ２m、６号墳は直径 15 m×高さ 1.75 mの円墳である。

法貴峠９号墳は TK43 型式期に比定されており、亀岡盆地のように北部九州にみられる石室の影響が色濃い地域のなかで、石棚・石障を持っていないことから、北部九州以外からの影響のもとに築造されたものと理解されている（富山 2007a）。では、どのような影響により法貴峠９号墳が築造されたのかを触れておきたい。法貴峠９号墳が位置する、竜ヶ尾山と霊仙ヶ岳より北東方向へ派生する丘陵に挟まれた狭小な小地域内に分布する古墳の横穴式石室には、北部九州系の石室は全くみられない。それは、亀岡盆地と北摂地域をつなぐ元摂丹街道が霊仙ヶ岳を通りこの小地域と接続していることが大きな要因ではないだろうか。この狭小な小地域内にある、法貴峠２号墳・H18 号墳・紫雲寺裏山１号墳はいずれも、袖部が左片袖もしくは両袖であっても左袖が強調されている。亀岡盆地内で確認されている横穴式石室では、平面プランが左片袖となるものは、この狭小な小地域内に限られる。そして、近隣においては福知山や京都市右京区にも少なからず確認されるが、その属性が多く認められるの北摂地域である。つまり、これらの左片袖の横穴式石室は、元摂丹街道を介した北摂地域と亀岡の小地域との人・物・情報の交流を示すものになるのではないだろうか。

（真鍋・志田）

池田次郎　1998「法貴B1号墳および堀切六号横穴の改葬人骨と近畿におけるその類例」
『橿原考古学研究所論集』第十二集　吉川弘文館
石井清司　2008「平成19年度京都府の埋蔵文化財調査」京都府埋蔵文化財情報　第106号
石井智大　2007「横穴式石室に関する用語」-研究集会の開催にあたって、近畿地方を中心に-『研究集会近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
岩井武俊　1912「丹波國南桑田郡法貴の墓原」『歴史地理』第20巻第1号　日本歴史地理學會
太田宏明　2011『機内政権と横穴式石室』学生社
屋本英雄　1999「Ⅱ調査・研究報告　請田神社裏山古墳群発見の経緯について」『亀岡市文化資料館報』第7号
河上邦彦　1995「第二章　横穴式石室の構造論」『後・終末期古墳の研究』雄山閣
1979「大和の大型横穴式石室の系譜」『橿原考古学研究所論集』第四集　吉川弘文館
佐藤晃一・杉原和雄　1995「丹後・丹波」『全国前方後円墳集成』雄山閣
辰巳和弘　1983「密集型群集墳の特質とその背景」-後期古墳論（1）-『古代学研究』100古代學研究會
千賀久　1997「畿内の横穴式石室成立期の様相」『古文化論叢－伊達先生古稀記念論集－』伊達先生古稀記念論集刊行会
高橋克壽　1998「古墳の群石」『古墳時代の研究』7　雄山閣
土井孝則　2001「南丹波における横穴式石室の導入について」
『花園大学考古学研究論叢』花園大学考古学研究室20周年記念論集刊行会
平良泰久・高井健司　1992「第3章　丹波」『前方後円墳集成』-近畿編-　山川出版
高松雅文　2006「群集墳からみた地域支配（上）」-但馬地域の分析を中心に-『古代学研究』175古代學研究會
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
寺前直人　2007「7 渓道の変遷とその背景」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊　大阪大学文学研究科考古学研究室
富山直人　2000「畿内型石室成立以前」-南近江における横穴式石室の導入と展開から-『古代文化』財團法人古代學協會
2007a「地域別概況京都丹波の横穴式石室」『研究集会近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
2007b「大阪北部の横穴式石室」『考古学論究』-小笠原良彦-先生退任記念論集　真陽社
西弘海　1986『土器様式の成立とその背景』西弘海遺稿集刊行会　真陽社
細川康晴　1996「丹後における導入期横穴式石室の系譜」
『京都府埋蔵文化財論集』第3集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
1999「南丹地域の横穴式石室」
『考古学に学ぶ』-遺構と遺物-同志社大学考古学シリーズⅦ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
堀晋平・岡本健太郎・岩本雅人・中村健太　2005「石室古墳の測量」『久遠の知』第9集　京都府立亀岡高校
土生田純之　1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5名著出版
森下浩行　1999「畿内周辺の横穴式石室考（その二）-亀岡盆地における横穴式石室の導入と展開-
『考古学に学ぶ』-遺構と遺物-同志社大学考古学シリーズⅦ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
森下衛　2000「Ⅰ-6亀岡盆地における後期古墳群の動向」『地図と歴史空間』-足利健亮先生追悼論文集-
森田克行　1995「摂津」『全国前方後円墳集成』雄山閣
森岡秀人・吉村健　1992「第5章　摂津」『前方後円墳集成』-近畿編-　山川出版
安井良三　1970「改葬墓に関する2・3の問題」-法貴古墳群B1号墳に関連して-
『大阪市立博物館研究紀要』2大阪歴史博物館
横山浩一　2003「第三章　須恵器の叩き目」『古代技術史攷』岩波書店
渡辺智恵美　1997「耳環小考-製作技法・材質からみた分類-」『元興寺文化財研究所記念誌』
亀岡市　1960『亀岡市史』上巻
2000『新修亀岡市史』資料編第一巻
亀岡市教育委員会　1965「亀岡市法貴古ふん群B1号ふん第1次調査概報」『亀岡市文化財調査報告書』第1集
1966「亀岡市法貴古墳B1号墳第2次調査概報」『亀岡市文化財調査報告書』第2集
京都府　2002『京都府遺跡地図（第3版）第2分冊』
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2021.3.22「令和2年度発掘調査略報　3.法貴峠20号墳第2次」『京都府埋蔵文化財情報』第139号

図　　版

1　遠景　霊仙ヶ岳(北東から)
左：法貴峠古墳群
右：法貴古墳群

2　近景　霊仙ヶ岳(北東から)
法貴峠古墳群

3　近景　霊仙ヶ岳(東から)
法貴古墳群

図版 2

4　法貴峠 1 号墳墳丘
（南から）

5　法貴峠 1 号墳墳丘
（北東から）

6　法貴峠 1 号墳
奥壁裏側露出状況
（北東から）

7　法貴峠 1 号墳
開口部

8　法貴峠 1 号墳
前壁・袖部

左袖

右袖

9　法貴峠 1 号墳
袖部

図版 4

10　法貴峠１号墳
奥壁

11　法貴峠２号墳墳丘
（南から）
開口部（矢印）

12　法貴峠２号墳
羨道部天井石架構状況

13　法貴峠２号墳
前壁・袖部

14　法貴峠２号墳
奥壁

図版 6

15　法貴峠２号墳
袖部　左袖　右袖

16　法貴峠２号墳
右袖（側面から）

17　法貴峠３号墳
須恵器散乱状況
ピンポールが
須恵器採集地点

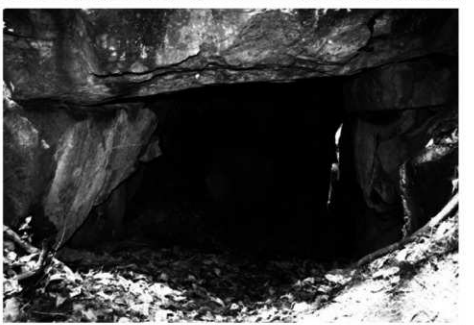
18　法貴峠６号墳　墳丘
（南から）

19　法貴峠６号墳
天井石転落状況
（西から）

20　法貴峠９号墳　墳丘
（南東から）

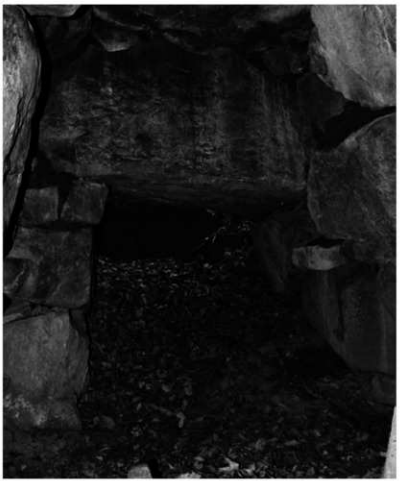
図版 8

21　法貴峠９号墳
開口状況



22　法貴峠９号墳
羨道部から石室へ

23　法貴峠９号墳
袖部　左袖　右袖



24　法貴峠 9 号墳
前壁・袖部

25　法貴峠 9 号墳
奥壁

図版 10

26　法貴峠 10 号墳
墳丘（東から）

27　法貴峠 11 号墳
墳丘（北から）

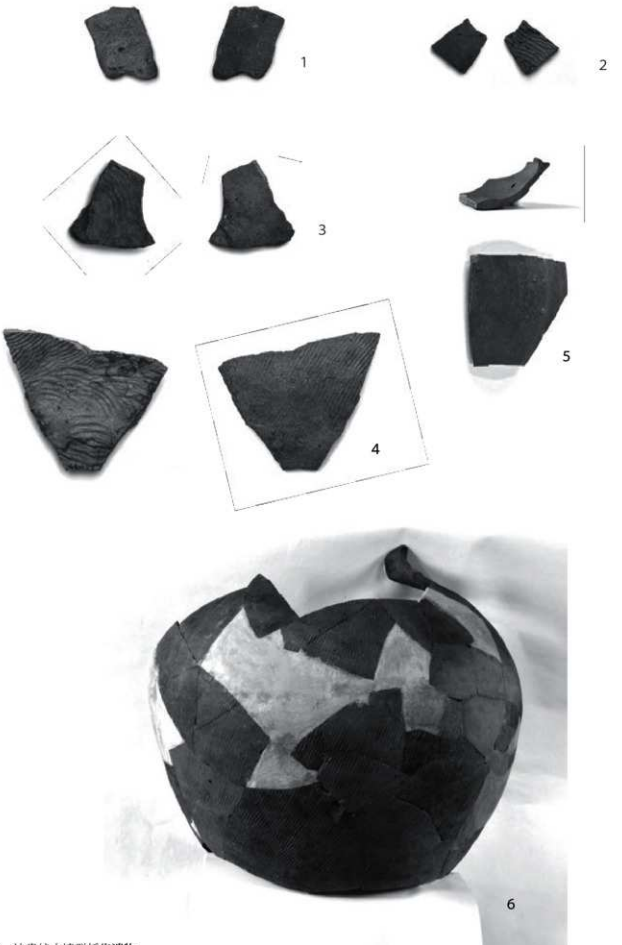
28　法貴峠 14 号墳
墳丘に散乱するゴミ
（東から）

29　法貴峠 17 号墳
（南から）

30　法貴峠 17 号墳
石室
玄室左側壁残存状況

31　法貴峠 18 号墳
羨門付近
（南から）

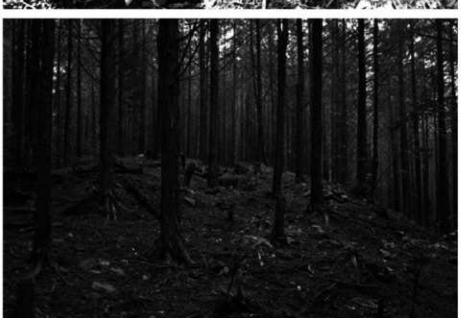
図版 12



32　法貴峠古墳群採集遺物

33　H 3号墳
墳丘（南から）

34　H 3号墳　石室
開口部天井石露出状況



35　H 7号墳
墳丘（南から）

36　H 7号墳　石室
右側壁残存状況

37　H 8号墳
石室か？（東から）

38　H11号墳
墳丘（南から）

39　H11 号墳
石室
開口部露出状況

40　H11 号墳
石室
奥壁から羨道方向へ

41　H11 号墳
石室
奥壁

図版 16

42　H12 号墳
墳丘（東から）

43　H12 号墳
石室正面（東から）

44　H12 号墳
墳丘
前壁直上崩落状況

45　H12 号墳
石室
奥壁埋没状況

46　H12 号墳
石室
前壁・袖部

左袖

右袖

47　H12 号墳
石室　袖部

48　H18 号墳　墳丘
（南東から）
白矢印：24 号墳

49　H18 号墳　石室
開口状況

50　H18 号墳
石室袖部　左袖　右袖

51　H18 号墳　石室
前壁・袖部

52　H18 号墳　石室
奥壁

53　H19 号墳　石柱
（南西から）
白矢印：18 号墳

54　H19 号墳　石柱
（北から）
白矢印：H20 号墳

55　H20 号墳　石室
天井石露出状況
（南西から）

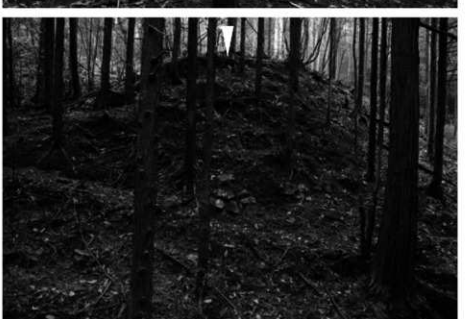
56　H20 号墳　石室
天井石露出状況
（東から）

57　H20 号墳　石室
奥壁

58　H21 号墳　墳丘
（南から）

59　H21 号墳　石室
奥壁

60　H18 号墳と 24 号墳
位置関係（南東から）



61　H24 号墳　墳丘
白矢印：石列
（東から）

62　H24 号墳　石列
石列露出状況
（南東から）

63　H24 号墳・H25 号墳
墳丘　（南から）
白矢印：H25 号墳　奥壁か？

64　H24 号墳　石室
開口状況
（南東から）

65　H24 号墳　石室
奥壁

66　H24 号墳　石室
前壁・袖部

左袖

右袖

67　H24 号墳　石室
袖部

68　H32 号墳
墳丘（南東から）

69　H32 号墳　石室
奥壁下半部残存状況

70　H32 号墳　石室
奥壁と左側壁残存状況

71　H33 号墳　墳丘
開口部露出状況
（南東から）

72　H33 号墳　石室
奥壁

73　H33 号墳　石室
奥壁から羨道方向へ

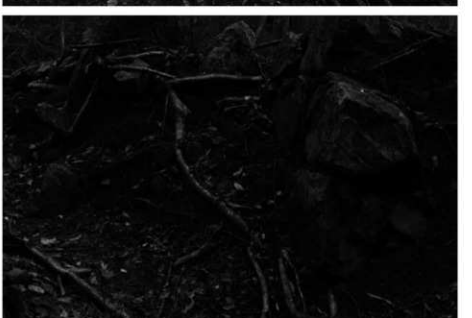
74　H41 号墳　墳丘
（南東から）

75　H41 号墳　石室
石室下半部残存状況

76　H41 号墳　石室
奥壁

77　H41 号墳　石室
左側壁残存状況
（北東から）

78　H43 号墳　石室
左側壁残存状況
（南西から）



79　H43 号墳　石室
両側壁残存状況
開口方向から

80　H44 号墳　石室
奥壁周辺残存状況
（南東から）

81　H45 号墳　墳丘
開口状況
（南から）

82　H45 号墳　石室
奥壁

83　H45 号墳　石室
奥壁から開口方向へ

84　H46 号墳　墳丘
（南から）

85　H46 号墳　石室
奥壁・左側壁残存状況

86　H47 号墳　墳丘
（南西から）

87　H47 号墳　石室
奥壁・天井石残存状況

88　H47 号墳　石室
左側壁立石　袖部か？

89　H47 号墳　石室
天井石崩落状況

90　H49 号墳　墳丘
羨道両側壁残存状況
（南から）

91　H49 号墳　石室
羨道右側壁残存状況

92　H49 号墳　石室
開口状況

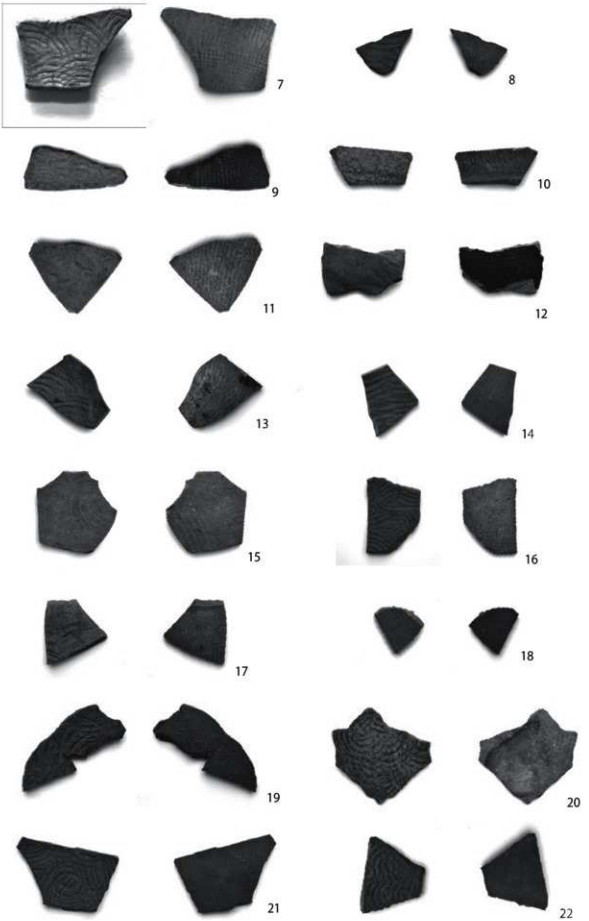
93　H49 号墳　石室
奥壁

94　H49 号墳　石室
奥壁から羨道方向へ
わずかに前壁が見える

95　H57 号墳　墳丘
（南から）

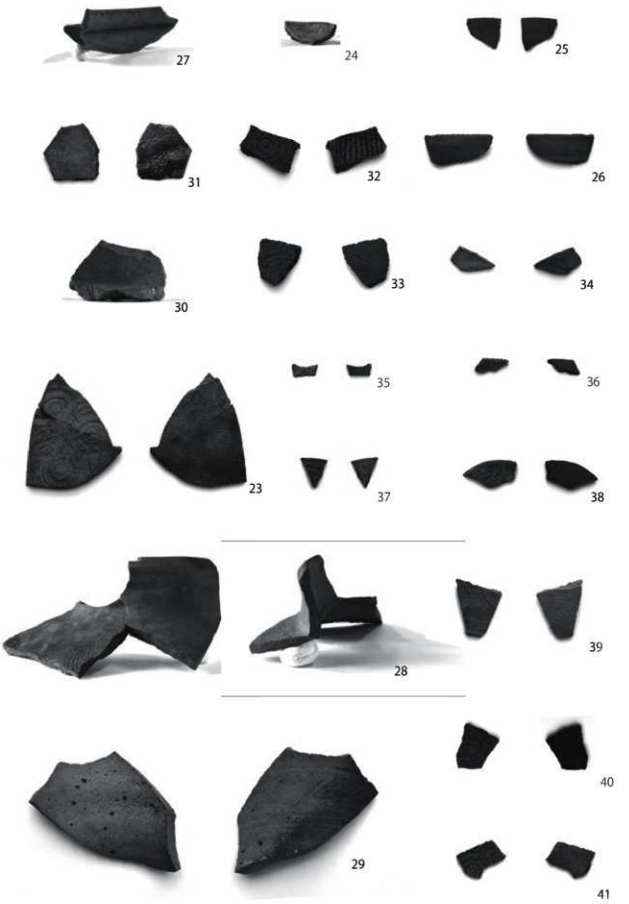
96　H57 号墳　墳丘
天井石露出状況
（北西から）

97　遠景：竜ヶ尾山南山麓
白矢印：宮条古墳群
（北西から）



98　法貴古墳群採集遺物①

図版 36



99　法貴古墳群採集遺物②

前壁

右袖

100　宮条２号墳　石室
前壁・袖部

101　宮条２号墳　石室
奥壁

102　宮条 20 号墳　墳丘
石室開口状況
（南西から）

103　宮条 20 号墳　石室
袖部

左袖

右袖

104　宮条 20 号墳　石室
袖部

105　宮条 20 号墳　石室
奥壁

106　宮条 21 号墳　墳丘
（南から）

107　宮条 21 号墳　石室
奥壁

108　宮条 21 号墳　石室
奥壁から羨道方向へ

109　作業風景
宮条 21 号墳
2001 年（春休み）

110　作業風景
法貴峠 2 号墳にて
2004 年春休み

111 作業風景
H21 号墳
2007 年春休み

報告書抄録

ふりがな	かめおかぼんちにおけるぐんしゅうふん　Ⅱ
書名	亀岡盆地における群集墳　Ⅱ
ふりがな	ほうきとうげこふんぐん　ほうきこふんぐん　みやじょうこふんぐん　みやじょうみなみこふんぐん
副書名	法貴峠古墳群　法貴古墳群　宮条古墳群　宮条南古墳群
シリーズ名	龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	志田真吾、真鍋貴匡
編集機関	龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会
所在地	〒612-0021　京都市伏見区深草塚本町67
発行年月日	2022.03.31

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間
法貴峠古墳群	亀岡市曽我部町中・法貴	26206	52	34°58′51″	135°32′23″	2002年～2006年
法貴古墳群	亀岡市曽我部町森山		51	34°59′11″	135°32′02″	2005年～2009年
宮条古墳群	亀岡市曽我部町寺		161	34°58′52″	135°33′12″	1998年～2001年
宮条南古墳群	亀岡市曽我部町東桜峠		160	34°58′42″	135°33′03″	2000年

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
法貴峠古墳群	古墳	古墳時代	古墳	須恵器（甕、高坏）	
法貴古墳群	古墳	古墳時代	古墳	須恵器（甕） 土師器（皿） 耳環	法貴B1号墳1971年に教育委員会によって調査済。
宮条古墳群	古墳	古墳時代	古墳 列石		
宮条南古墳群	古墳	古墳時代	古墳		

要約

1998年から2009年にかけて龍谷大学考古学研究会が実施した、京都府亀岡市に所在する古墳時代後期の群集墳、法貴峠古墳群・法貴古墳群・宮条古墳群・宮条南古墳群の測量調査報告である。当研究会で確認した古墳の総数は、法貴峠古墳群16基（19基）・法貴古墳群59基（51基）・宮条古墳群14基（22基）・宮条南古墳群6基（6基）である。括弧内は京都府遺跡地図にある古墳の総数である。

各古墳群において古墳が密集する範囲の墳丘測量に加えて、法貴峠古墳群で1基、法貴古墳群で4基、宮条古墳群で2基の横穴式石室の石室実測を行なった。法貴峠古墳群・法貴古墳群では、6世紀中ごろに位置づけられるとみられる資料を確認した。

法貴古墳群では過去にH19（B1）号墳が府市教育委員会により調査され、組合式石棺から2体の改葬人骨と一対の耳環が出土した。耳環は長く所在不明となっていたが、追跡調査で京都教育大学に所蔵されていることを確認し、今回併せて報告することとした。

編集後記

調査を終了して13年の時間を経て、ようやく報告書の刊行にこぎつくことができました。刊行できましたのも、関係各位の方々のご厚情あってこそです。末筆になりましたが、これまでご支援いただいた先生先輩後輩諸氏に御礼申し上げます。

龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会調査報告書　第6集

『亀岡盆地における群集墳　Ⅱ』

法貴峠古墳群

法貴古墳群

宮条古墳群

宮条南古墳群

発行年月日

2022. 03. 31

編集・発行

龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会

〒612-0021 京都府京都市伏見区深草塚本町67

印刷

三星商事印刷株式会社